

*Graduate School of Letters*

# TEACHING STAFF 2024

中央大学大学院 教員紹介

## | 文学研究科

# 文学研究科

【備考：指導教授の希望について】 ※本研究科受験予定の方は下記の点にご注意ください。

- 印は2024年度休講（研究促進期間等）。
- \*印は2025年3月退職予定のため、指導教授に希望できません。
- ◎印は2025年度休講予定のため、原則として指導教授に希望できません。
- ★印は2026年3月退職予定のため、2026年度に指導教授の変更が必要となります。
- (前)印は前期課程のみ指導教授に希望できます。
- 印は指導教授に希望できません。ただし(後)印の表記がある場合は、博士後期課程の指導教授には希望できます。これらは変更となる場合がありますので、ご了承ください。

国文学専攻			
身分	氏名	備考	ページ
教授	宇佐美 毅		1
教授	小野 泰央	◎	2
教授	鈴木 俊幸		3
准教授	富塚 昌輝	(前)	4
教授	中川 照将		5
教授	藤原 浩史	○	6
教授	山下 真史		7
教授	吉野 朋美		8
特任教授(文学)	池田 幸恵		85
兼任講師	高橋 明彦		85
兼任講師	野中 潤		85
兼任講師	堀川 貴司		85
兼任講師	松村 真佐子		85
兼任講師	山中 剛史		85

英文学専攻			
身分	氏名	備考	ページ
教授	大田 美和		9
教授	兼武 道子		10
准教授	久保 尚美	(前)	11
教授	高尾 直知	◎	12
教授	丹治 竜郎	○	13
教授	デーブル, ジョシア ポール		14
教授	中尾 秀博		15
准教授	中野 学而	(前)	16
教授	平川 眞規子		17
教授	マシューズ, ジョン	○	18
教授	松井 智子		19
教授	若林 茂則		20
准教授(理工学)	福田 純也		85
兼任講師	矢野 雅貴		85

独文学専攻			
身分	氏名	備考	ページ
教授	磯部 裕幸		21
教授	高橋 慎也	*	22
准教授	フジヤク, オルガ	(前)	23
教授	縄田 雄二		24
准教授	羽根 礼華	(前)	25
教授	林 明子		26
兼任講師	シュミット, マリア・ガブリエラ		85

仏文学専攻			
身分	氏名	備考	ページ
教授	阿部 成樹	○	27
准教授	泉 美知子	(前)	28
教授	小野 潮	★	29
准教授	学谷 亮	(前)	30
教授	田口 卓臣		31
教授	フェリエ, ミカエル フランキー		32
准教授	前之園 望	(前)	33
兼任講師	望月 典子		85

中国言語文化専攻			
身分	氏名	備考	ページ
教授	飯塚 容	*	34
教授	石村 広		35
教授	榎本 泰子		36
教授	及川 淳子		37
教授	材木谷 敦		38
教授(法学)	遠藤 雅裕		85
兼任講師	李 佳樑		85

日本史学専攻			
身分	氏名	備考	ページ
教授	小林 謙一		39
准教授	清水 善仁	(前)	40
准教授	志村 佳名子	(前)	41
教授	白根 靖大		42
教授	西川 広平		43
教授	宮間 純一	◎	44
教授	山崎 圭	○	45
特任教授(文学)	大西 信行		85
兼任講師	榎本 淳一		85
兼任講師	榎原 雅治		85
兼任講師	落合 功		85
兼任講師	加藤 聖文		85
兼任講師	櫻井 準也		85
兼任講師	佐々木 憲一		85
兼任講師	藤實 久美子		85
兼任講師	福嶋 紀子		85
兼任講師	村上 裕章		85
兼任講師	渡辺 浩一		85

東洋史学専攻			
身分	氏名	備考	ページ
教授	阿部 幸信	○	46
准教授	木村 拓		47
教授	新免 康		48
教授	鈴木 恵美		49
教授	高橋 宏明		50

西洋史学専攻			
身分	氏名	備考	ページ
教授	石橋 悠人	◎	51
教授	唐橋 文		52
教授	杉崎 泰一郎		53
教授	鈴木 直志		54
教授	堀内 隆行		55
兼任講師	松岡 昌和		85
兼任講師	山田 雅道		85

哲学専攻			
身分	氏名	備考	ページ
教授	青木 滋之		56
教授	大川 真	○	57
教授	出村 和彦		58
教授	中村 昇		59
教授	水上 雅晴		60
教授(理工学)	寺本 剛		86
兼任講師	伊佐敷 隆弘		86
兼任講師	日野 慧運		86

社会学専攻			
身分	氏名	備考	ページ
教授	天田 城介		61
教授	首藤 明和		62
教授	新原 道信		63
教授	野宮 大志郎	*	64
教授	矢野 善郎		65
教授	山田 昌弘		66
兼任講師	高山 真		86
兼任講師	前田 悟志		86

社会情報学専攻			
身分	氏名	備考	ページ
教授	飯尾 淳	(後)	67
教授	小山 憲司		68
教授	辻 泉		69
教授	松田 美佐		70
教授	安野 智子		71
教授	野宮 大志郎		64
兼任講師	尾崎 知伸		86
兼任講師	諸橋 奏樹		86
兼任講師	李 東真		86

教育学専攻			
身分	氏名	備考	ページ
教授	池田 賢市	◎	72
教授	下司 晶		73
教授	高木 雅史		74
教授	濱谷 佳奈	(前)	75
教授	眞鍋 倫子		76
教授	富田 拓郎		79
兼任講師	青柳 宏幸		86
兼任講師	大森 直樹		86
兼任講師	虎岩 朋加		86
兼任講師	星野 真澄		86
兼任講師	森 一平		86

心理学専攻			
身分	氏名	備考	ページ
教授	有賀 敦紀		77
教授	高瀬 堅吉		78
教授	富田 拓郎	○	79
教授	中村 菜々子		80
教授	緑川 晶		81
教授	山口 真美	◎	82
教授	山科 満		83
兼任講師	石川 健太		86
兼任講師	遠藤 幸彦		86
兼任講師	大宮 宗一郎		86
兼任講師	金沢 創		86
兼任講師	笹尾 敏明		86
兼任講師	四ノ宮 美恵子		86
兼任講師	洪井 進		86
兼任講師	荘島 宏二郎		86
兼任講師	高野 公輔		86
兼任講師	高橋 康介		86
兼任講師	千田 若菜		86
兼任講師	徳丸 享		86
兼任講師	中根 千景		86
兼任講師	長谷川 恵美子		86
兼任講師	水島 栄		86
兼任講師	山田 理沙		87
兼任講師	山本 淳一		87

共通科目			
教授	尹 智鉉		84
兼任講師	中野 玲子		87



う さ み たけし  
宇佐美 毅 / USAMI Takeshi 教授

〉 専門分野

日本近現代文学、現代文化論

〉 研究キーワード

近代、現代、文学、文化、小説、テレビドラマ、フィクション

〉 最終学歴・学位・取得大学

博士（文学）（中央大学）

〉 問い合わせ先

usami●tamacc.chuo-u.ac.jp

〉 リンク

[研究者情報データベース](#)

[中央大学宇佐美毅研究室](#)

[フィクションのチカラ（ブログ）](#)

◆ 研究内容の紹介

もともとは日本近代文学成立期（1870～80年代）の小説表現研究から出発しました。主な成果は『小説表現としての近代』（2004年）です。次に村上春樹をはじめとする現代文学を歴史的観点から考察し、明治期以降の日本の小説史に位置づける研究をしてきました。この研究の主な成果は、編著『村上春樹と一九八〇年代』『村上春樹と一九九〇年代』『村上春樹と二十一世紀』（千田洋幸と共編著、2008・2012・2016年）にまとめられています。その後は、現代文化論、フィクション論の一環としてのテレビドラマ研究に取り組んでいます。テレビドラマ研究では、脚本家論や戦後社会史との関係も重視しています。この研究の主な成果は、単著『テレビドラマを学問する』（2012年）にまとめられています。

◆ 主な論文・著書

- 『テレビドラマを学問する』（中央大学出版部、2012年8月）
- 『村上春樹と二十一世紀』（おうふう、2016年9月）
- テレビドラマ学際的分析の試み—『家政婦のミタ』を例に— 『中央大学文学部紀要』通巻 259号（2016年3月） ※林明子、ヒラリア・ゴスマンと共著
- 村上春樹作品における『羊をめぐる冒険』の位置 『中央大学文学部紀要』通巻 274号（2019年3月）
- 恋愛ドラマ不毛といわれる時代に—「いつかこの恋を思い出してきっと泣いてしまう」論 青土社『ユリイカ』、2021年2月

◆ 主な担当科目

現代文学研究B、現代文教材研究、現代文学特殊研究A、現代文学特殊研究B

◆ メッセージ

大学院生の目標は大きく分けて二つあると思います。一つは日本文学や現代文化の研究能力を磨き、それを一定の成果（修士論文や博士論文）に結びつけていくこと。もう一つは、それらの研究を通して、将来どのような分野に進んでも必要となる分析力や思考力を身につけていくこと。どのような目標を持つ大学院生に対しても、大学院で学ぶ期間が有意義なものとなるよう、そのために必要な指導や助言をしていきたいと思っています。



おの やすお  
小野 泰央 / ONO Yasuo 教授

〉 専門分野

日本漢文学

〉 研究キーワード

平安朝漢文学、五山文学、近世漢文学、林羅山

〉 最終学歴・学位・取得大学

博士（文学）（中央大学）

〉 問い合わせ先

yasuo●tamacc.chuo-u.ac.jp

〉 リンク

[研究者情報データベース](#)

◆ 研究内容の紹介

平安時代の漢詩文と和文における漢詩文の影響、室町時代特に五山文学における抄物（漢詩文に注釈した書物）における中国詩論の影響、江戸時代における明代清代の文学理論の影響を研究しています。

◆ 主な論文・著書

- 『平安朝天曆期の文壇』（風間書房 2008.10）
- 『中世漢文学の形象』（勉誠出版 2011.11）

◆ 主な担当科目

日本漢文学研究B、漢文教材研究、日本漢文学特殊研究A、日本漢文学特殊研究B



すずき としゆき  
鈴木 俊幸 / SUZUKI Toshiyuki 教授

〉 専門分野

日本近世文学・書籍文化史

〉 研究キーワード

薦屋重三郎、書籍流通、出版、戯作

〉 最終学歴・学位・取得大学

中央大学大学院文学研究科国文学専攻博士後期課程単位修得退学

〉 問い合わせ先

tsuzuki002r●g.chuo-u.ac.jp

〉 リンク

[研究者情報データベース](#)

◆ 研究内容の紹介

19世紀日本における戯作等小説類を中心に研究を進めるとともに、文芸の展開とも密接な関係のある書籍や摺物の文化を総合的に研究している。つまり、書籍・摺物がどのように誰によって制作されたか、またそれはどのように流通したか、さらにどのように享受されていったかという書籍文化のさまざまな局面を具体的な史料を用いて描き出すことに努めてきた。そして、書籍の文化の総体が時代とともにどのように動いていったか、また時代をどのように動かしていったかということ、明治中期までを視野に入れながら考察して今に至っている。現在は、これまで史料として取り上げられることのなかったものを史料化してこの分野の研究方法の幅を広げていくことに注力している。

◆ 主な論文・著書

- 『出版文化のなかの浮世絵』(共著、鈴木俊幸編)勉誠出版、2017年10月
- 『近世読者とそのゆくえー読書と書籍流通の近世・近代』平凡社 2017年12月
- 『信州の本屋と出版ー江戸から明治へ』高美書店、2018年10月
- 『書籍文化史料論』勉誠出版、2019年5月
- 『〈作者〉とは何かー継承・占有・共同性ー』(共著、ハルオ・シラネ 鈴木登美 小峯和明 十重田裕一編)岩波書店、2021年3月

◆ 主な担当科目

近世文学研究A、近世文学研究B、近世文学特殊研究A、近世文学特殊研究B



とみつか まさき  
**富塚 昌輝** / TOMITSUKA Masaki 准教授

〉 専門分野

日本近代文学

〉 研究キーワード

小説、批評、読書、地域文学

〉 最終学歴・学位・取得大学

博士（文学）（中央大学）

〉 問い合わせ先

tomitsuka●tamacc.chuo-u.ac.jp

〉 リンク

[研究者情報データベース](#)

◆ 研究内容の紹介

わたしは、高校まで野球に没頭しており、文学とは縁遠い暮らしを送ってきました。大学で文学部にすすんだとき、まわりの学生が文学談義に花を咲かせているなかで、一人ぼつねん蚊帳の外、異世界に入り込んでしまったのではないかとの思いを抱いたものでした。

このときから、世の中は文学が好きな人の集まる世界と、文学に興味がない人の集まる世界とに分けられているのではないかと、そしてそこではお互いの無理解が生じているのではないかと思うようになりました。

そこで、わたしは、文学が好きな人には「文学が好き」「文学は面白い」という曖昧な言葉ではなく、文学を書くこと・読むことの意義や役割を伝える言葉を探り当てて欲しいと思い、また、文学に興味がない人に対しては、文学の個人的・社会的意義について思いをいたしてもらい、少しでも文学に関心を持って欲しいと思うようになりました。二つの世界の架け橋になる言葉をつくること、目下のところ、わたしの研究テーマです。

こうした課題に対して、具体的に二つの方向からアプローチしています。

一つめは、日本近代文学が成立した時期を対象として、近代小説や近代批評がどのように成立したのかという問題について考えることです。坪内逍遙の『小説神髓』には「小説の主脳は人情なり世態風俗これに次ぐ」という有名な言葉があります。近代文学の成立期には、このように近代文学ジャンルについて根本的に思考しようとする姿勢を持った文学作品や評論作品が多くあります。坪内逍遙、二葉亭四迷、森鷗外、樋口一葉、夏目漱石などなどの文学作品を読解することを通して、近代文学の特質や意義について考えていくことを目指しています。

二つめのアプローチは、地域や生活に根ざした文学活動の実態について明らかにすることです。これまでの日本近代文学研究では、おもに中央文壇や商業出版の世界で活躍した有名な作家や批評家が研究対象とされてきました。しかし、地域での文学活動に目を向けてみると、多くの無名の作家たちが同人誌を発行したり、地方新聞に作品を掲載したりして旺盛な文学活動を展開していました。そうした人たちの文学に対するモチベーションを探ることで、人が生きる中で文学を書くことや読むことがどのような意味を持つのかという、文学の持つパワーの所在を明らかにしたいと思っています。

特に、現在は、徳島県南で農業を本業としながら文学を書き続けた悦田喜和雄という作家に注目しています。悦田の作品を読んでいると、相当にきつい仕事をして身体が疲れ切っているにもかかわらず、なぜ文学を書くことをやめようしないのかという疑問がわいてきます。文学の何が、そんなに彼を引きつけるのか。悦田の文学活動を見ることを通して、人は仕事（せまい意味での「役に立つ」こと）だけで生きているのではないのだということを、今さらのことながら確かめることができるのです。

◆ 主な論文・著書

- 『近代小説（ノベル）という問いー日本近代文学の成立期をめぐってー』翰林書房、2015年9月
- 「序文をめぐる人々ー依田学海『学海日録』を素材としてー」『近代文学合同研究会論集』2016年1月
- 「近代批評ジャンル成立の一側面ーノルマントン号探検訴訟とその周辺ー」『言語社会』2019年3月
- 「資料紹介 悦田喜和雄の投書家時代ー『文章世界』『婦人公論』に掲載された投書作品の紹介ー」『中央大学国文』2020年3月
- 「悦田喜和雄の童話作品ー「松太と鉄砲」の紹介」『平成31年度総合科学部創生研究プロジェクト経費・地域創生総合科学推進経費報告書』2020年3月

◆ 主な担当科目

近代文学研究A、近代文学研究B

◆ メッセージ

近年、文学に対する風当たりが強くなっているように感じます。ただ、近代文学の歴史を見るならば、そのはじめから文学に対する風当たりが強かったことがわかります。というのも、近代文学ではいわゆる「役に立つ」世界では否定的に評価されてしまう事柄（人間の弱さ、醜さなど）を飽きずに描き続けてきたからです。人間や社会を理解するためには「役に立つ」世界ばかりを見てはダメだと思うのですが、どうなのでしょう。



なかがわ てるまさ

中川 照将 / NAKAGAWA Terumasa 教授

〉 専門分野

平安物語文学

〉 研究キーワード

源氏物語、本文研究、古注釈、享受史、文化史

〉 最終学歴・学位・取得大学

博士（文学）（大阪大学）

〉 問い合わせ先

nterumasa001q@g.chuo-u.ac.jp

〉 リンク

[研究者情報データベース](#)

◆ 研究内容の紹介

意外と知られていないことだが、平安文学作品に関しては作者が書いた原本は現存しない。しかし、わたしたちの目の前には、平安時代に作られたとされる作品たちが存在している。ここで素朴な疑問を感じないだろうか。原本が現存していないのに、なぜ、その作品を読むことができるのか？ そして、そもそも目の前に存在する“平安文学作品”とは、ナニモノなのか？

例えば、『源氏物語』を見てみよう。『源氏物語』が成立したのは、およそ 1000 年頃のこと。作者は紫式部である。これらのことは教科書にも国語便覧にも明記されており、いわば当たり前のことである。ただ、明らかなのは、ここまで。実は、紫式部が、『源氏物語』をどの巻から書き始めたのか、それ以前に『源氏物語』のすべてを紫式部自身が書いたものであったどうかさえわかっていない。その理由は、紫式部が書いた『源氏物語』原本が残っていないことにある。

こうした“わからない”という事実は、『源氏物語』のみにとどまるものではない。原本が残っていないのは、他の平安文学作品に関しても同じだからである。ならば、『宇津保物語』や『落窪物語』などの物語は、どのように作られ、どのように変容しながら現在に至っているのか。また『蜻蛉日記』『更級日記』などの日記、『枕草子』などは、どうだったのか。それらの現象と、それに関わる人々の意識とは、どういったものだったのかについて、本文・古注釈書をはじめ、絵画資料・能などの伝統文化、各地域に見られる文学碑などの享受資料を通して考えている。

◆ 主な論文・著書

- 『源氏物語』の落葉宮はどの「小野」に移り住んだか—岩戸落葉神社と三つの「小野」、『紀要一言語・文学・文化』（中央大学文学部）、129号、2022年。
- 「『源氏物語』本文系統分類一覧(2)一末摘花」、『紀要一言語・文学・文化』（中央大学文学部）、127号、2021年。
- 「『源氏物語』の巻々はどのような順番で作られたか?」、『古典文学の常識を疑う』、勉誠出版、2017年。
- 『『源氏物語』という幻想』（勉誠出版）、2014年
- 『テーマで読む源氏物語論 4 紫上系と玉鬘系—成立論のゆくえ』（共編著）（勉誠出版）、2010年

◆ 主な担当科目

中古文学研究B、古文教材研究、中古文学特殊研究A、中古文学特殊研究B

◆ メッセージ

さまざまな問題を解くカギは、古い文献だけに隠されているわけではありません。身の周りにあるさまざまな事象を、固定観念にとらわれず、自由に、そして正確に捉えられるようになることを目指して、ともに学んでいきましょう。





ふじわら ひろふみ  
藤原 浩史 / FUJIWARA Hirofumi 教授

〉 専門分野

国語学（日本語学）

〉 研究キーワード

意味論、文章論、平安和文、枕草子

〉 最終学歴・学位・取得大学

東北大学大学院文学研究科博士課程後期課程中退・文学修士（東北大学）

〉 問い合わせ先

fujiiwara●tamacc.chuo-u.ac.jp

〉 リンク

[研究者情報データベース](#)

◆ 研究内容の紹介

平安時代の語彙・文法の意味論的な研究をしています。その方法論を用いて『枕草子』の文章構造を考えています。『枕草子』の文章は、一見単なることがらの羅列に見えますが、一貫した構文選択にもとづいて、配列が計算された、論理的な文章であることがわかります。それを読み解いていくと、このテキストが、人間の性質や社会のしくみを論考・解明していったものであることが明らかになります。千年前の天才の思想の再構築を目指しています。

◆ 主な論文・著書

- 「『枕草子』の対話的な文章構造」(高田博行・小野寺典子・青木博史編『歴史語用論の方法』ひつじ書房, 2018年5月)
- 「『枕草子』「もの」型章段の文章構造」(『紀要』123号, 2019年3月15日, 中央大学文学部, p.(35)-(65))
- 「『枕草子』「は」型章段の文章構造」(『紀要』125号, 2020年3月10日, 中央大学文学部, p.(1)-(35))
- 「『枕草子』の情報構造」(『中央大学国文』63号, 中央大学国文学会, 2020年3月25日, p214(37)-197(54))
- 「『栄花物語』の語彙」(佐藤武義編『シリーズ日本語の語彙2 平安時代の語彙』朝倉書店, 2021年7月1日, p99-p114)

◆ 主な担当科目

国語学研究A、国語学研究B、国語学特殊研究A、国語学特殊研究B



やました まさふみ  
山下 真史 / YAMASHITA Masafumi 教授

〉 専門分野

日本近代文学

〉 研究キーワード

昭和文学、中島敦

〉 最終学歴・学位・取得大学

東京大学大学院人文科学研究科博士課程中途退学

〉 問い合わせ先

[こちらのフォームよりお問合せください。](#)

〉 リンク

[研究者情報データベース](#)

◆ 研究内容の紹介

明治から始まった近代文学は、大正末から大きな変動期に入ります。関東大震災後のモダニズム文学、プロレタリア文学、国策文学、戦後文学など、政治・社会情勢に応じて、文学にも様々な変化が起こります。そうした「昭和文学」の動向を捉える研究をしています。その中でも特に、中島敦を中心に研究しています。敦は、この激動の昭和前期を生き、昭和 17 年に亡くなりましたが、中島敦が時代とどのように対峙したかが私の研究テーマです。

私の研究は、作品をその時代の状況を背景に読むというものです。表現に即して丁寧に読むことはもちろんですが、時代背景を理解して読むことを目指しています。文学作品は、ある程度の普遍性を持っていて、それだけを読んでも鑑賞に堪えるものもありますが、その同時代の文脈に合わせて読むと、見えづらかったものが見えてきます。過去の文学作品は、その時代に付随していた文脈が切り落とされて現代に残ったものですから、正確に理解するためには、文脈の復元が重要です。

この研究方法は、実は、文学作品に限らず、様々な文書、さらに言えば、何かの事象を理解する上でも有効な方法です。研究自体が社会に直接役立つことは稀ですが、文学研究の方法を身につけることは、事象を恣意的に捉えるのではなく、より正確に理解する上で大いに役立つものです。

◆ 主な論文・著書

- 『中島敦の絵はがき』(中島敦の会、2019)
- 『中島敦「李陵・司馬遷」図版編・定本篇、注解篇』(中島敦の会、2012, 2018)
- 「「山月記」を読む」(「中央大学文学部紀要」2018)
- 「「羅生門」は「愉快的な小説」」(「中央大学国文」2018)

◆ 主な担当科目

近代文学研究A、近代文学研究B、近代文学特殊研究A、近代文学特殊研究B


 よしの ともみ  
 吉野 朋美 / YOSHINO Tomomi 教授

## &gt; 専門分野

日本古典文学 和歌文学 中世文学

## &gt; 研究キーワード

新古今和歌集、後鳥羽院、西行、源俊賴、和歌表現、歌人と社会、古典文学の探究型授業実践とモデル構築

## &gt; 最終学歴・学位・取得大学

博士（文学）（東京大学）

## &gt; 問い合わせ先

tyoshino●tamacc.chuo-u.ac.jp

## &gt; リンク

[研究者情報データベース](#)

## ◆研究内容の紹介

主に、平安時代後期から鎌倉時代の和歌について研究しています。なかでも『新古今和歌集』の下命者で実質的な撰者でもある後鳥羽院の和歌活動について、時代とのかかわり、他の歌人たちとのかかわり、表現史という観点から、具体的な詠歌の場や作品の特質を明らかにしてきました。また、『新古今和歌集』に鎮魂の意図があることを解明し、それをきっかけに、平安末期の著名な歌人である西行や、和歌における鎮魂の方法についても関心と考察を深めています。他には、ジェンダーの視点から和歌の表現史を見通した論、歌学書の内容から筆者の思惑を探る論、歴史叙述のなかの和歌についての論などもあります。

また、長い歴史を持つ和歌の表現を深く知り、それが個々の歌人のなかでいかに結実しているのかを知るために、和歌の注釈作業をおこなうことも研究の一つの柱としています。注釈は、自らの持てる知識を総動員してつけるものであり、より多くの方々が古典文学を読み親しむきっかけとなる重要な研究でもあります。一首一首の解釈をおろそかにしないことを大事にしています。

さらに、古典教育に関する共同研究もおこなっています。大学や高校で古典のおもしろさや奥深さを実感しつつ学ぶ場を作りたい、古典研究や古典の学びを社会に役立つ力につなげたいという思いから集った研究者仲間と研究会を作り、高校・大学・大学院・教員・社会人連携のワークショップ実践を通して日本古典文学の探究型教材を作成する研究活動をしているところです。今教育現場で目指されている「主体的・対話的で深い学び」にもつながる実践として、今後、その教材を用いた教育方法を広く社会に提示したいと考えています。

## ◆主な論文・著書

- 「コロナ禍における高・大・院・社会人連携古典文学ワークショップの試み——日本文学アクティブラーニング研究会主催6回オンラインワークショップ「妖怪総選挙」実践報告——」(『中央大学文学部紀要 言語・文学・文化』294 巻 131 号・筆頭著者)
- 「『六代勝事記』の和歌について」(『藝林』第 71 巻第 1 号・2022 年 4 月)
- 「歌人としての西行と“権威”——生前、および新古今前夜の評価・受容を中心に——」(『西行学』11 号、2020 年 10 月)
- 『後鳥羽院とその時代』(笠間書院・2015 年)
- 『西行全歌集』(共著・岩波書店・2013 年)

## ◆主な担当科目

中世文学研究A、中世文学研究B、中世文学特殊研究A、中世文学特殊研究B

## ◆メッセージ

文学研究が対象となるテキストの正確な解釈を基本とすることは言うまでもありません。古典のテキストは、いわば知の「織物」です。「縦糸」は引用された前代の作品の構想や表現、「横糸」は背景となる社会状況や思想・文化です。ある「織物」が、どのような縦糸・横糸を用い、いかに織り上げられたのか。織り手の創意を読みほどこための基礎的な力(調査・分析・考察の方法)を身につけることを目標に、一緒に研究していきたいと思ひます。



おおた みわ  
大田 美和 / OTA Miwa 教授

〉 専門分野

19世紀イギリス小説、フェミニスト批評、ジェンダー論

〉 研究キーワード

ジェイン・オースティン、ブロンテ姉妹、エリザベス・ギヤスケル、ジョージ・エリオット、フェミニスト批評、ジェンダー論、近代イギリス、ヴィクトリア朝

〉 最終学歴・学位・取得大学

東京大学大学院人文科学研究科英語英文学専攻博士課程単位取得満期退学

〉 問い合わせ先

m\_ota●tamacc.chuo-u.ac.jp

〉 リンク

[研究者情報データベース](#)

◆ 研究内容の紹介

文学作品の中にあらわれた女性や子どもなどのマイノリティの表象と現実社会との相互的でダイナミックな関係を研究しています。それは、言語表現や教育を通して、私たちがどのように社会規範や「常識」を身につけ、今ある関係性や階層性を将来も変わらない当然のものと思い込むのかというプロセスを検証する作業でもあります。同時に、現実社会の構造的矛盾に気づいた作家たちがどのように新しい関係性や進むべき未来の姿を夢見て、文学作品の中に表したか、文学と社会変革の可能性の問題について考える作業でもあります。

たとえば、研究書『アン・ブロンテ 二十一世紀の再評価』では、アン・ブロンテの小説『ワイルドフェル・ホールの住人』のヒロインの夫の元からの子供を連れての逃亡と経済的自立について、19世紀から20世紀に至る現実社会の既婚女性の権利獲得史の中に位置づけて、高い評価を受けました。

[https://www.jstage.jst.go.jp/article/elsjp/86/0/86\\_KJ00006817087/article/-char/ja/](https://www.jstage.jst.go.jp/article/elsjp/86/0/86_KJ00006817087/article/-char/ja/)

また、「ヨークシャーの女たちの物語—『シャーリー』、『アン・リスターの日記』、『ミス・マイルズ』をつなぐ(『読むことのクィア』所収)では、家父長制社会における多様な女たち(独身、既婚、異性愛者、同性愛者など)の分断と連帯について、シャーロット・ブロンテの小説『シャーリー』と、レズビアン女領主アン・リスターの暗号の日記と、ブロンテの親友でニュージーランドに移住した企業家のメアリー・テイラーの小説『ミス・マイルズ』を取り上げて論じました。

最近では近代イギリス文学研究で身につけた研究姿勢と手法を使って、日本と朝鮮半島の関係性を文学テキストの分析によって行う研究にも取り組んでいます。

以上のような研究は、文学表現者として詩や短歌や俳句を作り、エッセイや評論を執筆するという作家としての仕事とも連動し、外部からの高い評価を得ています。

<https://dokushojin.com/review.html?id=7260>

<https://blog.goo.ne.jp/sikyakutamka/e/b0a397e7886e0d8a6ac975c912dd2e07>

◆ 主な論文・著書

- 「ギヤスケルの短編「マーサ・プレストン」と「一時代前の物語」におけるジェンダーと規範意識」『英語英米文学』中央大学英米文学会、2016年2月。
- 共著『読むことのクィア 続 愛の技法』中央大学出版部、2019年。
- 共著『めぐりあうテキストたち：ブロンテ文学の遺産と影響』春風社、2019年。
- 「尹伊桑と近藤芳美の幼少年期—近代朝鮮における作曲家と歌人の自己形成」『中央大学政策文化総合研究所年報』2020年。
- 『社会のなかの文学』中央大学出版部、2021年。

◆ 主な担当科目

英文学研究(近代小説)A、英文学研究(近代小説)B、英語教育のための文学文化研究ⅠA、英文学特殊研究ⅢA、英文学特殊研究ⅢB

◆ メッセージ

英語と日本語で精読し、分析する力、論理的に考え、論じる力を鍛えることは、様々なことに応用できます。問題意識をもって文学テキストに向かい合う知的な冒険の旅に乗り出してみませんか？



かねたけ みちこ  
兼武 道子 / KANETAKE Michiko 教授

〉 専門分野

英文学（特に英詩）、古典修辞学

〉 研究キーワード

イギリス、詩、古典修辞学、古代ギリシア

〉 最終学歴・学位・取得大学

博士（文学）（東京大学）

〉 問い合わせ先

miemie●bc5.so-net.ne.jp

〉 リンク

[研究者情報データベース](#)

◆ 研究内容の紹介

イギリスの詩を主に研究しています。18世紀以降の詩を中心に扱っていますが、17世紀にも関心を持っています。最近、19世紀の女性詩人の作品を読んでいます。女性詩人については、近年、国内外で研究がなされるようになってきていますが、面白い詩人や作品がまだまだ再発見されずに眠っているという実感を持っています。19世紀詩の、これまで見過ごされがちだった側面の面白さを紹介し、文学史を幅広く、豊かにしたいと思っています。

特に関心を持っているのは、古代ギリシアに題材をとったり、古典ギリシア語に何らかの関わりを持っている作家・批評家・作品です。男性中心で保守的な学問分野だった古典学に、女性（詩人）たちがどのように参加し、貢献し、新たな可能性を切り開いてきたかを知りたいと思っています。今後は、詩や小説を書いた（女性）文学者たちだけでなく、古典学や考古学などの分野で活躍したり、ギリシア旅行記を著したりした女性たちについても研究を進めてゆくつもりです。

◆ 主な論文・著書

- “Towards a Rhetorical Grammatology: Jacques Derrida and Hugh Blair”（論文、2021年）、
- 「オーガスタ・ウェブスターとギリシア神話の『悪女』たち」(Proceedings、2020年)、
- 「ヴァージニア・ウルフとギリシア」(書籍『ノンフィクションの英米文学』所収、2018年)

◆ 主な担当科目

英文学研究(詩)A、英文学研究(詩)B、英文学特殊研究IVA、英文学特殊研究IVB



くぼ なおみ  
久保 尚美 / KUBO Naomi 准教授

〉 専門分野

人文・社会 / 英文学、英語圏文学 / アメリカ文学

〉 研究キーワード

20 世紀アメリカ文学、アメリカ南部文学、南部作家、フラナリー・オコナー

〉 最終学歴・学位・取得大学

Ph.D. (クレアモント大学院大学)

〉 問い合わせ先

kubo●tamacc.chuo-u.ac.jp

〉 リンク

[研究者情報データベース](#)

◆ 研究内容の紹介

20 世紀のアメリカ文学を研究分野とし、とくに 20 世紀半ばに活躍したアメリカ南部の作家フラナリー・オコナー (Flannery O'Connor, 1925-1964) の作品研究を中心におこなっています。オコナーは若くして難病を患い、故郷のジョージア州からほとんど離れることなく執筆を続け、一貫してアメリカの南部に暮らす人びとを作品に描きました。

これまでの研究では、オコナーの作品における「暴力的な出来事」と「他者」をめぐる考察をおこないました。オコナーの短編小説にはしばしば、ありふれた日常生活をおくる登場人物が、唐突に暴力的な出来事に遭遇するさまが描かれています。銃で撃たれる、牛の角に突き刺される、義足を奪われる、本を投げつけられて罵られる、など、それぞれの出来事にみられる暴力の度合いはさまざまですが、仔細に読み解いていくと、登場人物たちがうける衝撃の質がどこか同じであるように描かれています。その同質性を探ってみると、そのどれもが登場人物たちがそれまで安住してきた、自己や世界に対する堅牢な認識の壁に穴を穿ち、自分には理解できないもの、という意味での「他者」の存在に目を向けさせるような衝撃となっている、と読むことができます。そしてそのような衝撃のなかに、カトリック作家であるオコナーは、畏れるものをもたない時代の人間と、そのような人間に恩寵をあたえる神との不測の結びつきの可能性を示そうとしていたのだと考えられます。

現在は、オコナーの作品における人種・階級・ジェンダーの問題に関心を持っています。オコナーの執筆期間にあたる 1940 年代半ばから 1960 年代にかけては、アメリカ社会全体で公民権運動が高まり、南部社会における人種間の関係が大きく揺らいだ時期にあたります。南部白人であるオコナーは、南部における人種関係をどのように描いたのか。作品に描かれる南部白人にとって「白人であること」とはどのような意味を持つのか。人種とともに南部社会のヒエラルキーを構成する重要な要素であった階級とジェンダーによる位置づけにも着目しながら、研究の対象を他の同時代の南部作家カーソン・マッカーズ、ハーパリー、リアン・スミスなどにひろげつつ、考察していきたいと考えています。

◆ 主な論文・著書

- 「フラナリー・オコナーの“The Geranium”における“manners”と南部家父長の構築」、『紀要 言語・文学・文化 第 128 号』281 号、中央大学文学部、2021 年 3 月
- 「フラナリー・オコナー「聖霊のやどる神殿」における“emptiness”」、『英語英米文学』第 58 集、中央大学英米文学会、2018 年 2 月

◆ 主な担当科目

米文学研究(現代 I)A、米文学研究(現代 I)B



たか お なおちか  
高尾 直知 / TAKAO Naochika 教授

〉 専門分野

近代アメリカ文学

〉 研究キーワード

アメリカン・ルネサンス期の文学

〉 最終学歴・学位・取得大学

文学博士（ニューヨーク州立大バッファロー校）

〉 問い合わせ先

naochika●tamacc.chuo-u.ac.jp

〉 リンク

[研究者情報データベース](#)

◆ 研究内容の紹介

19 世紀中ごろのアメリカ文学(小説・詩)を研究しています。とくに「アメリカン・ルネサンス」と呼ばれる時代(1830 年代～1860 年代)の小説を、その時代のさまざまなできごとと関連させながら解釈しています。

◆ 主な論文・著書

- 『ロマンスの倫理と語り——いまホーソンを読む理由』(共編著、開文社出版、2023 年)
- 『〈嘆き〉はホーソンによく似合う』(単著、中央大学出版部、2020 年)
- 『繋がりの詩学——近代アメリカの知的独立と〈知のコミュニティ〉の形成』(共編著、彩流社、2019 年)
- 『ホーソンの文学的遺産——ロマンスと歴史の変貌』(共編著、開文社出版、2016 年)
- F・O・マシーセン著『アメリカン・ルネサンス——エマソンとホイットマンの時代の芸術と表現』上巻(共訳、上智大学出版、2011 年)

◆ 主な担当科目

米文学研究(近代)A、米文学研究(近代)B、米文学特殊研究ⅡA、米文学特殊研究ⅡB



たんじ たつろう  
**丹治 竜郎** / TANJI Tatsuro 教授

〉 専門分野

イギリス文学、アイルランド文学

〉 研究キーワード

ジェイムズ・ジョイス、短編小説

〉 最終学歴・学位・取得大学

東京大学大学院人文科学研究科英語英文学専攻博士課程満期退学

〉 問い合わせ先

ttanji●tamacc.chuo-u.ac.jp

〉 リンク

[研究者情報データベース](#)

◆ 研究内容の紹介

私の主要な研究対象は、1882年にアイルランドで生まれ、1941年にスイスで死んだコスモポリタン作家ジェイムズ・ジョイス (James Joyce) である。短編集『ダブリンズ』(Dubliners) (1914年)、自伝的な小説『若い芸術家の肖像』(A Portrait of the Artist as a Young Man) (1916年)、代表作『ユリシーズ』(Ulysses) (1922年)、そして難解至極な『フィネガンズ・ウェイク』(Finnegans Wake) (1939年) というジョイスの主要な4作のうち、私がこれまで論文で取り上げた作品は『ダブリンズ』と『ユリシーズ』のみである。正直に告白すれば、『若い芸術家の肖像』は何となく苦手で、『フィネガンズ・ウェイク』は読むのに時間がかかりすぎるから、研究対象にしてこなかったのだ。結局、私は研究者としては中途半端なところがあり、最近あまりジョイスについては書かなくなり、その代わりに、18世紀のヘンリー・フィールディング (Henry Fielding) から現代のカズオ・イシグロ (Kazuo Ishiguro) まで、ブリテンのさまざまな作家の短編小説について、年一本程度のペースで論文を書くようになっていく。ずっと一つのことを追求するタイプではないので、これからも焦点の定まらない研究生活を続けていくことになるだろう。論文のテーマにしたことはないが、ブリテンの映画や音楽 (特にポップ・ミュージック) にはまあまあ詳しい。

◆ 主な論文・著書

- お菓子を食べてもなくなる人生はあるのか？——アンガス・ウィルソンの「下宿人というよりは友人」における語り手の態度——『紀要 言語・文学・文化』第132号、中央大学文学部、2023年3月
- 「知性が人を殺す——ドリス・レスリング「19号室へ」を読む——」『紀要』通巻第270号 (言語・文学・文化 第122号)、中央大学文学部、2018年3月
- 'Stephen's Strategy in Ulysses' 『英語英米文学』第57集、中央大学英米文学会、2017年2月
- 『ジョイスの罫——『ダブリンズ』に嵌る方法』(共著、金井嘉彦、吉川信編) 言叢社、2016年2月

◆ 主な担当科目

英文学研究 (現代小説) A、英文学研究 (現代小説) B、英文学特殊研究 II A、英文学特殊研究 II B

◆ メッセージ

ジョイスの『ダブリンズ』や『ユリシーズ』をちょっと深く研究してみたいと思ったら、大学院進学を考えてみてください。英語があまり得意ではない人でも英語できちんとした論文が書けるように指導します。





でーる, じょしゅあほーる  
 デール, ジョシュアポール / DALE, JoshuaPaul 教授

〉 専門分野

American Literature/American Culture/Aesthetic Practices

〉 研究キーワード

Cuteness Studies/Gender/Culture

〉 最終学歴・学位・取得大学

Ph.D. University at Buffalo, State University of New York (USA)

文学部英文科博士後期課程

〉 問い合わせ先

[こちらよりお問い合わせください。](#)

〉 リンク

[研究者情報データベース](#)

<https://www.cutestudies.org>

◆ 研究内容の紹介

My research revolves around the new field of cuteness studies. Cute and kawaii are dominant aesthetics in globalized consumer society. These two aesthetics address powerful needs and desires, as well as shape contemporary sensibilities. Cute was a major American cultural export in the twentieth century. In the twenty-first century Japanese kawaii is booming worldwide. However, scholarship on these two aesthetics remains in an early stage.

I study the social and cultural contexts of the emergence, historical development, and contemporary interrelationship of both the cute and kawaii aesthetics. I seek to explain when and how the aesthetics of American cute and Japanese kawaii developed and to determine their impact on gendered identity, power, consumption, and technology in today's globalized society.

In addition, I believe that scholarship on the American cute and Japanese kawaii aesthetics should also consider the biological basis behind the affective response to cuteness. For this reason, one goal of my research is to connect research in the Humanities with that in the behavioral sciences.

◆ 主な論文・著書

- Monograph, *Irresistible: How Cuteness Wired our Brains and Conquered the World*. Profile Books, 2023.
- Co-Editor, *The Aesthetics and Affects of Cuteness*, Routledge Press, January 2017.
- Editor, *Cute Studies*. Themed issue of *The East Asian Journal of Popular Culture*. Intellect Press, April 2016.
- "Cuteness Studies and Japan." *The Routledge Companion to Gender and Japanese Culture*. Eds. Coates, J, et al. Routledge Press, January 2020: 320-330.
- "Cross-Cultural Comparisons of the Cute and Related Concepts in Japan, the United States, and Israel." Co-authored with Hiroshi Nittono and Shiri Lieber-Milo. *SAGE Open*, Jan. 2021.

◆ 主な担当科目

米文学研究(現代Ⅱ)A、米文学研究(現代Ⅱ)B、英語表現演習Ⅱ、米文学特殊研究ⅢA、米文学特殊研究ⅢB



なかお ひでひろ  
中尾 秀博 / NAKAO Hidehiro 教授

〉 専門分野

地域研究・英語圏文学

〉 研究キーワード

映像表象、ポストコロニアリズム、環太平洋

〉 最終学歴・学位・取得大学

東京大学大学院人文科学研究科博士課程

〉 問い合わせ先

nakao●tamacc.chuo-u.ac.jp

〉 リンク

[研究者情報データベース](#)

◆ 研究内容の紹介

研究内容の詳細は、下記よりご覧ください。

<https://doi.org/10.26686/jnzs.iNS36.8340>

<https://yab.yomiuri.co.jp/adv/chuo/opinion/20130311.html>

<https://yab.yomiuri.co.jp/adv/chuo/dy/opinion/20130325.html> (英語版)

<https://yab.yomiuri.co.jp/adv/chuo/opinion/20110711.html>

<https://yab.yomiuri.co.jp/adv/chuo/dy/opinion/20110725.html> (英語版)

◆ 主な論文・著書

- 「虚ろな目の光とオレンジ色のライフジャケット—J・M・クツツェー作品における政治的暴力の表象」『抵抗することば—暴力と文学的想像力』(南雲堂)
- 「死の灰を見つめて—『フォールアウト』鑑賞の手引」『アメリカ太平洋研究』(東京大学大学院総合文化研究科附属アメリカ太平洋地域研究センター)
- 「ベニン王国ブロンズ頭部像」『中央評論』 #325(中央大学出版部)
- 「帝国の威信ビフォーアフター」『中央評論』 #318(中央大学出版部)
- 「バーチャル継承—痛み傷跡—」『中央評論』 #317(中央大学出版部)
- 「エントツ上のスト(沖縄プライウッド争議)」『中央評論』 #315/#316(中央大学出版部)
- 「越境入学—インディアン実業学校—」『中央評論』 #314(中央大学出版部)
- 「公明正大なる処遇」『中央評論』 #313(中央大学出版部)
- 「尺八奏者と少女」『中央評論』 #312(中央大学出版部)
- 「辺境の写真家フランク・S・マツーラ」『中央評論』 #311(中央大学出版部)
- 「小金井良精先生寿像」『中央評論』 #310(中央大学出版部)
- 「一九一二年の「越境」」『中央評論』 #309(中央大学出版部)

◆ 主な担当科目

英語圏文学研究A、英語圏文学研究B、米文学特殊研究 I A、米文学特殊研究 I B

◆ メッセージ

想視聴顧(そう・し・ちょう・こ)



なかの がくじ  
中野 学而 / NAKANNO Gakuji 准教授

〉 専門分野

20 世紀アメリカ文学

〉 研究キーワード

近代化、資本主義、故郷、家族、宗教、個人主義

〉 最終学歴・学位・取得大学

東京大学大学院人文社会系研究科欧米文化研究専攻英語英米文学専門分野博士課程満期退学（所定単位修得）

〉 問い合わせ先

gakujinakano@gmail.com

〉 リンク

[研究者情報データベース](#)

◆ 研究内容の紹介

専門はアメリカ文学、とくに 20 世紀アメリカ南部に生まれた小説家ウィリアム・フォークナーを専門に研究していますが、授業では、「近代の最先端」としての（アメリカ）という現象が生身のひとの心に及ぼす影響を、陰に陽に日本人としての立場からできるだけ大きく考えていきたいと思っています。人は「故郷」からどのくらい離れて暮らすことができるのか。そもそも、人にとっての「故郷」とは何か、そしてそれはどのような意味を持っているのか——そのようなことを考えながら、アメリカの作家の作品を縦横に読み解いていきたいと思っています。扱う作家はフォークナーのみならずアーネスト・ヘミングウェイ、F・スコット・フィッツジェラルド、J・D・サリンジャー、レイモンド・カーヴァーなどです。

◆ 主な論文・著書

- 『教室の英文学』（共著、研究社、2017 年）
- 『フォークナーと日本文学』（共著、松柏社、2019 年）
- 『深まりゆくアメリカ文学』（共著、ミネルヴァ書房、2021 年）
- 「河を渡って家族の中へ——Raymond Carver の “Nobody Said Anything”」（『英語英米文学』中央大学英米文学会、2021 年）

◆ 主な担当科目

米文学研究（現代Ⅲ）A、英語教育のための文学文化研究ⅡB

◆ メッセージ

本当に感動できる作品を研究していると、自分にとってとても大事なものが見えてくるはず。それは時に見ていられないほど苦しくなるようなものでもあるかもしれませんが、そうであればなおさら、私たちにはそれを見つめることがどうしても必要なのだと思います。そういうものに一緒に取り組んでみませんか。



ひらかわ まきこ  
平川 眞規子 / HIRAKAWA Makiko 教授

〉 専門分野

言語学・言語習得・言語教育

〉 研究キーワード

第2・第3言語、継承語、文法習得、言語処理

〉 最終学歴・学位・取得大学

マギル大学大学院言語学専攻博士課程・Ph.D. (マギル大学)

〉 問い合わせ先

hirakawa●tamacc.chuo-u.ac.jp

〉 リンク

[研究者情報データベース](#)

[個人ウェブサイト](#)

◆ 研究内容の紹介

2つ以上の言語を習得する場合(第2・第3言語の習得やバイリンガル習得)について、言語学的なアプローチから研究をしています。2つ以上の言語を話す人々の研究は、人間に備わっている言語獲得能力の可能性や限界の解明に繋がると言えます。私は、近年大きく3つのテーマについて、研究に取り組んできました。第一に日本に在住する外国籍の子どもやおとなの母語(これを継承語と呼びます)の保持と第二言語(日本語)の習得、第二に日本人の英語の習得と指導の効果、第三に視線解析装置を用いた言語処理です。

私は研究チームを組み、中国やフィリピンから来日し、日本に在住する子どもやおとなを対象に、様々な言語知識を調べてきました。在留外国人の継承語や第二言語の習得と保持に関する問題はグローバル化した社会における重要なテーマです。継承語とは、主に家庭で親から子へと継承される言語を指します。継承語話者は家庭の外では社会の多数派言語を使用しながら育つため、継承語を司る能力は親のレベルに達しないことが多いのです。例えば、家では家族と中国語またはタガログ語(フィリピンの公用語)を話し、家庭外や学校では日本語を使用する子どもの場合、家庭内という限られた状況での言語使用が、その言語の習得や保持にどのような影響を与えるのか、また母語(継承語)が第二言語(日本語)の習得にどのような影響を与えるのか、について研究をしています。

日本人が英語を習得する場合も、主に教室という環境で行われるため、英語の使用環境は限定的です。この限定的な環境と、留学などで英語圏へ行き、英語に触れる機会が豊富な環境での習得状況を調べる研究を行っています。例えば、ガラス製の丸い素敵なテーブルがあるとします。これを英語で言う場合、a nice round glass table とは言えますが、a round nice glass table や a nice glass round table とは言えません。英語には形容詞の語順に決まりがある一方で、日本語では形容詞の語順は比較的自由です。日本語を母語とする人が英語を学習する際、英語で許されない形容詞の順序を含む表現、つまり誤用が多くみられます。このような誤用は、留学したとしてもなかなか気づきにくく、正しい表現の獲得には明示的な指導の有効性が確認されています。

母語話者や第二言語学習者は、自らの言語知識をもとに、どのように即時的に言語を処理・理解していくのでしょうか。近年の第二言語習得研究では、心理言語学的手法(読み実験や視線解析など)を用いた実証的な研究が活発に行われており、特に学習者と母語話者の処理過程での相違点が議論されています。例えば、ある言語の音声を聞いたとき、提示されている絵や文への注視パターンを解析すると、その人がどのように即時的処理を行っているかを調べることができます。こうした研究の積み重ねにより、将来的には効果的な言語教育や継承語の保持教育へ提言できるようになることも目指しています。

◆ 主な論文・著書

- 磯部美和・平川眞規子(2022)「言語の獲得 2: 第二言語の獲得」大津由紀雄・今西典子・池内正幸・水光雅則(監修)『言語研究の世界: 生成文法からのアプローチ』(pp. 171-186) 研究社。
- 平川眞規子(2021)「日本人英語学習者によるテンスとアスペクトの意味解釈—単純現在形 -s vs. 現在進行形 -ing—」河西良治教授退職記念論文集刊行会(編)『言語研究の扉を開く』(pp. 87-101) 開拓社。
- 鈴木一徳・平川眞規子(2019)「日本語母語話者およびスペイン語母語話者による心理形容詞の解釈—Is the lecturer bored or boring?—」白畑知彦・須田孝司(編)『第二言語習得研究モノグラフシリーズ3: 言語習得研究の応用可能性—理論から指導・脳科学へ—』(pp. 1-29) くろしお出版。
- Zvaigzne, M., Oshima-Takanem Y., and Hirakawa, M. 2019. How does language proficiency affect children's iconic gesture use? *Applied Psycholinguistics*, 40: 555-583.
- Hirakawa, M., Shibuya, M., and Endo, M. 2019. Explicit instruction, input flood or study abroad: Which helps Japanese learners of English acquire adjective ordering? *Language Teaching Research*, 23: 158-178.

◆ 主な担当科目

英語学研究(言語習得論)A、英語学研究(言語習得論)B、英語学特殊研究IV A、英語学特殊研究IV B



ましゅーず じょん  
マシューズ, ジョン / MATTHEWS, John 教授

〉 専門分野

音韻学、音声学、言語理論、母語音韻習得、第二言語習得

〉 研究キーワード

音韻論、生成音韻習得、音声学

〉 最終学歴・学位・取得大学

マギル大学（カナダ）大学院言語学研究科博士課程修了

〉 問い合わせ先

[こちらのフォームよりお問い合わせください。](#)

〉 リンク

[研究者情報データベース](#)

◆ 研究内容の紹介

My primary research interest lies in the processing of spoken language by non-native speakers with a focus on how the mental representations stored in memory and generated during language use are influenced by the mechanisms optimized for processing one's native language. These representations include the phonological form for items stored in the lexicon as well as morphological and syntactic constructions generated by the grammar when producing or perceiving second language speech. In addition, as learners advance in proficiency, their linguistics processing mechanisms develop in ways that reveal characteristics unique to bilinguals distinguishing them from monolingual speakers of each of their languages.

◆ 主な論文・著書

- Matthews, J. (2019) Prosodic transfer in the receptive modality: Recognizing morphology within L2 prosody. *Linguistic Approaches to Bilingualism* 9(6):862–866.
- Matthews, J., Kawasaki, T., Tanaka, K. & M. Takeuchi (2020) Phonetic Drift in Fricatives and the Effects of L2 Experience on L1 phonetic categories. *Journal of English Language, Literature and Culture*. Tokyo: Chuo University Press.
- Matthews, J., Kawasaki, T., and K. Tanaka (2021) Category expansion, contraction, and drift during the development of novel L2 speech sounds. Poster presented at the annual meeting of the Acoustical Society of America. Seattle, WA. November 29, 2021.
- Matthews, J., Hirakawa, M., Suzuki, K., Umeda, M., Takeda, K., Fukuda, M. & N. Snape (2021) Processing the interpretation of long distance and local anaphora with subject and object antecedents in Japanese. Paper presented at the Conference on the Acquisition and Processing of Reference and Anaphora Resolution (APRAR 2021), Universidad de Granada & Vrije Universiteit Brussel (online). May 19, 2021.

◆ 主な担当科目

英語学研究(音声学・音韻論)A、英語学研究(音声学・音韻論)B、英語学特殊研究ⅢA、英語学特殊研究ⅢB、英語表現演習 I

◆ メッセージ

While it is tempting to master greater and greater depth in a narrower and narrower field of study, it is vitally important to keep a broad perspective from which to see connections between your own area of expertise and the fundamental questions in your discipline. It is through such connections that new and interesting ideas arise. Also, exploring ideas and understanding the world around us has its own inherent value, regardless of whether there are practical applications or technical innovations.


 まつい ともこ  
 松井 智子 / MATSUI Tomoko 教授

## &gt; 専門分野

言語発達、語用論、コミュニケーション

## &gt; 研究キーワード

コミュニケーション能力、バイリンガル、自閉スペクトラム症

## &gt; 最終学歴・学位・取得大学

Ph.D. (University College London)

## &gt; 問い合わせ先

tmatsui510@g.chuo-u.ac.jp

## &gt; リンク

[研究者情報データベース](#)

## ◆研究内容の紹介

私たちが社会生活を送る上で、コミュニケーション能力の重要性を疑う人はいないと思います。家族や友人と会話をするとき、学習の場である教室で先生の話を理解するとき、仕事の場でプレゼンをするときなど、さまざまな場面でコミュニケーション能力が必要とされるので、高いコミュニケーション能力を持つことは生きていく上で有利だと考えられています。しかし、実はコミュニケーション能力の発達や障害については、まだまだわからないことが多いのです。

多くの言語発達に関する研究によると、子どもの言語発達に欠かせないのは乳幼児期の大人との会話であることがわかっています。また発達心理学の研究から、乳幼児期の子どもと大人との会話は、子どもの他者理解を促進するということがわかっています。コミュニケーション能力の発達に関する研究はまだまだ少ないですが、おそらく子どもの対人コミュニケーションの発達にも、乳幼児期の大人との会話が重要な役割を果たすと考えられます。

幼児期までに育った子どものコミュニケーション能力は、児童期の教室での学習力や読解力の基礎になります。教室での学習は、先生の話の中で大事なポイントを押さえて聞く、自分でもそのポイントについて考えてみる、そして記憶する、といった活動により達成されます。この能力は、コミュニケーションにおいてよく相手の話を聞いて反応するという能力と重なります。つまり、子どものコミュニケーション能力は、効果的な学習を促進するものでもあるということです。そのため、何らかの理由で、乳幼児期、児童期に対人コミュニケーション能力が十分に発達しなかった場合、子どもの学力が伸び悩む可能性があります。

松井研究室では、健全な学習力につながるコミュニケーション能力の育成を目指して、コミュニケーションの発達と支援に関する基礎研究をしています。

## ◆主な論文・著書

- 『子どものうそ 大人の皮肉—ことばのオモテとウラがわかるには』東京：岩波書店、(2013)
- Tomoko Matsui, Taeko Yamamoto, Yui Miura, Peter McCagg Young children's early sensitivity to linguistic indications of speaker certainty in their selective word learning. *Lingua*, 175–6, 83–96. (2016)
- 語用論的コミュニケーション. 発達科学ハンドブック第9巻『社会的認知の発達科学』204–217. 東京：新曜社. (2018)
- Component processes of irony comprehension in children: Epistemic vigilance, mind-reading and the search for relevance. Scott, K., Clark, B. & Carston, R. (eds.) *Relevance, Pragmatics and Interpretation*, 231–239. Cambridge University Press. (2019)
- 多言語児童生徒の学習支援 深浦順一・藤野博・石坂郁代(編)「言語発達障害学 第3版」273–28. 東京：医学書院、(2021)

## ◆主な担当科目

英語学研究(意味論・語用論)A、英語学研究(意味論・語用論)B、英語学特殊研究 I A、英語学特殊研究 I B



わかばやし しげのり

## 若林 茂則 / WAKABAYASHI Shigenori 教授

〉 専門分野

第二言語習得、形態統語論、英語教育

〉 研究キーワード

第二言語の文法の習得と使用、英語授業のデザインと評価

〉 最終学歴・学位・取得大学

Ph. D. (ケンブリッジ大学)

〉 問い合わせ先

swkbys37●tamacc.chuo-u.ac.jp

〉 リンク

[研究者情報データベース](#)

[個人ウェブサイト](#)

◆ 研究内容の紹介

日本語などを母語とする学習者による英語の使用には特徴があります。その特徴の理由について、心理言語学の手法でデータを集め、文法理論を用いながら、科学的な手法で明らかにしようと試みています。様々な共同研究も行っています。

ICT を用いた英語教育プログラムの開発も行っています。外国語を使う場所を「想定して」練習するだけでなく、実際に英語を用いて、母語の異なる学習者が交流する授業をデザイン・実践し、授業・教師・学習者の評価を行っています。

◆ 主な論文・著書

- “A Principle of Economy in Derivation in L2 Grammar: Do Everything in Narrow Syntax”. *Second Language Research*, Vol. 37, Issue 4, pp. 521-545 (2021 年) <https://doi.org/10.1177/0267658319879969>
- 「生成文法理論に基づく第二言語習得研究の成果と今後の方向性」河西良治教授退職記念論文刊行会(編)『言語研究の扉を開く』(132-146 頁)開拓社(2021 年)
- 飯尾淳・若林茂則.「英語ライティング学習におけるソーシャル・ネットワークの学習支援システムの活用」公益社団法人私立大学情報教育協会 2021 年度 ICT 利用による教育改善研究発表会: 162-165. (2021 年)
- 飯尾 淳・若林茂則・櫻井 淳二・石川茂・木嶋勇一 .異文化交流教育に向けたプラットフォームの提供と実践事例. *トランザクションデジタルプラクティス 2*: 58-67. (2021 年)
- Shigenori Wakabayashi, Takayuki Kimura, John Matthews, Takayuki Akimoto, Tomohiro Hokari, Tae Yamazaki and Koichi Otaki. “Asymmetry between person and number features in L2 subject-verb agreement”. *Proceedings of Boston University Conference on Language Development 45 (BUCLD)*. (2021 年)
- 「学習者が英語でやりとりする力をつけるために」中央大学文学部紀要 285: 53-83. (2021 年)

◆ 主な担当科目

英語学研究(形態論・統語論)B、英語教育のための言語科学研 A、英語学術発表演習 I、英語学特殊研究 II A、英語学特殊研究 II B

◆ メッセージ

ことばの科学研究はとても広く面白いです。その習得メカニズムの研究は様々な要素が重なって複雑ですが、要因を紐解いていくと、予想もしなかった姿が見えてくることもあります。「知りたい」と思ったら、ぜひ一緒に研究しましょう。また、ことばの教育は「やる気」「満足」「発見」「自己肯定感」「人間関係」など、さまざまな要素とそれが絡み合った複雑な世界に支えられています。その世界を、エキサイティングでやりがいのある空間にするにどうするか。この問題を考えてみたい人、一緒に研究しましょう。



いそべ ひろゆき  
磯部 裕幸 / ISOBE Hiroyuki 教授

〉 専門分野

ドイツ近現代史・植民地主義や人種主義、感染症の歴史

〉 研究キーワード

①ドイツ植民地、②グローバル・ヒストリー、③「熱帯医学」の歴史④人種主義の歴史、  
⑤ヒストリオグラフィー

〉 最終学歴・学位・取得大学

Ph.D. (Universität Konstanz)

〉 問い合わせ先

isobe●tamacc.chuo-u.ac.jp

〉 リンク

[研究者情報データベース](#)

◆ 研究内容の紹介

専門はドイツ近現代史、とりわけ第二帝政期の植民地における「熱帯医療」や当時アフリカなどで盛んに研究された「形質人類学」の歴史に関心があります。従来ドイツ植民地の過去は、その統治期間の短さや、本国に占める「コロニアルなもの」の重要度の低さが影響して、歴史家の関心を十分に惹起するものではありませんでした。しかし植民地統治期、ドイツの医学者は、現地に蔓延する感染症を熱心に調べ、また住民の「人種の特徴」を科学的に描き出そうとします。彼らは各国研究者と協力しながら、「熱帯」を「知る＝支配する」ことを目論んだのです。さらにこうした医学者の中には、植民地統治期の業績が認められ、戦間期ドイツ人の立ち入りが制限されていたイギリス領やフランス領植民地でさらなる研究を続けていきます。また発足間もない国際連盟の活動に従事する者もいました。こうした医学・人類学研究はイギリスやフランスのみならず、日本のアカデミズムにも一定の影響を与えていくのです。そしてナチ期に入ると、彼らは本国の感染症学や人種衛生学の「重鎮」となります。彼らが植民地で何をし、またその後本国でどのような地位に就いたのか。ドイツ植民地史が投げかける問題は、我々により一層の学問的取り組みを求めているのではないのでしょうか。さらにそれは他の植民地列強とのグローバルな比較—イギリスやフランスだけでなく、ドイツと同様「遅れてきた植民地帝国」としての道を歩んだ日本との比較—の方法へと開かれていくでしょう。またそこで得られた知見は、21世紀を迎えたいまでも「人種」や「性差」といった、人間の生物学的側面に由来する差別が消え去らない世界、そして感染症の問題が解決するどころか、ますます人類を苦しめている世界を生きる上でも、重要な指針を与えてくれるはずです。

◆ 主な論文・著書

- 『アフリカ眠り病とドイツ植民地主義—熱帯医学による感染症制圧の夢と現実』(みすず書房・2018年)(単著)。
- 『「人種」と「民族」のルーツを探る—ドイツにおける人類学および考古学の誕生』(水野博子・川喜田敦子(編)『ドイツ国民の境界—近現代史の時空から』(山川出版社・2023年), 120-145頁
- 「人類は感染症といかに向き合ってきたか?(4)近代医学と社会の分断—『アフリカ』が問うもの」、『歴史評論』第856号(2021年8月), 60-70頁
- 「『制度』としての医師・病院・患者—歴史的『医学史』の成果と課題」、『歴史学研究』第1004号(2021年), 41-49頁
- 「感染症と『生体管理』—ドイツ植民地におけるハンセン病対策」(特集「生体管理の現代史:市民・移民・植民地の統治技術」)、『ゲンヒテ』第13号(2020年)、86-95頁
- 「ベルリン・ハンブルク・そして『熱帯』—ドイツ版『帝国医療』をめぐる考察」(特集「病」)、『史林』第103巻第1号(2020年)、177-214頁

◆ 主な担当科目

ドイツ社会誌演習A、ドイツ社会誌演習B、ドイツ文化論研究A、ドイツ文化論研究B、ドイツ社会誌特殊研究A、ドイツ社会誌特殊研究B

◆ メッセージ

学修意欲の旺盛な皆さんを心より歓迎します。ドイツの歴史や社会に関心のある人、「世界の中のドイツ」のありようを知りたいと思っている人、広く医学の歴史や人種主義の歴史についてドイツ語で学びたいと思っている人は、共に学び大いに議論しましょう。



たかはし しんや  
高橋 慎也 / TAKAHASHI Shinya 教授

〉 専門分野

ドイツ演劇、ドイツ文学、日独比較文化

〉 研究キーワード

ポストドラマ演劇、アヴァンギャルド劇、鎮魂劇、日独文化交流史

〉 最終学歴・学位・取得大学

東京大学大学院人文科学研究科博士課程中退・修士（東京大学）

〉 問い合わせ先

dokubun-grp@g.chuo-u.ac.jp

〉 リンク

[研究者情報データベース](#)

◆ 研究内容の紹介

ドイツ語圏諸国と日本の演劇・舞台芸術と文学、またこの分野の日本とドイツ語圏諸国の歴史・交流史を中心に研究しています。特にポストドラマ演劇と呼ばれる、舞台上演の一回性・瞬間性を重視した舞台芸術に焦点を当てています。

ドイツ語圏諸国や日本の作家・演出家の中には、日常的な時空間を超越する時空間を創造しようとする人たちがいます。こうした芸術家の文学作品・舞台作品に含まれる社会性と宗教性との相互関連の分析が、近年の主な研究テーマです。具体的にはハイナー・ミュラー、クリストフ・マルターラー、クリストフ・シュリンゲンジーフ、ルネ・ポレシュといったドイツドイツ語圏諸国の作家・演出家の作品、蜷川幸雄、野田秀樹、岡田利規、小池修一郎といった日本の作家・演出家の作品について研究しています。こうした作家・演出家の舞台上演は国外でも高い関心を集めているので、日本とドイツ語圏諸国の演劇交流史も併せて研究対象としています。

理論の面では、ドイツの演劇研究者であるハンス＝ティース・レーマンのポストドラマ論、エリカ・フィッシャー＝リヒテのパフォーマンス性の美学、ニュージーランド出身ながらドイツで教鞭を取るクリストファー・バームの統合的演劇理論、また日本の宗教民俗研究者である五来重の民俗芸能論を踏まえた研究を行っています。社会変革・芸術変革を志向する演劇人が、絶対的他者としての死に直面した際に宗教的救済ないし鎮魂を志向する作品を創作する場合があります。こうした作品の分析理論としてドイツのポストドラマ論と日本の民俗芸能理論を統合した理論構築が必要だと考えています。現代の作家・演出家の提唱する演劇論としてはハイナー・ミュラーと岡田利規のものが有効だと捉え、五来重の民俗芸能論との統合可能性について考察しています。

◆ 主な論文・著書

- 黄泉の帝王トートの鎮魂劇としての宝塚版ミュージカル『エリザベート：愛と死の輪舞(ロンド)』ドイツ文化 (75), 43-67, 2020-02
- 演劇史記述の転換と1970年代以降のドイツ演劇統計分析：国民演劇史からグローバル演劇史へ中央大学文学部紀要 = Journal of the Faculty of Literature, Chuo University (270), 89-119, 2018-03
- 戦後ドイツ演劇システムと演出スタイルの相互関係：演劇統計分析から見るその特徴と課題 ドイツ文化 72, 87-114, 2017-03

◆ 主な担当科目

ドイツ文学演習A、ドイツ文学演習B、ドイツ文化論研究A、ドイツ文化論研究B、ドイツ文学特殊研究A、ドイツ文学特殊研究B

◆ メッセージ

ドイツ語圏の舞台芸術研究は「観て楽しく、研究して楽しい」分野です。ドイツ語圏の近現代演劇は、世界の演劇文化に大きな影響を与えてきました。戦前はリアリズム演劇、戦後はプレヒトの叙事的演劇、また演出家主導による演出演劇が世界演劇の発展に貢献しました。21世紀になると舞台上演の一回限りで瞬間的な感覚的コミュニケーションを創造するパフォーマンス芸術が盛んとなり、新たなパフォーマンス理論が形成されています。

ちじゃっく おるが  
チジャック, オルガ / CZYZAK Olga 准教授

〉 専門分野

Deutsch als Fremdsprache/ドイツ語教育研究, Fremdsprachendidaktik/外国語教授法, Interaktionsforschung/  
インタラクティブ研究

〉 研究キーワード

Interaktion, Gruppenarbeit, soziokultureller Ansatz, qualitative Forschungsmethoden

〉 最終学歴・学位・取得大学

Doktor der Philosophie (Philipps Universität Marburg)

〉 問い合わせ先

[こちらよりお問い合わせください。](#)

〉 リンク

[研究者情報データベース](#)

◆ 研究内容の紹介

専門分野は、ドイツ語教育研究と外国語教授法です。ドイツ語などの外国語をどのように学ぶか、また、その際に学習者をどのようにサポートできるかという問題を扱っています。特に授業中のインタラクティブ(相互作用)と、そのインタラクティブ中での学習がどのようにされるかを中心に研究しています。一方では、認知的、感情的な側面が重要であり、他方で、言語の学習や教育は、他の人々との相互作用の中で、社会的な文脈の中でしか行われません。全体指導、グループワーク、オンラインタンデムなど、様々な学習場面での学びのプロセスや学習者の内省を記述・分析することで、重要な関連性が明確になり、教育・学習の改善に直接的に貢献することができます。

◆ 主な論文・著書

- Gesichtskritische Episoden in Gruppenarbeitsphasen: Interaktionen unter Lernenden in einem aufgaben- und inhaltsbasierten DaF-Unterricht. Tübingen: Narr Francke Attempto, 2023.
- Zum triangulatorischen Mehrwert von Videobasiertem Lauten Erinnern für Interaktionsanalysen (zs. mit Choi G. & Schramm K.), Zeitschrift für Interaktionsforschung in DaFZ 2, 2023: 9-33.
- Interaktionsforschung in DaF – Forschungsstand und Perspektiven in Japan. Neue Beiträge zur Germanistik 19 (2), 2021: 25-42.
- Gemeinsames sprachliches Handeln in Gruppenarbeitsphasen im Anfängerunterricht – eine empirische Studie. Zeitschrift für Fremdsprachenforschung 31 (2), 2020: 263 – 289.
- Kognitive Perspektive: Die sprachliche Leistung der Lernenden im fach- und sprachintegrierten Anfängerunterricht. In: Schart, Michael: Fach- und sprachintegrierter Unterricht an der Universität: Untersuchungen zum Zusammenspiel von Inhalten, Aufgaben und dialogischen Lernprozessen. Tübingen: Narr Francke Attempto, 2019: 261-293.

◆ 主な担当科目

ドイツ文化演習 A、ドイツ文化演習 B、ドイツ文化論研究A、ドイツ文化論研究B

◆ メッセージ

ドイツ語教育研究は、将来ドイツ語教師になることを目指す人だけでなく、言語を扱うことが好きなすべての人にとって興味深いものです。他の人の学習をどのようにサポートできるかを考えることで、自分自身の学習法を振り返り、自分自身がより良い学習者になることができます。



なわた ゆうじ  
縄田 雄二 / NAWATA Yuji 教授

〉 専門分野

近現代ドイツ文学、現代ドイツ思想、比較文学・比較文化

〉 研究キーワード

ドイツ文学、ドイツ思想、比較文学、比較文化、文化史、Kulturwissenschaft

〉 最終学歴・学位・取得大学

博士（文学）（東京大学）、教授資格（文化学）（ベルリン・フンボルト大学）

〉 問い合わせ先

[こちらのフォームよりお問い合わせください。](#)

〉 リンク

[研究者情報データベース](#)

◆ 研究内容の紹介

研究内容については、こちらをご覧ください。

<https://researchmap.jp/Nawata-Yuji>

◆ 主な論文・著書

- Yuji Nawata / Hans Joachim Dethlefs (eds.) *Performance Spaces and Stage Technologies: A Comparative Perspective on Theatre History*. Bielefeld: transcript, 2022.
- Phantasmagoric Literatures from 1827: Johann Wolfgang von Goethe, Sin Chaha, and Kyokutei Bakin. In: *Jahrbuch für Internationale Germanistik* 54.1 (2022): 145–166. <[https://doi.org/10.3726/jig541\\_145](https://doi.org/10.3726/jig541_145)>
- Hölderlin's Interpretation of Pindar's Fragment *Of the Dolphin*. A Reading from the Perspective of the Comparative History of Acoustics. In: *Jahrbuch für Internationale Germanistik* 53.2 (2021): 91–107. <[https://doi.org/10.3726/ja532\\_91](https://doi.org/10.3726/ja532_91)>
- Gogo no eikô. Ein Roman von Yukio Mishima. In: Wiener Staatsoper (Hg.) *Hans Werner Henze: Das verratene Meer*. Programmheft. Wien: Wiener Staatsoper, 2020: 62–75.
- Number Systems (Binary and Ternary). In: Markus Krajewski / Harun Maye (Hg.) *Universalenzyklopädie der menschlichen Klugheit*. Berlin: Kadmos, 2020: 140–142.

◆ 主な担当科目

ドイツ芸術論演習A、ドイツ芸術論演習B、ドイツ文化論研究A、ドイツ文化論研究B、ドイツ芸術論特殊研究A、ドイツ芸術論特殊研究B



はね れいか  
羽根 礼華 / HANE Reika 准教授

〉 専門分野

近現代ドイツ文学、比較文学

〉 研究キーワード

言語的暴力、沈黙、非行為、学術言語としてのドイツ語

〉 最終学歴・学位・取得大学

Dr. phil. (ケルン大学)

〉 問い合わせ先

rhane001o@g.chuo-u.ac.jp

〉 リンク

[研究者情報データベース](#)

◆ 研究内容の紹介

言葉は大きな力を持ちえます。人を励まし、慰めることもあれば、傷つけ、貶めることもあります。社会的な関係を作り出し、変革し、あるいは破壊する力が、言葉にはあります。言葉だけではありません。何かを言わないこと、何も言わないこともまた、時として言葉と同じく、あるいは言葉以上に雄弁でありえます。私は、このような言葉の力、沈黙の力を、とりわけその負の側面、すなわち暴力的な側面に注目して、ドイツ語圏の近現代文学を主な研究対象に、日本の文学とも比較しつつ研究してきました。これまでに取り組んできたのは、インゲボルク・バツハマンやトーマス・ベルンハルト、安部公房や大江健三郎などのテキストです。目指すのは、文学テキストに書き込まれた作家たちの思索を読み解きつつ、言語的暴力について思考し、文学研究の立場から様々な専門分野をまたぐ暴力研究に寄与することです。学生のみなさんには、授業や研究において、文学テキストを丹念に読み、仔細に分析し、深く考える経験が、言葉の力に対するセンシビリティを高めることにつながってほしいと望んでいます。

現在は、オーストリアの作家イルゼ・アイヒンガー(1921-2016)のテキストに集中的に取り組んでいます。アイヒンガーは母方がユダヤ系です。ナチ時代の経験は、アイヒンガーの人生に大きな傷痕を残しました。アイヒンガーのテキストの多くは、当時の出来事に直接的には言及していませんが、それにもかかわらず、ナチの暴力を想起し、犠牲者を追悼しています。時に難解なアイヒンガーの筆致は、「言葉は、それがそこにあるときには、アンガー・ジュマンそのものです。言葉がアンガー・ジュマンを描写する必要はないのです」と言うアイヒンガーのアンガー・ジュマンの形であり、歴史上の暴力とそれをめぐる議論への応答でもあります。読み込んでいくと、書かれている内容のみならず、書かれ方自体にもまた、アイヒンガーの思考が詰まっていることが分かります。アイヒンガーのテキストを授業で取り上げることもあります。それは密度の高い文学テキストを読むための鍛錬の機会にもなると考えています。

ドイツ語で書かれた文学を主な対象とする学修と研究においては、ドイツ語で文学テキストや専門書を読み、発表や議論をし、論文を執筆するための知識と技能が欠かせません。学術ドイツ語を用いたこれらの活動は、ドイツ語で日常会話をしたり、メールを書いたり、新聞記事を読んだりするのは、いくぶん勝手が違います。私は、言語学・歴史学分野の研究者と協力して、専門分野の学修と研究に必要な学術ドイツ語の習得についても研究しています。研究の一環として、授業での実践を分析・考察し、研究において得られた成果を授業での実践に還元するという循環が生まれています。

◆ 主な論文・著書

- Gewalt des Schweigens. Verletzendes Nichtsprechen bei Thomas Bernhard, Kōbō Abe, Ingeborg Bachmann und Kenzaburō Ōe. Berlin/Boston: de Gruyter 2014.
- „Kritik der Sprachkritik. Ilse Aichinger antwortet Hugo von Hofmannsthal“. In: *Konstellationen österreichischer Literatur: Ilse Aichinger*. Hg. von Christine Frank und Sugi Shindo. Wien: Böhlau 2023.
- 「暴力の記憶と死者の追悼：イルゼ・アイヒンガーにおけるグリム童話の継承と断絶」『学びの扉をひらく（下）：時間・記憶・記録』(中央大学文学部実践的教養演習編)2022年。
- 「分析的読みの一助としての「音読活動」：学術ドイツ語の読解に向けた授業実践」『人文研紀要』第99号、2021年。
- 「息を断つ芸と「悪い言葉」：イルゼ・アイヒンガーにおける非行為と言語批判」『ドイツ文学』第158号、2019年。

◆ 主な担当科目

比較文学・比較文化演習A、比較文学・比較文化演習B、ドイツ文化論研究 A、ドイツ文化論研究 B、比較文学・比較文化特殊研究A、比較文学・比較文化特殊研究B

◆ メッセージ

あるテーマについて考察しようとする際には、研究書や論文のみならず、文学テキストとの「対話」もまた、実り多いものでありえます。授業では、文学との「対話」に必要なテキスト分析の方法やドイツ語の力、批評理論や関連知識を身につけると共に、論理的な思考力を養うことを目指します。もちろん、参加者の間でも活発な対話を行いたいと思います。

はやし あきこ

## 林 明子 / HAYASHI Akiko 教授



〉 専門分野

ドイツ語学、日本語学、応用言語学

〉 研究キーワード

テキスト言語学、談話分析、語用論、言語教育

〉 最終学歴・学位・取得大学

Doktor der Philosophie (Universität Trier)

〉 問い合わせ先

nhakiko2●tamacc.chuo-u.ac.jp

〉 リンク

[研究者情報データベース](#)

◆ 研究内容の紹介

ドイツ語と日本語を対象とした文章・談話の研究に携わっています。データを対照言語学の視点から分析することもあります。産出されたテキストの構造分析や会話ストラテジーの分析などを通して、背後にある情報の送り手の意図、受け手への働きかけを探ります。

テキスト言語学の枠組みでは、ドイツ文学作品とその日本語訳を資料として用い、ドイツ語と日本語を対照しながら、それぞれの言語の指示・照応の体系を研究したものが、例として挙げられます。また、日本語教育の視点から、日本語で書かれたテキストのマクロ構造の階層性とその受容プロセスを、日本語母語話者と非母語話者とで比較しながら分析しました。

会話分析の枠組みでは、ドイツと日本で収集したドイツ語母語話者間・日本語母語話者間の会話のデータを分析し、依頼の会話の中で「断り」と「詫び」という発話内行為が、いつ、どのように言語化され出現するかを、会話のストラテジーと会話展開上の機能という視点から探りました。会話のやりとりの中では、プロソディ(韻律的特徴)も重要な手がかりとなります。そこで、無音ポーズ(沈黙)に焦点を当て、発話の対照音声分析に基づく研究を行いました。日本語・ドイツ語・フランス語・韓国語による会話のインタラクションに見られる音声的な特徴(無音ポーズ、発話の頻度と持続時間、長音化など)を分析したところ、言語間で統計的に有意な差が認められました。プロソディが談話管理と有機的に関連し、4言語でそれぞれにストラテジーとして機能していると言えます。

近年は、これまでの研究を通して得た知見を、大学におけるドイツ語教育の新しい位置づけの考察に活用することを試みています。日常のコミュニケーションの中で用いられる言語変種とは異なる「学術ドイツ語」という新しい視点から、大学におけるドイツ語教育の役割を考えます。言語学分野の基礎研究に加え、教育実践とそこから得られたデータの分析に基づいた研究活動です。「専門分野の教育を支える言語変種「学術ドイツ語」の習得:「読み」を焦点に」(JSPS 科学研究費基盤研究C)を初め、文学・歴史学分野の研究者とともに学際的なプロジェクトを進めています。

◆ 主な論文・著書

- 「言語変種としての学術ドイツ語の理解と習得 ―言語学・文学分野の「導入文献」テキストを用いた授業実践をもとに考える―」(共著)中央大学人文科学研究科『人文研紀要』89号 2018年
- 「学術ドイツ語を生かした研究活動の実現に向けて ―言語学・歴史学分野への「導入文献」を用いた授業実践から考える―」(共著)中央大学文学部『紀要 言語・文学・文化』124号 2019年
- „Mobile Kurznachrichtenkommunikation im Sprach- und Kulturvergleich - Potenziale für Linguistik und Sprachdidaktik-“ (zs. mit Imo, W. und Ogasawara, F. ). In: Erträge des JGG-Seminars für Deutsch als Fremdsprache (Online ISSN: 2434-5415) Volume 1, 2020.
- 「メタレベルの『気づき』から探る『読み』の役割 ―ドイツ語文献を用いた言語学分野での実験的試み―」『紀要 言語・文学・文化』128号 2021年
- 「歴史学の授業へのドイツ語史料導入の試み―大学の専門教育における歴史学と言語学の協働―」(共著)東京大学ドイツ・ヨーロッパ研究センター『ヨーロッパ研究』22号 2023年

◆ 主な担当科目

ドイツ語学・教授法演習A、ドイツ語学・教授法演習B、ドイツ文化論研 A、ドイツ文化論研究 B、ドイツ語学・教授法特殊研究 A、ドイツ語学・教授法特殊研究 B

◆ メッセージ

「～のはず」といった思い込みや印象論ではなく、まずは言語を客観的に観察し、言語事実に基づいて論じる姿勢を身に付けてください。そのためにも、先行研究を正確かつ批判的に読み、それを参考にしながら自分でデータを収集し分析・検証する、そして検証結果を踏まえて問題提起を行う、という実証的な方法論を大切に考えています。仮説を立てて検証した結果、思いがけない事実に出会ったり、新たな発展の可能性が見えてきます。



あ べ し げ き  
阿部 成樹 / ABE Shigeki 教授

〉 専門分野

西洋美術史

〉 研究キーワード

新古典主義美術、フランス近代美術、ドミニク・アングル、フランス美術史学史

〉 最終学歴・学位・取得大学

美術史学博士（パリ第1大学）

〉 問い合わせ先

abes●tamacc.chuo-u.ac.jp

〉 リンク

[研究者情報データベース](#)

[中央大学文学部 美術史美術館コース紹介サイト](#)

◆ 研究内容の紹介

フランスを中心とする新古典主義美術、およびアンリ・フォションを中心に美術史学の歴史について研究しています。内容は以下のウェブサイト詳しく記載されていますので、ご覧ください。

■ Researchmap 個人ページ

[https://researchmap.jp/ABE\\_Shigeki/](https://researchmap.jp/ABE_Shigeki/)

■ 中央大学文学部美術史美術館コース スタッフ紹介

<https://arthistory.r.chuo-u.ac.jp/course/faculty>

◆ 主な論文・著書

- 「かたち・装飾・生命」『ユリイカ』5月号（特集＝アンリ・マティス）、青土社、2021年
- 「美術アカデミー：美術を教えることは可能か」美学会編『美学の事典』、丸善出版、2020年
- 『アンリ・フォションと未完の美術史 かたち・生命・歴史』、岩波書店、2019年
- アルバート・ボイム『アカデミーとフランス近代絵画』（共訳）、三元社、2005年
- アンリ・フォション『かたちの生命』ちくま学芸文庫、2004年

◆ 主な担当科目

インターンシップ（美術館実務研修）、フランス近代美術史演習A、フランス近代美術史演習B、フランス近代美術史特殊研究A、フランス近代美術史特殊研究B

◆ メッセージ

自由で柔軟な知としての美術史学には、広い展望があると思います。研究職に限らず社会一般で専門的な知見と視点、思考力を生かす道も念頭に、指導したいと考えています。美術館見学も交えながら、テーマ設定、文献読解、そしてなにより作品の見かたについての学問的な手際を身につけ、各自に合った未来を開いていきましょう。



いずみ みちこ  
 泉 美知子 / IZUMI Michiko 准教授

〉 専門分野

美術史、芸術学

〉 研究キーワード

文化遺産、美術館、美術史学史、美術批評、建築の表象、中世美術の再評価

〉 最終学歴・学位・取得大学

博士（学術）東京大学

〉 問い合わせ先

izumim.197@g.chuo-u.ac.jp

〉 リンク

[研究者情報データベース](#)

◆ 研究内容の紹介

芸術作品に二つの生があるとしたら、第一の生は芸術家が生み出す作品そのものであり、第二の生は社会が生み出す作品の価値と言えるでしょう。これまで関心を注いできたのは、第二の生をめぐる研究です。芸術作品が社会のなかでどのように受容されたのか、忘れ去られた作品あるいは価値のないものとされていた作品がどのように再発見・再評価されたのか、美術館や文化財保護の制度のもとでどのように守られ受け継がれてきたのか、こうした問題意識のもとに考察を重ねてきました。研究対象は 19 世紀から 20 世紀初頭のフランスですが、このテーマは私たちにとっても今の文化遺産を次の世代にどのように継承してゆくのかという問題につながってきます。

2019 年火災に見舞われたパリのノートル＝ダム大聖堂を例に考えてみましょう。中世の時代に建造されたこのゴシック建築は、ルネサンス以降 “野蛮な” 様式とみなされていました。しかし 19 世紀にゴシック・リヴァイヴアルという中世建築を積極的に再評価する動きがヨーロッパで広がり、ロマン主義やナショナリズムの思潮と結びついて、国民精神を体現する建造物として称えられるようになります。フランスでこうした機運を高めたのが、ヴィクトル・ユゴーの歴史小説『ノートル＝ダム・ド・パリ』でした。この小説が刊行された 1830 年代に文化財保護のための制度が立ち上がり、本格的な保護活動が開始されます。革命期の破壊行為により荒廃の状態にあった歴史的建造物の大規模な修復が行われ、ノートル＝ダム大聖堂を手掛けたのがヴィオレ＝ル＝デュックです。政府による修復・保存活動が進められるなかで、過去から受け継いだ作品を保護し後世に継承するという考え方も近代社会のなかで形成されてゆくこととなります。博士論文では、「文化遺産」の思想がどのような歴史的背景のもとで生まれ、発展したのかについて考察しました。

ある作品がいかなる理由で価値があると見なされ、保存の対象となるのか、そこには眼差しがあります。これまでの研究を通して学んだことは、この眼差しが複雑な歴史的文脈から生まれるということです。その文脈を解きほぐす作業のなかで、政治、経済、宗教、思想など、芸術領域を超えた問題との関わりが見えてきます。「文化遺産」の文化史を考えるには、多様な領域へと視野を広げなければならないのです。

最近の関心は、19 世紀ヨーロッパの旅の文化のなかでの建築への眼差しです。当時の大型出版物のイメージとテキストを分析対象に、大聖堂の表象から当時のどのような保護意識が読み取れるのかについて考察しています。自分自身も旅に出て、建築への眼差しを鍛えたいと思っています。

◆ 主な論文・著書

- 論文(単行本)「「プルーストの遺産への眼差し——『失われた時を求めて』における教会をめぐる」『プルーストと芸術』(共著、吉川一義編水声社、2022 年 4 月、225-244 頁
- 論文(雑誌)「『古きフランスのピレスクでロマンティックな旅』を楽しむために」、『#映える風景を探して—古代ローマから世紀末パリまで』展図録、町田市立国際版画美術館、2021 年、14-19 頁
- 論文(雑誌)「19 世紀の大聖堂と旅: ジョン・ラスキンと北フランス」、『中央大学文学部紀要(言語・文学・文化)』第 128 号、2021 年 3 月、85-116 頁
- 論文(雑誌)「ランス大聖堂《微笑みの天使》という神話の誕生: 第一次世界大戦と文化遺産の危機」、『國學院大學紀要』第 57 号、2019 年 3 月、29-50 頁
- 『文化遺産としての中世: 近代フランスの知・制度・感性に見る過去の保存』三元社、2013 年 8 月

◆ 主な担当科目

インターンシップ(美術館実務研修)、フランス近代美術史演習A、フランス近代美術史演習B、インターンシップ(美術館実務研修)、フランス近代美術史特殊研究A、フランス近代美術史特殊研究B

◆ メッセージ

ある対象を別の角度から見る、別の文脈に位置付けることで、今まで気が付かなかった部分が浮かび上がってきます。価値を見出す楽しさ、スリリングな発見を、美術研究を通してともに体験しましょう。



おの うしお  
小野 潮 / ONO Ushio 教授

〉 専門分野

19 世紀フランス文学

〉 研究キーワード

スタンダール、シャトーブリアン、旅行記、自伝、トドロフ

〉 最終学歴・学位・取得大学

東北大学大学院文学研究科博士課程後期単位取得退学

〉 問い合わせ先

ushio●tamacc.chuo-u.ac.jp

〉 リンク

[研究者情報データベース](#)

[個人紹介](#)

◆ 研究内容の紹介

19 世紀前半の文学、なかでも『赤と黒』『パルムの僧院』の二冊の小説で有名なスタンダールを主な研究対象としています。しかしスタンダールは小説だけを書いた作家ではなく、多くの評論、旅行記、伝記、自伝なども残しています。そしてそのいずれの書き物においても、非常に独創的な足跡を残した作家です。彼が残した小説作品のみでなく、その他のジャンルに属する彼の作品についても、それらを資料として読むのではなく、作品として読むことを心がけています。作品として読むとは、それらがどのような形で読者に働きかけるための戦略を取っているかを解明していこうとするということです。

またスタンダールから若干年上の世代に属する、言い換えればナポレオンと同世代の作家であるシャトーブリアン、バンジャマン・コンスタン、スタール夫人といった作家たちの作品にも関心を持ち続けています。彼らの作品についても、スタンダールの作品に向かうのと同様の視点を採用するとともに、彼らが、自分たちが生きた時代であるフランス革命期やナポレオン期をどのように表象しようとしているかに関心を抱いています。

さらに翻訳者として、ブルガリア出身であり、青年期にフランスに移住し、フランス語で執筆活動を続けた歴史家、思想史家ツヴェタン・トドロフの著作の翻訳を継続的に手掛けており、現在まで単独訳、共訳を含めて九冊出版しています。トドロフは、他者の問題、文化同士の出会いの問題、善悪二元論、全体主義、民主主義といった現代文化を考えるに当たって不可欠のトピックを数多く取り上げており、彼の著作の翻訳に携わる経験が翻って十九世紀の作家たちを読む際にもおおいに参考になっています。

◆ 主な論文・著書

- ツヴェタン・トドロフ著『善のはかなさーブルガリアのユダヤ人救命』、新評論、2021
- ツヴェタン・トドロフ著『野蠻への恐怖、文明への怨念』、新評論、2020(大谷尚文と共訳)
- ツヴェタン・トドロフ著『屈服しない人々』新評論、2018
- ピエール・ブルデュー他『世界の悲惨』藤原書店、2020(共訳者のひとりとして参加)
- 《Valenod, un autre Julien》, Revue Stendhal, no 1, Presses Universitaires de Sorbonne Nouvelle, 2020

◆ 主な担当科目

フランス近代文学演習A、フランス近代文学演習B、フランス近代文学特殊研究A、フランス近代文学特殊研究B

◆ メッセージ

本年は、シャトーブリアンの自伝・回想録『墓の彼方からの回想』に含まれるナポレオン伝の部分を読んでいます。

シャトーブリアンが時の支配者ナポレオンとどのように対峙し、どのようなナポレオン観を抱き、そしてそれとの相関でどのような自己像を描き出しているかが検討の対象です。またシャトーブリアンのみごとな散文をフランス語の原文で堪能していただきたいというのも、担当教員としての願いです。





がくたに りょう  
学谷 亮 / GAKUTANI Ryo 准教授

〉 専門分野

近現代フランス文学、日仏交流史、比較文学

〉 研究キーワード

クローデル、マラルメ、象徴主義、フランス詩、日仏文化交流、日仏関係、外交と文学

〉 最終学歴・学位・取得大学

博士（フランス文学・文明）（ソルボンヌ大学）

〉 問い合わせ先

gakutani●gmail.com

〉 リンク

[研究者情報データベース](#)

◆ 研究内容の紹介

私が主な研究対象としているのは、ポール・クローデル(1868-1955)という作家です。クローデルは 20 世紀前半のフランスを代表する詩人・劇作家の一人であり、有名な彫刻家カミーユ・クローデルを姉にもつことでも知られています。彼の本業は外交官であり、45 年間に及ぶ外交官生活のなかでアメリカや中国、ブラジルなど多様な国での滞在経験をもちますが、やはり特筆すべきなのは、大正時代に駐日フランス大使として日本に滞在したことでしょう(1921-1927)。私の主たる関心は、この時期にクローデルが日本とどのように関わったのかを総合的に明らかにすることです。短詩集『百扇帖』や詩文集『朝日の中の黒鳥』など、1920 年代のクローデルの著作は日本の文化・風物を題材としたものが数多くありますが、そうした創作活動の礎となった彼の日本観がどのように形成されてきたのかを、日記や書簡だけでなく、フランス外務省のアーカイブに残された膨大な外交文書を分析して明らかにしてきました。さらに、大正時代の日本人がクローデルという人物をどのように捉えていたのかにも強い関心をもっています。彼は「詩人大使」と呼び親しまれ、『日本詩人』『詩聖』『詩洋』といった大正期の詩誌を活躍の場とする若い詩人たちは、みなクローデルに強く惹かれました。また、富田溪仙や竹内栖鳳といった京都画壇の画家たちとの間にも強い友情が結ばれました。そうした交流の諸相を、実証的に明らかにしたいと考えています。

クローデル研究から派生して、日本とフランスの文化交流にも関心をもっています。前述した詩誌では、マラルメやランボー、レニエといった象徴主義の詩人たちの作品が数多く翻訳されました。大正期の日本においてフランス文学がどのように翻訳・紹介・受容されたのか、またフランス語やフランス文学の教育がどのように行われてきたのかについても少しずつ調べています。さらに、永井荷風をはじめとして、フランス文学からきわめて強い影響を受けて創作活動を展開した作家は数多くいます。こうした、日本文学とフランス文学の交流というテーマも、私の研究内容の一部をなしています。

◆ 主な論文・著書

- 「クローデル、メルラン、幣原——1924 年の極東」『クローデルとその時代』(大出敦編)、水声社、2023 年。
- 「文明が国家か——駐日フランス大使ポール・クローデルの中国観」『上海フランス租界への招待』(榎本泰子・森本頼子・藤野志織編)、勉誠出版、2023 年。
- 「滞日期ポール・クローデルの詩学における「空白」の概念——詩の存在論をめぐって」『Stella』第 41 号、2022 年。
- 「ポール・クローデルと詩誌『詩洋』」『仏蘭西学研究』第 48 号、2022 年。
- 「滞日期ポール・クローデルにおける批評と外交の接点——「日本の伝統とフランスの伝統」をめぐって」『フランス語フランス文学研究』第 119 号、2021 年。

◆ 主な担当科目

フランス現代文学演習A、フランス現代文学演習B

◆ メッセージ

論文を書くということは、とても楽しく、同時にとても苦しい営みです。私が愛読する作家の一人であり、かつて本学で教鞭を執った吉田健一という言葉に、「書くということにはどこか不自然な所があり、雲を掴んで岩を積み上げている気になっていなければならない」（「春の酒」）とあります。大作ができあがることを信じて、ともに雲を掴み続けましょう。



たぐち たくみ  
田口 卓臣 / TAGUCHI Takumi 教授

〉 専門分野

フランス思想・文学

〉 研究キーワード

近代フランスの思想、文学における「自然」「文明」「人間」

〉 最終学歴・学位・取得大学

博士（文学）（東京大学）

〉 問い合わせ先

takuomi●tamacc.chuo-u.ac.jp

〉 リンク

[研究者情報データベース](#)

[中央大学仏文専攻 語文コース HP](#)

◆ 研究内容の紹介

現代世界は、予想外の危機が各地で多発する時代となっています。地震、津波、洪水、噴火、干ばつといった自然災害だけではなく、恐慌、大事故、感染症、飢饉、内戦など、文明社会に特有の大きな惨事もまた、頻発しています。何より注意しなければならないのは、いわゆる「自然災害」に見えるものの中にも、実のところ、人間の文明が生みだすさまざまな特徴や問題点が見いだされる、ということです。

私は現在、こうした「文明」の問題点について、主に、思想や文学の研究を通して、理解しようと努めています。たとえば、古典的な思想としては、「自然」と「文明」を対立物とみなす考えかたがあります。しばしばその典型として紹介されるのは、18 世紀スイスの思想家、ジャン＝ジャック・ルソーの「文明批判」です。しかし、きちんとルソーの作品を読んでいくと、彼の考えも決して単純ではないことがわかります。たしかに、ルソーは、厳しく「文明」を批判しましたが、一般に信じられているように「自然に帰れ」と述べたわけではありません。

「自然」と「文明」の問題については、歴史上、実にさまざまな思想家、文学者、芸術家が、それぞれの観点から、複雑かつ繊細な思考を展開してきました。私が関心を寄せているのは、そうした思想と文学の系譜（特に 18 世紀以降のフランスにおける思想と文学の系譜）です。

上で述べたような私の関心の背景には、「私たち人間は、自分自身を超え出るものと、どのように向き合えばよいのか？」という問いがあります。たとえば、「自然」はしばしば、私たちの想定を圧倒するような出来事を引き起こします。ところが、その「自然」で起きることは、私たち人間の文明社会の影響を大きく受けてもいるのです。何より、私たち人間の文明社会には、私たち自身が思いもしないような形で、私たち自身を超え出るものを生み落としてしまう、という不思議な本性があります。しかも、厄介なことに、私たち自身を超え出るものは、ほとんどいつでも、私たち自身のコントロールが効かなくなってしまう。

このような研究が社会の発展に寄与するのだろうか、と思う人もいるかもしれませんが、しかし、そもそも「社会の発展」とは何でしょうか？ 近代以降の世界史は、誰もが「発展」や「進歩」とみなしていたことが、いつの間にか、多くの災いを人間自身にもたらしてしまう、という歴史のくりかえしでした。もしかしたら、「進歩」「成長」「発展」といったモデルに基づいて「文明社会」を捉えようとする発想そのものが、すでに限界を迎えているのではないかと――これこそが、私の研究の出発点なのです。

◆ 主な論文・著書

- Situation de l'aveuglement face à la catastrophe nucléaire : réflexion de la situation post-Fukushima à partir de Günther Anders (共著)『Philosophy World Democracy』、2021 年 3 月
- 「ベルナルダン・ド・サンピエールのフィクション、デイドロのメタフィクション――二つの島における〈まなざし〉の政治」(単著)、『仏語仏文学研究』53 巻、2021 年 2 月
- モンテスキュー『ペルシア人の手紙』(単独訳)講談社学術文庫、2020 年 4 月。
- 『怪物的思考 近代思想の転覆者デイドロ』(単著)講談社選書メチエ、2016 年 3 月。
- 『脱原発の哲学』(共著)人文書院、2016 年 2 月。

◆ 主な担当科目

フランス古典啓蒙文学演習A、フランス古典啓蒙文学演習B、フランス古典啓蒙文学特殊研究A、フランス古典啓蒙文学特殊研究B

◆ メッセージ

現代社会の問題を掘り下げてみると、しばしば、その問題がすでに「古典」のなかで取り上げられていたことに気づかされます。「古典」とは、現代社会の足元や、私たちの生き方の条件を、照らし出す灯火なのです。「古典」ならではの深みをもった言葉に浸ること、現代社会に生きる私たちの存在をじっくりと見つめなおしてみましよう。



ふ えりえ みかえる ふうらんきー

フェリエ, ミカエル フランキー / FERRIER, Michaël Francky 教授

〉 専門分野

フランス文学、比較文学、比較文化

〉 研究キーワード

フランス現代文学、文学とアート、文学と絵画、文学と音楽、文学と映像、文学理論、フランス語圏文学（アフリカ／カリブ海／インド洋）

〉 最終学歴・学位・取得大学

Ancien Elève de l' Ecole Normale Supérieure, Agrégé de Lettres Modernes, Docteur es-Lettres et Arts de l' Université de la Sorbonne.

〉 問い合わせ先

mferrier001x@g.chuo-u.ac.jp

〉 リンク

[研究者情報データベース](#)

[Tokyo Time Table Michaël Ferrier](#)

◆ 研究内容の紹介

第一に、20 世紀から 21 世紀に書かれたフランス語で書かれた文学を専門にしています。対象となるのは「エグザゴン」と呼ばれるフランス本土で活動する作家だけでなく、アフリカ大陸やカリブ海、インド洋などのフランス語圏で活動する作家の作品も対象とします。第二に、文学と芸術（絵画、音楽、映像など）の関係について研究しています。第三に、小説を執筆するなど創作活動を行っています。

◆ 主な論文・著書

- “Dans l’oeil du désastre : créer avec Fukushima” (Fukushima and the Arts), Paris, éd. Thierry Marchaisse, 2021
- “Scrabble, une enfance tchadienne”, Paris, Mercure de France, 2019
- “François, portrait d’un absent”, Paris, Gallimard, 2018
- “Mémoires d’outre-mer”, Paris, Gallimard (英語: ‘Over Seas of Memory’, University of Nebraska Press, 2019) 2015
- “Fukushima, récit d’un désastre”, Paris, Gallimard (日本語: 「フクシマ・ノート」、新評論、2012)

◆ 主な担当科目

フランス古典啓蒙文学演習A、フランス古典啓蒙文学演習B、フランス古典啓蒙文学特殊研究A、フランス古典啓蒙文学特殊研究B

まえのその のぞむ

## 前之園 望 / MAENOSONO Nozomu 准教授



〉 専門分野

シュルレアリスム研究、フランス詩

〉 研究キーワード

アンドレ・ブルトン、シュルレアリスム、20世紀フランス文学、ポエム=オブジェ、新しい神話、オートマティスム

〉 最終学歴・学位・取得大学

文学芸術学博士、リュミエール・リヨン第2大学

〉 問い合わせ先

maenosono●tamacc.chuo-u.ac.jp

〉 リンク

[研究者情報データベース](#)

[中央大学仏文専攻 語文コース HP](#)

[前之園望の研究室 HP](#)

### ◆研究内容の紹介

20世紀最大の芸術運動であるシュルレアリスム、およびその中心人物のアンドレ・ブルトン(1896-1966)について研究しています。シュルレアリスムは、ことばで作られた文学作品と物質で作られた造形作品の境界を曖昧にして、特殊な芸術空間を出現させます。そして、その芸術空間は、私たちが普段当たり前に思っている日常的な世界の見方を一変させる力を持っています。ただし、その芸術空間にアクセスするには、少しだけコツがいります。私の研究は、そのコツを明らかにして、シュルレアリスムから生まれた文学作品、芸術作品のもつ奥深い魅力を、なるべく分かりやすく伝えることを目標にしています。

アンドレ・ブルトンにフォーカスしてお話をすれば、私は彼の詩作品の分析を重点的に行っています。ブルトンは多くの詩を残しているのですが、正面からその詩を読むという研究者は多くはありません。その理由はおそらく、『シュルレアリスム宣言』(1924)で「自動記述」の実践が宣言されたことにあります。その結果、ブルトンの詩は作者の創意工夫とは無縁の適当な走り書きであり、ただ偶然にできただけの意味不明な単語の羅列を読むことに意味などない、という「誤解」が広く浸透したのです。そして、その「誤解」は現在にまで続いています。しかし、ブルトンが理論的(に見える)文章の中で主張していることと、彼が実際に制作している詩作品との間には「ずれ」があります。作品を実際に分析してみなければ分からないことはたくさんあり、ブルトンの詩法は時代によって変化するので、まだまだ当分は彼の詩の研究に飽きることはなさそうです。

もうひとつ、ブルトンに関していえば、彼独自の「神話」観、特に「透明な巨人」の神話に関しても興味が付きません。詳しく話すとキリがなくなりますので、ここでは第二次世界大戦末に考案された「透明な巨人」の神話が、21世紀の現代社会においてもまだ色あせていない、ということだけご紹介しておきます。

### ◆主な論文・著書

- "« L'Océan glacial » : poème-objet ou affiche surréaliste ?", 『人文研紀要』、第103号、2022年9月
- 「アイスランドスパーの詩学 : アンドレ・ブルトンの連作ポエム=オブジェ」、『人文研紀要』、第99号、2021年9月
- "La poétique du *mapping vidéo verbal* : le cas d'Arcane 17 d'André Breton", 『仏語仏文学研究』、第54号、2020年12月
- 「潜在的現実の現働化: アンドレ・ブルトンにおけるポエム = オブジェの詩学」、『フランス語フランス文学研究』、第113号、2018年8月

### ◆主な担当科目

フランス詩演習A、フランス詩演習B

### ◆メッセージ

読書には、情報収集型と体験熟成型の、二種類の読書があります。情報収集型の読書は「瞬間的に役に立つ」読書で、体験熟成型の読書は「人生を豊かにする」読書です。読む側が人生経験や読書経験を重ねてから再読すると、同じ作品、同じ文章であっても、以前とは全く異なる印象を与えるようになります。こうして、文学作品は、再読されるたびにますます複雑な表情を見せるようになり、深みを増してゆきます。わたしたちは、再読を通して、本=作品を「育てている」のです。ぜひあなただけの「本の育て方」を見つけてください。



いづか ゆとり

## 飯塚 容 / IIZUKA Yutori 教授

---

 > 専門分野

中国現代文学、演劇

## &gt; 研究キーワード

文明戯、話劇、曹禺、高行健、余華、閻連科

## &gt; 最終学歴・学位・取得大学

東京都立大学大学院人文科学研究科博士課程単位取得満期退学

## &gt; 問い合わせ先

yizuka001a@g.chuo-u.ac.jp

## &gt; リンク

[研究者情報データベース](#)


---

 ◆研究内容の紹介

中国の演劇と言われて、すぐに思い浮かぶのは「京劇」などの伝統劇でしょう。中国伝統劇の最大の特徴は歌唱を伴うことです。これに対して、20世紀の初頭に誕生したセリフを中心にした「新劇」を中国では「話劇」と呼んでいます。私が研究対象にしているのは、この「中国話劇」です。特に、「中国話劇」と日本の関わりを中心に、これまで研究を進めてきました。

まず、注目すべきは清末民初の時代、日本で言えば明治末から大正初期の東京における中国人留学生の活動です。演劇を愛好する留学生たちは当時日本で流行していた「新派劇」の影響を受けて「文明戯」と呼ばれる新しい演劇の実践を始めました。「新派劇」が「歌舞伎」と「新劇」の中間に位置づけられるように、「文明戯」は「中国伝統劇」と「話劇」の中間的形態の演劇で、「話劇」誕生の基礎を築いたと言われています。私はこの「文明戯」と日本の関わりを調べて、その成果を『中国の「新劇」と日本』（中央大学出版部、2014年8月）という著書にまとめました。

また、1930年代の後半、日中戦争前夜の東京でも、中国人留学生たちは演劇活動を展開しました。特に有名なのは、1935年に上演された劇作家・曹禺の『雷雨』という作品です。この劇作は中国話劇を世界的な水準にまで押し上げたと評価され、現在も中国で繰り返し上演されています。このような作品の実質的な初演が東京で行われたこと、それに日本人が協力したことは貴重な事実です。私は当時の上演状況を調べる一方、曹禺の劇作についての分析を重ねてきました。『雷雨』などの脚本の翻訳も刊行しています。

中国が改革開放政策に転じた1980年代以降、「話劇」作品の来日公演が頻繁に行われるようになりました。友好ムードの中での大型話劇の公演から、各種演劇祭に参加した小劇場演劇の演目、そして日中合同公演に至るまで、様々な試みがなされてきました。こうした経緯についても論文「中国現代演劇と日本——「話劇」の来日公演から」（『文学』第15巻第2号、2014年3月）にまとめる一方、主要作品の翻訳も手掛けています。

私が長年取り組んできたもう一つの仕事は、中国の同時代小説の翻訳紹介です。1980年代から2005年まで続いた『季刊 中国現代小説』（蒼蒼社）という雑誌における多様な作家の作品紹介、全10巻からなる『コレクション 中国同時代小説』（勉誠出版、2012年）の刊行などがあります。また、中国語で創作する作家として初めてノーベル文学賞を受賞した高行健の主要な小説も翻訳出版しました。近年は高行健に続いて世界的な知名度を得ている、余華、閻連科の作品を中心に翻訳紹介を続けています。

---

 ◆主な論文・著書

- 「日本における曹禺『日出』の上演について」、中央大学文学部『紀要』第294号、2023年2月
- 「翻訳で世界につながる中国文学」、『中国言語文化学研究』第8号、2019年3月
- 「余華作品在日本的翻訳と研究」、『全球視野下的余華』、上海交通大学出版社、2019年3月
- 『中国話劇芸術史』（共著、田本相主編）江蘇鳳凰教育出版社、2016年5月
- 『作家たちの愚かしくも愛すべき中国』（共編著訳）中央公論新社、2018年6月

---

 ◆主な担当科目

中国現代文学演習A、中国現代文学演習B、中国語翻訳演習A、中国語翻訳演習B、中国文学特殊研究ⅠA、中国文学特殊研究ⅠB

---

 ◆メッセージ

大学院では、「中国語翻訳演習」および「中国現代文学演習」という科目を担当してきました。前者では、近年の中国文学作品をこなれた日本語に移し変える翻訳能力を養成します。後者は、小説や演劇脚本を読みこなす読解力、作家や作品について調べて発表するプレゼン能力を身につける授業です。積極的な関心を持つみなさんの入学を期待しています。



いしむら ひろし  
石村 広 / ISHIMURA Hiroshi 教授

〉 専門分野

中国語文法論、中国語教授法

〉 研究キーワード

北京官話、歴史文法、中日対照研究、「動詞＋補語」構造、ヴォイス

〉 最終学歴・学位・取得大学

博士（文学）（東北大学）

〉 問い合わせ先

ishimura●tamacc.chuo-u.ac.jp

〉 リンク

[研究者情報データベース](#)

◆ 研究内容の紹介

人間の言語がもつ普遍性と個別性の観点から、北京官話の文法を研究しています。

中国語（漢語）は、英語の「三単現のs」のように他の語との関係を示す目印を持ち合わせていませんし、基本的に単語の形が変化することはありません。語が集まって文をつくるとき、形の上ではただ羅列されるだけで、互いに孤立しています。この種の言語を「孤立語」と言います。東南アジアのタイ語も、このタイプに属します。

孤立語タイプの言語は語と語の位置関係によって文法的意味を表すので、通常、文の基本語順は「S(主語)+V(述語動詞)+O(目的語)」になります。例えば、「我打他。」は「私は彼を叩く」という意味ですが、二つの名詞を互いに入れ替えて“他打我。”とすると、「彼は私を叩く」という意味に変わります。もし“他我打。”のように動詞の前に名詞を二つ並べると、「彼が私を叩く」とも「彼を私が叩く」ともとれる曖昧な文になり、話し手が意図する意味を聞き手に正確に伝えることが難しくなります。したがって、孤立語タイプの言語の基本語順は、SVOになると考えられています。

このように説明すると、中国語は英語と同じ語順をもつ言語のように感じられるかもしれませんが、ところが実際は、SOV の語順もよく用いられます。次の中国語の文をその下の日本語の訳と比べてみてください。

【中国語】我 / 把自己的情形 / 跟她 / 一五一十地 / 都 / 说 / 了。

【日本語】私は / 自分の身の上を / 彼女に / 一部始終 / すべて / 話し / た。

中国語は前置詞を使い、日本語は格助詞（後置詞）を使うといった違いはありますが、中国語のフレーズ（／で区切ったかたまり）の配列は、日本語のフレーズの配列と一致しています。日本人に馴染みの深い漢文、すなわち古典語と比べると、現代語は、“把～”（～を）や“跟～”（～に）のような日本語の格助詞に相当する成分、すなわち前置詞が発達しているので、SOV 語順が頻繁に現れるのです。文末の完了を表す“了”も、日本語の「～た」に対応しています。日本語のように、実質的な意味を持つ語（自立語）に文法上の意味を表す助詞や助動詞（機能語）を付けて文を作るタイプの言語を「膠着語」といいますが、大雑把に言うと、中国語は孤立語的な性格と膠着語的な性格を併せ持っているのです。

上で述べた類型学的な二面性は、現代語の文法構造について研究する「統語論」のみならず、どのような時代的変化を経て構文が成立したのかを探究する「歴史文法」、中国語と日本語の表現法の違いについて比較・分析する「中日対照研究」など、関連するさまざまな分野で大切な視点になります。言語の多様性を理解する上でも、中国語の研究は重要な意義があると考えています。

◆ 主な論文・著書

- 汉语南方方言的动宾补语序——兼谈与壮侗语的语言接触问题，《语言研究集刊》第二十辑，上海辞书出版社，2018年
- 汉语动结式在语言类型上的两面性——从藏缅语的使动和自动的对立谈起，《世界汉语教学》第4期，2019年
- 致事型数量动结式的产生机制——致动用法的发展和变异，《当代语言学》第1期，中国社会科学院，2020年
- 汉语“复合动趋式+宾语”的语序问题，《语言教学与研究》第4期，2021年
- 日本汉语语法研究的源流与现状、『現代中国語研究』第24期，東京：朝日出版社，2022年

◆ 主な担当科目

中国語現代文法演習A,中国語現代文法演習B,中国語学特殊研究 I A,中国語学特殊研究 I B

◆ メッセージ

ことばにはそれを用いてきた民族の歴史が刻まれているといっても過言ではありません。中国語のように古い時代まで遡ることができて、日本語とも英語とも文法構造が異なる言語の研究はとても刺激的です。



えのもと やすこ  
榎本 泰子 / ENOMOTO Yasuko 教授

〉 専門分野

中国近代文化史、比較文化

〉 研究キーワード

上海、租界史、文化史、西洋音楽、日中関係

〉 最終学歴・学位・取得大学

博士（学術）（東京大学）

〉 問い合わせ先

yenomoto●tamacc.chuo-u.ac.jp

〉 リンク

[研究者情報データベース](#)

◆ 研究内容の紹介

19 世紀半ば以降の中国における西洋音楽受容史の研究が原点です。その後、近代文化の中心であった上海租界の研究を始め、多国籍の人々による都市の暮らしや、世界規模の文化の流動に関心を持つようになりました。近年は現代的な問題ともからめて、日中間の人的往来や文化交流の歴史を検証しています。若い世代のみなさんが、日中両国の現在と未来を考える契機となるような、研究の視点を提示することが目標です。

◆ 主な論文・著書

- 『「敦煌」と日本人——シルクロードにたどる戦後の日中関係』中公選書、2021 年 3 月
- 『上海フランス租界への招待——日仏中三か国の文化交流』（編著）勉誠出版、2023 年 1 月
- 『アジアと生きる アジアで生きる——中央大学文学部プロジェクト科目講義録』（編著）樹花舎、2018 年 3 月
- 『『大陸新報』から見る上海租界の音楽文化』（論文、単著）『紀要』言語・文学・文化第 122 号（通巻第 270 号）中央大学文学部、2019 年 3 月
- 「日本における中国のソフトパワーとその限界——韓国ソフトパワーとの比較から」（論文、安野智子との共著）『紀要』社会学・社会情報学第 30 号（通巻第 283 号）中央大学文学部、2020 年 3 月

◆ 主な担当科目

日中比較文化演習A、日中比較文化演習B、中国文化特殊研究ⅡA、中国文化特殊研究ⅡB

◆ メッセージ

研究の基本は、1) 資料に書かれたことをきちんと読み取り、正確な知識として自分の身に付けること、2) 自分の考えを適切な言葉で表現すること、の二つだと思います。インプットとアウトプットのバランスがうまく取れた時に、よい成果（論文）が生まれるのではないのでしょうか。



おいかわ じゅんこ  
及川 淳子 / OIKAWA Junko 教授

〉 専門分野

現代中国社会、政治社会思想

〉 研究キーワード

現代中国社会、政治社会思想、六四・天安門事件、普遍的価値、市民社会

〉 最終学歴・学位・取得大学

博士（総合社会文化）（日本大学）

〉 問い合わせ先

ojunko001m@g.chuo-u.ac.jp

〉 リンク

[研究者情報データベース](#)

◆ 研究内容の紹介

現代中国の社会、特に言論空間と政治社会思想について研究しています。中国憲法では言論の自由が明記されていますが、中国共産党の政権下では政治的な自由が厳しく制限されています。中国共産党政権が掲げる「社会主義の核心的価値観」は、自由、民主、人権を尊重する「普遍的価値」とは異なり、時に対立する価値観として、中国社会や国際社会における対中認識に大きな影響を及ぼしています。しかし中国では、言論や思想に対する規制が強化されている中でも、様々な思潮が存在し、自由と規制が拮抗する中で、現代中国の思想地図は急速に変容しています。現在、民主化をめぐる思潮は地下水脈のように可視化することが困難ですが、中国社会の柔軟性や強靱性について、思想の領域から考察していく必要性があると考えます。このような問題意識に基づいて、中国社会における人びとの思想と行動、その諸様相を読み解き、中国についての理解を深めることを研究課題として、特に中国におけるリベラリズムをめぐる言説について研究しています。

< 主要な研究テーマ >

1. 李鋭に関する研究

中国共産党幹部で元毛沢東秘書の李鋭（2019年101歳で死去）のオーラルヒストリーを19年間続けました。近頃、彼の83年分の日記がアメリカのスタンフォード大学フーバー研究所に寄贈されたので、今後は「李鋭日記」の研究を本格的に進める予定です。「李鋭日記」については、NHKスペシャルなどのテレビドキュメンタリー番組の制作にも協力しています。

2. 劉曉波に関する研究

1989年の六四天安門事件に深く関わった作家の劉曉波（2010年、獄中でノーベル平和賞を受賞し、2017年獄死）の政治評論を研究し、翻訳紹介を続けています。

3. 「習近平新時代中国特特色社会主義思想」に関する研究

近年、いわゆる「習近平思想」は、学校教育における徹底、家庭教育への介入などが顕著になっています。中国共産党の思想宣伝工作を読み解き、現代中国の社会変容について思想の領域から構造的な分析をしています。

参考：中央大学教員紹介：及川淳子

<https://www.chuo-u.ac.jp/academics/faculties/letters/major/chinese/detail/teacher/teacher05.html>

◆ 主な論文・著書

- 論文「『習近平時代』の思想宣伝工作」『東亜』No.655、2022年1月号
- 論文「中国『デジタル・レーニン主義』の思想的背景」『国際問題』No.705、2022年2月
- 論文「習近平政権の『思想学習』社会の領域を中心に」『現代中国』（特集 建党百年と「社会主義」中国のゆくえ）、2022年10月
- 論文「習近平政権の『中国式現代化』」『研究中国』（特集 中国：地殻変動の根底を探る）、2023年10月
- 張博樹著、石井知章・及川淳子・中村達雄 訳『新全体主義の思想史 コロンビア大学現代中国講義』白水社、2019年
- 石井知章、及川淳子共編著『六四と一九八九 習近平帝国とどう向き合うのか』白水社、2019年
- 川島真 編『ようこそ中華世界へ』昭和堂、2022年（分担執筆：第8章 社会 一元化と多元化、社会変容の力学）
- 栄剣著、石井知章ほか共訳『現代中国の精神史的考察：繁栄のなかの危機』白水社、2023年

◆ 主な担当科目

中国思想文化演習A、中国思想文化演習B、中国文化特殊研究 I A、中国文化特殊研究 I B

◆ メッセージ

自分が興味関心をもったこと、もっと研究してみたいと思ったこと、大学院に進学して論文を書こうと思ったその気持ちを大切にしてください。研究とは「真理の探究」です。中央大学大学院で、あなたらしい学びを深めてください。





ざいもく や あつし  
材木谷 敦 / ZAIMOKUYA Atsushi 教授

〉 専門分野

中国古典文学

〉 研究キーワード

中国古典文学、明、清、批評的言説

〉 最終学歴・学位・取得大学

早稲田大学大学院文学研究科中国文学専攻博士後期課程中退

〉 問い合わせ先

azaimokuya001j●g.chuo-u.ac.jp

〉 リンク

[研究者情報データベース](#)

◆ 研究内容の紹介

主な研究対象は明・清代の詩文論、小説論、戯曲論など、批評的言説です。現時点で古典文学と目されるテキストをかつての人々がどのように論じたのかを検討しています。ある言説と他の言説との関係に着目し、様々な言説が立ち現れた必然性を探ることに興味があります。そのような検討を踏まえて、古い時代の思考や感受性が後の時代に対してどのように影響したりしなかったりしているのかを考えることも、重視しています。

◆ 主な論文・著書

- 「『本色』という語をめぐって：書論を参考に」、『中央大学文学部紀要』279、2020年3月
- 「王世貞の戯曲関連言説における『本色』について」、『中央大学文学部紀要』274、2019年3月
- 「李開先『西野春遊詞序』について」、『中国都市芸能研究』第十六輯、2018年2月

◆ 主な担当科目

中国古典文学演習A、中国古典文学演習B、中国文学特殊研究ⅡA、中国文学特殊研究ⅡB



こばやし けんいち

## 小林 謙一 / KOBAYASHI Kenichi 教授

---

 > 専門分野

考古学

## &gt; 研究キーワード

日本考古学、先史時代、縄文時代、縄紋、年代測定、文化財科学、博物館学

## &gt; 最終学歴・学位・取得大学

博士（文学）（総合研究大学院大学）

## &gt; 問い合わせ先

kobayashikenichi22@gmail.com

## &gt; リンク

[研究者情報データベース](#)
[中央大学考古学ゼミ](#)


---

 ◆ 研究内容の紹介

考古学は、埋まっている土器などの文物、家や墓などの遺跡から、過去の社会や暮らしを復元する学問です。文献史学と異なった方法で、文字記録が残されていない先史時代を復元する学問として成立しました。近年では、新しい時代についても、文献記録と異なる面から歴史を復元する分野として、日本で言えば平城京などに代表される古代から、都市遺跡や城郭址などを対象とした中世考古学・近世考古学、さらには戦争遺跡などを対象とした近現代考古学まで対象が拡がり、物質文化による新たな歴史像を提示しつつあります。

日本考古学は、御雇外国人学者であったモースによる大森貝塚の発掘によって現代に続く学問が構築されたとされ、明治時代以降に体系化された比較的若い学問ですが、日本の考古学は世界的に見ても発掘数が多く、細かい時間軸となっている土器編年研究など研究が大きく進展しています。

日本は、狭い国土に多くの人々が暮らしてきたため、遺跡が高い密度で残されています。日本人は、歴史好きと言われるますが、過去の文化財を大事にする意識が高く、遺跡など埋蔵文化財も史跡など文化遺産として残し、各地に遺跡資料館や埋蔵文化財センターがあります。また、開発によって遺跡が失われてしまう場合も発掘調査が義務づけられているため、文化財保護行政担当の専門職の公務員や、発掘を職業とする研究者・調査員が多く、学んだことを職業として生かしていく場が比較的多いことも特徴的です。

まだまだ学問を発展させる要素が多く、これから伸びていく学問分野です。例えば、人文科学の中でも一番自然科学的分析を取り入れやすい分野です。その一つに、年代測定法の進展があります。最新研究では、日本を含む東アジアで氷河期の最中である16000年前に土器が出現し、その後急激な温暖化・再寒冷化という気候変動が起き、縄文文化へと変化していることが明らかになり、新石器文化の始まりについて再検討が必要となりました。多様な土器文化が東アジアの中で同時期に各地で生じたのか、どこかの発生地から拡散したのかなど、新たな問題が現れています。

同様に、縄紋時代から弥生時代への変化の年代についても見直しが迫られています。以前は、紀元前4～5世紀頃に稲作技術と青銅器、鉄器が同時に大陸から日本列島へもたらされたと考えられてきましたが、年代測定の結果、紀元前900年以前に水田稲作が伝わった後、紀元前800年頃に青銅器が、さらに紀元前350年頃に鉄器が伝わったことがわかってきました。弥生時代の定義も含めて大きく再検討することとなってきました。

従来からの発掘調査による新たな事実の発見とともに、自然科学的手法の導入によって、大きく発展しているのが考古学の現在です。遺跡を発掘し、土器を研究するに当たり、考古学的な遺跡や遺物への細かい観察眼とともに、科学の眼を通すことで、様々な新しい成果が上がり、新事実が次々と明らかになってきているのです。

参考 URL <https://www.sekaiwokaeyo.com/theme/k0505/>

---

 ◆ 主な論文・著書

- 『国立歴史民俗博物館研究叢書 8 樹木・木材と年代研究』（共著、坂本稔・横山操編）朝倉書店、2021年3月
- 『考古学と歴史学』中央大学人文科学研究所研究叢書 73（編著）中央大学出版部、2020年3月
- 『土器のはじまり』市民の考古学 16（編著）同成社、2019年6月
- 『縄紋時代の実年代講座』（単著）同成社、2019年5月
- 『縄紋時代の実年代—土器型式編年と炭素 14 年代—』（単著）同成社、2017年11月

---

 ◆ 主な担当科目

日本考古学演習A、日本考古学演習B、史料教材研究Ⅱ、日本考古学特殊研究A、日本考古学特殊研究B

---

 ◆ メッセージ

考古学を学ぶには、論文講読などをおこなうゼミ活動も重要ですが、発掘などのフィールドワークも重要です。考古学研究室がおこなう調査や、各地でおこなわれている遺跡発掘に参加してもらい、出土した遺物の整理作業を経験してもらいます。また、外部の研究者が集まる研究会や講演会などにも積極的に参加することを薦めています。


 しみず よしひと  
 清水 善仁 / SHIMIZU Yoshihito 准教授

## &gt; 専門分野

日本近現代史、アーカイブズ学

## &gt; 研究キーワード

公害史、公害資料館、大学史、大学アーカイブズ、公文書館

## &gt; 最終学歴・学位・取得大学

博士（史学）（中央大学）

## &gt; 問い合わせ先

yoshihito●tamacc.chuo-u.ac.jp

## &gt; リンク

[研究者情報データベース](#)

## ◆研究内容の紹介

私の専門分野は日本近現代史とアーカイブズ学です。日本近現代史については、特に近現代の社会問題の歴史に興味があり、いまは公害の歴史を対象として研究に取り組んでいます。公害と聞くと、「四大公害」など戦後の公害を思い浮かべる方が多いかもしれませんが、戦前にも日本各地で公害が発生し、多くの被害がもたらされていました。明治維新を経て日本が近代化を遂げていく過程で生じた様々な公害は、いわば近代化の影の部分であり、そこに焦点を当てて研究することは、日本の近代化の実相をより広い視点からとらえることにつながります。同時に、戦後の公害もまた、高度経済成長をはじめとする経済や社会の発展のなかで生じたものです。現在においてもなお、日本では公害に苦しんでいる人々が少なくありません。現在起こっている公害を正確に認識するうえでも、近現代日本の公害の歴史を研究することは重要であると考えています。

ところで、歴史を研究するためには、それに関する史料が不可欠です。歴史研究者は同時代あるいは後世に作成された史料を通して、過去の出来事や人物などについて研究します。近現代についていえば、文書として残された史料のみならず、写真、映像、音声など、様々な形態の史料があります。そうした多様な史料に基づいて歴史研究を進めるわけですが、その一方で、史料自体についての分析や史料の保存・公開のシステムを検討することも必要です。私のもう一つの専門分野であるアーカイブズ学はこうした点を研究する総合的な学問です。私はこれまでの研究に引き付けて、大学や公害に関係する史料、またそうした史料を収蔵するアーカイブズ機関（大学アーカイブズ、公害資料館、公文書館など）を研究テーマにしています。過去から伝えられてきた史料を、いかに適切なかたちで次の世代に残していくか。そのことは、過去の経験や記憶を未来に継承するための方法を考えることでもあります。アーカイブズ学の研究者としてだけでなく、歴史研究者としても取り組むべき課題であると思っています。

## ◆主な論文・著書

- 「地域社会と公害資料館」『総合文化研究』第 29 巻第 1 号、2023 年
- 「公害経験の継承と公害資料—アーカイブズとしての公害資料館—」『公害の経験を未来につなぐ—教育・フォーラム・アーカイブズを通じた公害資料館の挑戦—』（清水万由子・林美帆・除本理史編）ナカニシヤ出版、2023 年
- 「大学アーカイブズ—歴史・現状・課題—」『歴史学研究』第 1013 号、2021 年。
- 「公害資料の収集と解釈における論点」『環境と公害』第 50 巻第 3 号、2021 年。
- 「近現代日本の公害史研究と公害関係資料」『大倉山論集』第 66 輯、2020 年。

## ◆主な担当科目

日本近代史演習 I A、日本近代史演習 I B、史料教材研究 II、アーカイブズ法制論、アーカイブズ学研究 A、アーカイブズ学研究 B

## ◆メッセージ

近年、デジタルアーカイブなどの進展にともない、国内外の史料へのアクセスが格段に向上しています。日本近現代史の研究においても、そうしたツールを活用しながら様々な史料に目を通し、自身の研究テーマについて多角的な視点から考察することが不可欠です。授業では、論文講読や研究発表により各自の研究の精度を高めるとともに、近現代史研究のためのアーカイブズの活用などについても皆さんと一緒に考えていきます。

しむら かなこ  
志村 佳名子 / SHIMURA Kanako 准教授



〉 専門分野

日本古代史

〉 研究キーワード

宮廷儀礼 都城 王宮 政務 官僚制 雅楽 故実

〉 最終学歴・学位・取得大学

博士（史学）（明治大学）

〉 問い合わせ先

[こちらのフォームよりお問い合わせください。](#)

〉 リンク

[研究者情報データベース](#)

◆ 研究内容の紹介

私の専門分野は、日本古代史です。これまでの研究内容は、①日本古代の王宮と宮廷儀礼に関する研究、②日本古代の政治制度に関する研究、③古代・中世の史料に関する研究の大きく3つに分けられます。

① 日本古代の王宮と宮廷儀礼に関する研究

古代には、大和盆地を中心に多くの王宮が営まれました。王宮は天皇（大王）を中心とする古代権力の中枢部であり、王宮の内部構造やそこで行われた政務・儀礼は、古代王権の権力構造を反映したものと考えられています。発掘調査によって明らかにされつつある王宮の遺構と、『日本書紀』『続日本紀』などの文献史料を合わせて考察することで、古代の日常的な政務形態より具体的に明らかにするとともに、従来の政治史とは異なる視点から古代王権の在り方を研究したいと思っています。

② 日本古代の政治制度に関する研究

古代の政治史については厚い研究史が存在しますが、古代の官人の勤務の実態や天皇の執務形態といった問題については、実は不明な点が多く残されています。そこで、古代の官人の朝参・朝政といった政務の具体像を分析し、官僚制の実態に迫るとともに、長年議論されてきた天皇聴政の問題などについて取り組んでいます。また、宮廷を多方面から支える官司の制度について、奏楽機関としての雅楽寮の動向に着目し、奏楽制度から見た平安貴族の職務の実態などについても考察を進めています。

③ 古代・中世の史料に関する研究

精緻な歴史研究のためには、論拠となる史料の価値の検討が必要不可欠です。私はこれまで、京都御所東山御文庫収蔵の六国史や法制史料、あるいは京都市陽明文庫の儀式書・故実書などの写本の調査に参加し、歴代の天皇家・公家が守り伝えてきた史料と接し、それらの価値を伝え、古代史研究に活かす方法を模索してきました。また、重要な宮廷行事の一つである除目に着目し、除目関係の儀式書の探求も進めています。公家の家に伝えられた作法（故実）ののっとり、複雑な儀式を正確に遂行することが彼らにとっての「政治」であり、朝廷のアイデンティティでもありました。そうして作り上げた古代の儀式体系は古代の天皇と貴族による政治体系のある種の到達点であり、そこに古代の朝廷の本質を垣間見ることができるのではないかと考えています。

上記の3つの研究視角はそれぞれ密接に関係するものであり、これらの研究活動を通じて、古代という時代を多角的に見ていきたいと思っています。

古代史は、高校までの教科書でもさほどページや時間を割かれることはなく、どこか私達とは「遠い世界の話」と思われがちな分野です。しかしながら、「日本」がいつから「日本」となり、どのような政治権力が誕生し、いかなる変遷を経て後世に受け継がれたか（あるいは何が受け継がれなかったのか）を知ることは、今後の日本社会の在り方を探る上でも、有効な課題であろうと考えています。

◆ 主な論文・著書

- 「除目と魚一ある除目故実から一」（『日本歴史』905、2023年）
- 「太政官政務儀礼の形成と展開」（『歴史学研究』1015、2021年）
- 「解説 無外題春除目」（明治大学除目書刊行委員会編『明治大学図書館所蔵 三条西家本 除目書』八木書店、2021年）
- 「宮廷儀礼と幢幡一儀仗制との関わりから一」（『条里制・古代都市研究』34、2019年）
- 『日本古代の王宮構造と政務・儀礼』（塙書房、2015年）

◆ 主な担当科目

日本古代史演習ⅠA、日本古代史演習ⅠB、史料教材研究Ⅱ

◆ メッセージ

歴史学は、過去の人間の営みを知ること、人間は何をなし得る存在かということを追及する学問であると考えています。千年前の過去が現代社会の役に立つのか？と言われれば返答に窮しますが、まずは史料の奥に隠された古代人の泣き笑いを読み取ることを、皆さんと一緒に楽しみたいと思います。

しらね やすひろ

白根 靖大 / SHIRANE Yasuhiro 教授



### 〉 専門分野

日本史

### 〉 研究キーワード

中世史、政治史、東北地域史、古文書、古記録、中世古系図

### 〉 最終学歴・学位・取得大学

東北大学大学院文学研究科博士後期課程修了、博士（文学）、東北大学

### 〉 問い合わせ先

[こちらのフォームよりお問い合わせください。](#)

### 〉 リンク

[研究者情報データベース](#)

## ◆ 研究内容の紹介

日本中世史について、政治史を中心に、複眼的な視点をもって研究を進めている。具体的には、公家政権（院政など）と武家政権（幕府など）の双方の立場から政治動向を追う、あるいは中央の視座と地方の視座を融合させて多角的に政治史を追究するなど、異なる切り口から明らかになる歴史像を総合的にとらえる研究視角を重視している。こうした視点は史料読解においても重要で、客観的な史実を解明するためには、特定の立場に偏らない解釈が求められる。そのために史料の基礎研究にも力を注いでおり、古文書や古記録のほか中世古系図にも目を向け、史実解明の下地を整える研究を行っている。

歴史的視点から社会や地域の理解を深めることは、私たちにとってアイデンティティの確認につながる。また、複眼的に歴史を見る視座は、異なる角度から物事を見る目を育み、何かに偏らないものの見方・考え方を養うことができる。同じ社会に生きる私たちがお互いに理解し支え合うために、歴史学は大きな役割を果たし得るものと考えている。

近年の研究は、古文書や古記録などを対象とした史料研究を中心に進めている。基礎的な史料研究の幅を広げ、その成果を積み重ね、史実を解明するための根拠となる史料をより充実させるのが目的である。さらには、勝者から語られがちな政治史、あるいは中央から描かれがちな歴史像を相対化し、多角的な知見を提示していくことを目指している。

## ◆ 主な論文・著書

- 『『台記』保延二年記写本に関する一考察—烏丸本・狩野本・広幡本・日野本の写本系統—』（『人文研紀要』第 106 号、2023 年 9 月）
- 『『台記』保延二年記の写本系統に関する一考察』（『人文研紀要』第 103 号、2022 年 9 月）
- 『『台記』保延二年記の基礎的考察—写本の比較検討を通して—』（『中央史学』第 43 号、2020 年 3 月）
- 「中条家文書所収「三浦和田氏具書案」の基礎的考察」（『歴史』第 128 輯、2017 年 4 月）
- 『中世の王朝社会と院政』（単著、吉川弘文館、2000 年 2 月）

## ◆ 主な担当科目

日本古代史演習ⅡA、日本政治史演習ⅠA、日本政治史演習ⅠB、史料教材研究Ⅱ、日本古代史特殊研究A、日本政治史特殊研究ⅠA、日本政治史特殊研究ⅠB

## ◆ メッセージ

学問的手法から得られた思考力は、物事を客観的かつ論理的に処理する能力を伸ばします。そして、社会の転換期を迎えている今こそ、過去から学ぶ歴史学の果たす役割が高まっていると考えています。



にしかわ こうへい

## 西川 広平 / NISHIKAWA Kohei 教授

〉 専門分野

日本中世史（開発、環境史、武家由緒論）

〉 研究キーワード

水資源、自然災害、山野の生業、荘園、村落、武士団、武田家、富士山

〉 最終学歴、学位、取得大学

博士（史学）（中央大学）

〉 問い合わせ先

knishi●tamacc.chuo-u.ac.jp

〉 リンク

[研究者情報データベース](#)

### ◆研究内容の紹介

現在、地球規模で気候の温暖化が進むとともに、地震・噴火・風水害等の自然災害が相次いで発生し、私たちの日常生活をはじめ、政治・経済・文化等に大きな影響を及ぼしています。現在の科学技術をもってしても、予測や制御が困難な自然災害に、私たちはどのように対応すべきか。この問いかけを踏まえた新たな社会のビジョンが求められています。

この一方、今日の日本列島の社会では、地方の過疎化が進む一方、都市部でも対人関係が希薄化し、人々の「孤立」が社会問題となっています。このため、家族・親族や仕事、地域の間で育まれてきたネットワークや、人々のアイデンティティのあり方について、改めて振り返る必要があるのではないのでしょうか。

こうした問題意識を踏まえて、自然環境と人々との関わりという視点、並びに人と人との関わりという視点から、現代に受け継がれている社会制度や文化等の原型が生まれたと考えられている日本中世史の研究に取り組んでいます。

このうち、自然環境と人々との関わり歴史については、15・16世紀における山野の開発や資源の利用にともなう自然環境の変化が、荘園や村落の結び付きや土地利用に及した影響を研究するとともに、水害や地震・噴火等の自然災害の記録・伝承が受け伝えられてきた過程を通して、自然災害に対する地域社会の認識のあり方を探っています。この結果、自然条件の影響を受けやすかった中世の開発では、時には既存の開発に対する犠牲の発生を許容しつつ、新たな開発が展開する場合もあったこと、また、資源の保全や災害からの復興に際しては、村落を中心とした地域社会が、主体的に当事者間の調整を行っていたことなどが明らかとなりました。

続いて、人と人との関わり歴史については、12世紀以降における中世武士団のネットワーク、並びに系図等に表わされた武家の由緒の成立過程を対象に研究しています。特に、甲斐国(山梨県)を拠点としつつ日本列島の各地に拡大を遂げた、武田家を始めとする「甲斐源氏」と呼ばれる武士団が、12世紀末のいわゆる「源平合戦」と呼ばれる治承・寿永の内乱期に、京都での活動を通して形成されたネットワークや源頼朝・義仲との連携を踏まえて、現在の東海地方周辺に進出し、事務能力に優れた京都出身の下級貴族を取り込んだ、「政権」を樹立したこと、そして、13世紀末の鎌倉幕府において御家人の家格や地位が確立し、固定化していく過程で「甲斐源氏」という呼称が成立し、一族の同族意識が再認識されたことなどが明らかとなりました。

以上のような研究成果の蓄積を通して、自然環境の保全やアイデンティティの模索など、現代社会が抱える諸課題に歴史文化の観点から向き合い、未来に向けた新たなビジョンや価値観を生み出すきっかけとなっていくことを、研究活動の目標としています。

### ◆主な論文・著書

- 『中近世の資源と災害』、吉川弘文館、2023年。
- 『武田一族の中世』、吉川弘文館、2023年。
- 『シリーズ・中世関東武士の研究 32 甲斐源氏一族』、戎光祥出版、2021年。
- 『甲斐源氏 武士団のネットワークと由緒』、戎光祥出版、2015年。
- 『中世後期の開発・環境と地域社会』、高志書院、2012年。

### ◆主な担当科目

インターンシップ(博物館実務研修)、日本中世史演習 I A、日本中世史演習 I B、史料教材研究 II インターンシップ(博物館実務研修)、日本中世史特殊研究 A、日本中世史特殊研究 B

### ◆メッセージ

一つ一つの史料を実証的に読み込み、納得するまで考察を深めていく研究者の基本とともに、問題意識を持ち研究に取り組む姿勢を大切にして授業を行いたいと思います。特に、地域の歴史文化の観点から現代社会の様々な課題に向き合い、研究の成果を社会に還元する、地域と結び付いた歴史学研究をめざす大学院生を歓迎します。一緒に学び、究めていきましょう。



みやま じゅんいち  
宮間 純一 / MIYAMA Junichi 教授

〉 専門分野

日本近代史、アーカイブズ学

〉 研究キーワード

明治維新、記憶、記録、天皇、旧藩、公文書管理、公葬

〉 最終学歴・学位・取得大学

博士（史学）（中央大学）

〉 問い合わせ先

mjunichi001e@g.chuo-u.ac.jp

〉 リンク

[研究者情報データベース](#)

[中央大学大学院新着ニュース](#)

◆ 研究内容の紹介

現在とくに関心がある研究テーマは以下の3点です。

①明治維新とよばれる歴史上の出来事がどのように社会に記憶されてきた／されているのかを研究しています。「歴史」は、自然に存在するものではなく、今を生きている人びとが過去を振り返ることで誕生する物語です。明治維新は、戦前から今に至るまで近代日本の出発点としてたびたび回顧されてきましたが、その語り方は語り手が生きる時代や人・組織によって異なります。無名だった坂本龍馬が人気者になったり、天皇の敵として死んだ近藤勇や土方歳三が英雄になったりします。そのような物語は偶然生まれる訳ではなく、「時代の子」として産み落とされたものです。敗戦後、明治維新は戦争に向かってしまった近代の始まりとして批判的に検証されますが、高度経済成長期に日本が豊かになるとポジティブに捉えられて明治維新を題材とした小説・ドラマなどが人気を博します。「歴史」は、唯一無二のものではなく、時とともに姿を変える今を映す鏡なのです。こうした考えのもと、明治維新像の分析を通じて、それを語る社会のあり方を考えています。

②近世の藩や大名が地域社会の近代化に及ぼした影響を検討しています。1871年7月の廃藩置県で制度としての藩は消滅しますが、その後も旧大名やその旧家臣団は旧領地と深い関係を保ち続けます。旧大名らは地域社会における教育・文化・産業などに莫大な資産を投下し、親睦会などを通じて旧藩士や旧領民との結びつきを維持・強化していきます。政治・行政機構としての藩は失われても、その結合までは解消されなかったのです。こうした旧藩を基盤とした社会的な結びつきは、地域社会の近代化を考える上で欠くことができない要素であることが、各地の事例研究から明らかにされつつあります。また、今日でも旧藩時代をアイデンティティとし、近世とのつながりを意識した地域づくり、観光振興策を打ち出している自治体も少なくありません。こうした研究分野は、いまだ事例研究の段階にとどまっているため、第一線で活躍している研究者とともに総合的な分析と理論の構築を試みています。

④歴史学と深い関係にあるアーカイブズ学にも関心があります。特に、近年話題となっている公文書管理の問題や、地域に伝わってきた歴史資料を地域社会の持続にどう役立てられるのかを考えています。関心のある方は、以下のページを御覧下さい。

Chuo Online <https://yab.yomiuri.co.jp/adv/chuo/research/20180510.html>

大学院新着ニュース <https://www.chuo-u.ac.jp/academics/graduateschool/news/2021/01/52663/>

◆ 主な論文・著書

- 『公文書管理法時代の自治体と文書管理』（編著、勉誠出版、2022年）
- 『歴史資源としての城・城下町』（編著、岩田書院、2021年）
- 「地域における明治維新の記憶と記録」（『日本史研究』679、2019年）
- 『天皇陵と近代—地域の中の大友皇子伝説—』（平凡社、2018年）
- 『戊辰内乱期の社会—佐幕と勤王のあいだ—』（思文閣出版、2015年）
- 『国葬の成立—明治国家と「功臣」の死—』（勉誠出版、2015年）

◆ 主な担当科目

インターンシップ（アーキビスト実務研修）、日本近代史演習ⅡA、日本近代史演習ⅡB、史料管理学研究、史料教材研究Ⅱ、アーカイブズ法制論、インターンシップ（アーキビスト実務研修）、日本近代史特殊研究A、日本近代史特殊研究B、史料学特殊研究

◆ メッセージ

千葉市の埋め立て地という歴史がない町で育った私が歴史学、特に日本の近代を研究してみようと思ったきっかけの一つは、太平洋戦争を兵士として経験した祖父の語りでした。歴史学は、人間の営みを検証する学問であるため、テーマは身近なところに潜んでいると思います。今私たちが抱えている課題を検討するために、過去と向き合ってみましょう。



やまざき けい  
山崎 圭 / YAMAZAKI Kei 教授

〉 専門分野

日本近世史

〉 研究キーワード

家・同族・村落、地主・豪農、地域社会、幕府領支配、水害、飢饉、災害

〉 最終学歴・学位・取得大学

博士（歴史学）（名古屋大学）

〉 問い合わせ先

ykei@tamacc.chuo-u.ac.jp

〉 リンク

[研究者情報データベース](#)

◆ 研究内容の紹介

私は日本近世史（江戸時代）の研究をしています。主には村落や地域社会を対象に、残された史料を調査して分析しています。日本の近世は識字率が上がり、残される史料の量が飛躍的に増大したため、今でもかつての村や町の旧家に多くの古文書が残されています。その内のごく一部は公的な機関（文書館や博物館等）に収蔵されたり、活字化して出版されたりもしていますが、手付かずのまま旧家の土蔵の奥で眠っているものも多数あります。それらを調査して掘り起こすのがこの研究の一番の醍醐味です。

日本近世の村落史・地域史の研究と一口に言っても、その分析方法は研究者によって様々で、私の場合は、特定地域（フィールド）を多面的に描くことに特にこだわっています。それは村（や地域）に生きる人にとっては政治だけでなく経済や文化その他のこともみな重要な関心事であって、それらは本来切り離して扱うことはできないもの、堅く結びついているものだと考えるからです。特定の村や地域に色々な角度から光を当てて多面的に実像を浮かび上がらせたいと思っています。

このような考えから信濃国の幕府領を主なフィールドとして、これまで①家・同族・組等、村落内部の社会関係のあり方が村政のあり方に与えた影響に関する研究、②代官が管轄する広域の村々の支配の仕組みと、それを支える様々な担い手たちのあり方に関する研究、③幕府内部の幕閣一勘定所一代官といった支配機構のあり方が幕府領支配に与えた影響に関する研究を進め、本を出しました（『近世幕領地域社会の研究』）。その後は、北信濃の地主山田庄左衛門家（②の担い手の一人であり、明治期までに長野県で最大規模の地主に成長する）やその周辺村々の史料調査を進め、④地主小作関係が展開する中で村が果たした小作人擁護の役割や、⑤地域内を流れる千曲川が度々起こした水害に人びとがどのように向き合ったか、具体的には村・地主・代官所役人・幕府等諸主体の利害関係や動き等を踏まえた、近世から近代にかけての治水のあり方に関する研究等を進めています。

特に⑤の水害の研究に際しては、地元の中野市教育委員会と共同で史料調査を進めました。そのきっかけは中野市が東日本大震災を機に地域の災害に関する歴史資料を収集・検討する作業を開始したことにあります。私や大学院のゼミ生たちもこの作業に加わりました。その後、2019年の台風により中野市対岸の長野市で千曲川の堤防が決壊し大きな被害が出たことで、千曲川水害の歴史に関する社会的関心が高まっている状況です。

このように特定地域に密着することで基礎構造を多面的に描き出しながら近世社会像を組み立てるとともに、現在その地域に生きる人びとの問題関心にもこたえていける研究を目指しています。

◆ 主な論文・著書

- 「近世の千曲川水害と地域社会・江戸幕府」、『西洋史研究』新輯 50 号、2021 年 12 月
- 「幕末千曲川の治水と地域社会」、『中央大学文学部紀要・史学』65 号、2020 年 3 月
- 「東信濃幕府領の天保飢饉」、『中央大学文学部紀要・史学』64 号、2019 年 3 月
- 『地域史研究の今日的課題』（共著、人文科学研究所編）中央大学出版部、2018 年 3 月
- 『新八王子市史通史編 3・4 近世（上）（下）』（共著）八王子市、2017 年 3 月

◆ 主な担当科目

史料教材研究Ⅱ、日本近世史演習ⅠA、日本近世史演習ⅠB、日本近世史特殊研究A、日本近世史特殊研究B

◆ メッセージ

日本近世史の大学院ゼミには、村落史・地域史だけでなく、様々な分野の研究を進める院生に集まってほしいです。いろいろなテーマの研究をそれぞれ持ち寄ることで、ゼミ全体で日本の近世はどういう時代かについて考えていくことができればうれしいです。ゼミでは、他大学の近世史ゼミと合同で研究会を催したり、夏・春休み等に史料調査合宿をしたりなど通常の授業以外の企画もあります。楽しみながら学んでいきましょう。





あ べ ゆきのぶ  
阿部 幸信 / ABE Yukinobu 教授

〉 専門分野

戦国期～宋代の天下秩序・政治思想・官僚制度・車服制度/門闕・神道の装飾物からみた左右空間配置とその世界的伝播・展開/歴史理論・歴史哲学/孫呉西晋簡からみた江南の社会と経済

〉 研究キーワード

中国史、天下、印綬、車服、礼制、左右観、獅子像、長沙呉簡、調布

〉 最終学歴・学位・取得大学

東京大学大学院人文社会系研究科博士課程修了 博士（文学）（東京大学）

〉 問い合わせ先

yukiabe●tamacc.chuo-u.ac.jp

〉 リンク

[研究者情報データベース](#)

◆ 研究内容の紹介

「専門分野」として挙げている内容は多岐に亙りますが、関心の中心は「世の中の秩序のかたちと、その背景となっているもの」にあります。そうした問題関心と具体的な研究内容の関係を整理して述べると、以下のようになります。

1) 中国の天下秩序と官僚制度

戦国時代に官僚制が出現して以降、中国では、都やそれに近い地域は官僚制によって治められ、その外延に広がる地域は封建制によって支配を受けるといふ、重層的な世界観が定着していきました。両者はあらゆる面において「区別」されていましたが、官僚も封建領主も君主の臣下として位を授かる以上、その身分・立場の高下は、同じ位階制度の中において相互に比較可能なように定められていました。この点に注目し、位階制度やそれを可視的に示す車服(乗り物・衣服・アクセサリー)の制度を手がかりとしながら、国家を構成する多様な人々がどのようにして/どのような論理の下で統合されていたのかを研究しています。位階制度・車服制度は時代によっても大きく異なり、それを支える思想についても時代ごとに変化しましたので、一時期のことだけをみても、歴史的な特質は理解できません。よって、戦国時代から唐宋期まで研究対象を幅広く設定し、その中での制度・思想の推移を検討することで、国家構造・天下秩序全体の長期的な動きをみるという研究方法をとっています。

こうした問題について考えることで、中国ひいては東アジアの人々の世界観や、その根底にある価値観について明らかにすることができます。また、上述した「世界観」「価値観」は、現代日本社会にも極めて強い影響を及ぼしていますから、現在の日本について理解するうえで有益な示唆を得ることもできます。もちろん、現代中国を理解するためにも、こうした作業は必要不可欠です。

2) 門闕動物像からみた空間配置

世界各地の公的施設や宗教施設などの前に左右一対で置かれた装飾物、とくに動物像(狛犬、獅子像など)を手がかりに、「左右」に代表される二元的な世界観が現実世界にどのように反映されていたかを探っています。その「反映」の方法は一通りではありませんが、各地の様式の間には一定の相関関係があるようです。そうした「相関関係」とおして、二元的な世界観の伝播や展開の過程を追うことができないか、模索している最中です。文化や制度の違いを越えた人類の交流や、その結果として生みだされた共通意識について論ずることで、「中国ひいては東アジアの人々の世界観や、その根底にある価値観」を相対化することが、この研究の究極の目的です。

3) その他

簡牘資料をおして江南社会の地域性や 3 世紀という時代の特徴を検討することで、「中国」やその歴史の中にある多様性について考えています。また、研究の基礎・前提となる問題意識・方法論の立て方じたいについても、研究の対象としています。

◆ 主な論文・著書

- 『漢代の天下秩序と国家構造』(単著)研文出版、2022 年 11 月
- 「漢代における即位儀礼・郊祀親祭と「天子之璽」」、『歴史学研究』第 1022 号、2022 年 5 月
- 「南朝陵墓神門石獸の陰陽表現をめぐって」、『中央大学文学部紀要』[史学]第 67 号、2022 年 3 月
- 『中国史で読み解く故事成語』(単著)山川出版社、2021 年 4 月
- 「長沙呉簡にみえる「市布」について」、『中央大学文学部紀要』[史学]第 64 号、2019 年 3 月

◆ 主な担当科目

史料教材研究Ⅰ、中国古代史演習A、中国古代史演習B、中国古代史特講A、中国古代史特講B、中国古代史特殊研究A、中国古代史特殊研究B

◆ メッセージ

学生には、以下の 3 点を徹底するようお願いしています。

- 他人の受け売りではなく、史料に直接あたって考えること。
- 現代人の目線からではなく、当時の、現地の人々の目線で考えること。
- 歴史的な事象そのものだけでなく、その事象が「いかなる歴史的条件下でそのようになったか」、「現在にどのように影響しているか」を考えること。

きむら たく  
木村 拓 / KIMURA Taku 教授



〉 専門分野

近世朝鮮の外交史、政治思想史

〉 研究キーワード

朝鮮王朝、外交史、外交文書、ハンコ、中華思想、韓国、朝鮮

〉 最終学歴・学位・取得大学

博士（文学）（東京大学）

〉 問い合わせ先

tkimura769●g.chuo-u.ac.jp

〉 リンク

[研究者情報データベース](#)

◆ 研究内容の紹介

朝鮮時代(1392-1897)、特に 14 世紀末～17 世紀前半の朝鮮王朝の外交史について研究しています。14 世紀末～17 世紀前半は、中国では明代、日本では室町時代中期から江戸時代初期に当たります。当該期は、朝鮮半島への倭寇の侵攻も続いており、また、17 世紀前半には、朝鮮半島北方の女真人の勢力が台頭してきて、ついに明清交替が起こります。朝鮮にとっては外交の難しいかじ取りが常に要求される時代でした。そうしたなかで、朝鮮が外国勢力に対してどのような外交を展開したのかを研究してきました。とりわけ、朝鮮が明との間の冊封関係(君臣関係)を維持しながら、日本・琉球や女真勢力に如何に対応したのかという問題を軸にして研究してきました。なぜならば、「中国」(あるいは「中華」)である明は、ときに「父母の国」とも形容されたように、当時の朝鮮にとって最重要国であり、しがたって朝鮮の外交には、明との冊封関係に配慮しつつ行われた側面があり、そうした側面に照明を当てることで、東アジアにおける朝鮮の国際的立場・位相が見えてくると考えられたからです。

具体的な研究方法としては、例えば、朝鮮が外交で使用した印鑑に注目しました。というのも、朝鮮は日本や琉球との外交において、官印ではなく、「図書」と称される私印形式の印(ハンコ)を用いたからです。例えば、朝鮮が日本・琉球に送った外交文書に捺印された印は図書でした。つまり、朝鮮は外交文書という公的文書に私印形式の図書を用いたわけです。この点は私にはとても不可解なことに思えました。そこで私は、なぜ朝鮮が外交文書に私印形式の図書を用いたのかを考えました。その結果、朝鮮の外交文書に図書が用いられたのは、朝鮮が明の「侯国」(明から冊封された諸侯国)としての立場を重視していたことと関係していたことが分かってきました。すなわち、明の「侯国」としての立場に立つと、日本や琉球との外交が「私交」(明の許可なく勝手に外交すること)として不当なものになりかねなかったため、朝鮮があえて外交文書に私印形式の印を用いたということが見えてきました。「私交」問題(「侯国」の外交が「私交」として宗主国の問罪の対象になり得るという問題)が朝鮮の外交をどこまで規定していたのかという問題は、現在も私の大きな研究テーマとなっています。

また、朝鮮の外交と密接に関連してくる、朝鮮の政治思想についても、研究を行ってきました。1637 年、朝鮮は満洲族の王朝である清との間に冊封関係を結び、1644 年には明が滅亡しますが、その後においても、朝鮮の崇明思想(明を崇拝する思想)はなくならないどころか、強まっていきました。そうしたなか、朝鮮は明遺民(朝鮮居住の明人の子孫)に対する優遇政策を行います。私はそのことに注目して、朝鮮の明遺民に対する優遇政策が、朝鮮の王権強化と密接な関係があることを指摘しました。

◆ 主な論文・著書

- 「朝鮮初期における室町幕府への遣使の目的」『朝鮮学報』、255、2020 年
- 『朝鮮王朝の侯国的立場と外交』、汲古書院、2021 年
- 「朝鮮王朝の二つの対馬認識—15 世紀後半を中心として—」『日韓の交流と共生—多様性の過去・現在・未来—』(九州大学韓国研究センター叢書 第 5 巻)(森平雅彦他編)、九州大学出版会、2022 年
- 「豊臣秀吉の侵攻予告に対する朝鮮の対応—通信使派遣の明への秘匿—」『壬辰戦争と東アジア—秀吉の対外侵攻の衝撃—』(川西裕也・中尾道子・木村拓編)、東京大学出版会、2023 年

◆ 主な担当科目

史料教材研究 I、中国近世史特講A、中国近世史特講B、中国近世史演習A、中国近世史演習B、東洋史学特殊研究(朝鮮史)A、東洋史学特殊研究(朝鮮史)B

◆ メッセージ

歴史学という学問は、史料に基づいて、自分の解釈や主張を組み立てていく学問です。もちろんそれは、なかなか簡単なことではなく、苦労はつきものです。しかし史料と格闘しながら、自分なりの結論にたどり着いたときは、その苦労以上の喜びが待っていることでしょう。周りにも意見を求めながら、様々な角度から検討し、諦めることなく、ねばり強く研究することが肝心です。


 しんめん やすし  
 新免 康 / SHINMEN Yasushi 教授

## &gt; 専門分野

中央ユーラシア史

## &gt; 研究キーワード

中央ユーラシア、オアシス地域、近現代

## &gt; 最終学歴・学位・取得大学

東京大学大学院人文科学研究科博士課程単位修得退学

## &gt; 問い合わせ先

y.shinmen@gmail.com

## &gt; リンク

[研究者情報データベース](#)

## ◆研究内容の紹介

新免は、中央ユーラシアの歴史・文化について、とくに近現代の歴史的状況と諸民族の社会・文化に関心をもって研究しています。

具体的には、19～20 世紀における中央ユーラシア中央部(中国新疆、中央アジア)のオアシス地域の歴史的変容について、主要な住民である諸民族の動向を軸に、さまざまな側面からアプローチしてきたほか、当該地域における宗教文化、とくにイスラーム聖者墓廟参詣の実態と特徴について、現地での実地調査を踏まえて考察しました。また、近年では、近現代の中央ユーラシアをまたぐ広域的な移動・交流と地域の状況変化に注目して、タタール人のディアスポラと中央ユーラシアの社会・文化変容についてプロジェクトを組み、研究を進めているほか、ウイグル文化への視点として、民間歌謡や基層文化、知識人の思索などについても関心をもって調べています。

利用してきた史料としては、現代より前の時代に広域的に使用されたテュルク系言語であるいわゆるチャガタイ語、また、20 世紀以降に使用されるようになった各民族語の史料を軸に据え、中国語・ロシア語などの史料も交えつつ、さまざまな歴史的事象について検討を加えてきました。中央ユーラシア在住の諸民族により、彼ら自身の言語で記された史料は、当該地域の歴史について検討する上での基本的な材料であり、大学院の授業でもその点を重視しています。

近年の中央ユーラシアは、旧ソ連領の独立諸国家がその発展に応じてユーラシアにおけるプレゼンスを高めていることや、中国の「一帯一路」構想の主要な対象地域となっていることなど、現代世界における注目度が高まっています。現代の当該地域にまつわる諸問題を見ていく上でも、そこに居住する諸民族の歴史・文化の実相についてたしかな知識を取得し、理解を深めていくことが必要になります。

## ◆主な論文・著書

- 「シルクロードにおけるマザール参詣の諸相」『日中社会学研究』第 25 号, 2017 年.
- “The Historical Development of Ürümchi: Focusing on Nanliang District from the Late-19th to Mid-20th Centuries,” Onuma Takahiro, David Brophy and Shinmen Yasushi, eds., *Xinjiang in the Context of Central Eurasian Transformations*, Tokyo: The Toyo Bunko, 2018.
- 「中国新疆における歴史書『東方五史』の「アルティ・シャフル」章について」『中央大学アジア史研究』第 42 号, 2018 年.
- 「ウルムチの歴史的変容と「洋行街」」妹尾達彦編『アフロ・ユーラシアにおける都市と社会』中央大学出版部, 2020 年.
- 「中国新疆のイリ地域におけるウイグル族の「歴史歌謡」について」新免康編『ユーラシアにおける移動・交流と社会・文化変容』中央大学出版部, 2021 年.

## ◆主な担当科目

史料教材研究 I、中央ユーラシア史特講A、中央ユーラシア史特講B、中央ユーラシア史演習A、中央ユーラシア史演習B、中央ユーラシア史特殊研究A、中央ユーラシア史特殊研究B

## ◆メッセージ

私がいまの仕事をしていて良かったと思うことの一つは、色々な国々の、色々な民族の人々と触れあい、いっしょに仕事ができなことです。皆さんも、学生としての生活や就職後の仕事の中で、世界のさまざまな民族の人々と知り合うことでしょう。その際、背景にある歴史や文化に関する勉強が、きっと役に立つはずですよ。

すずき えみ  
鈴木 恵美 / SUZUKI Emi 教授



〉 専門分野

近現代エジプト政治史

〉 研究キーワード

エジプト、中東、名望家、議会、ナショナリズム、革命

〉 最終学歴・学位・取得大学

博士（学術）、東京大学

〉 問い合わせ先

[こちらのフォームよりお問い合わせください。](#)

〉 リンク

[研究者情報データベース](#)

◆ 研究内容の紹介

近現代エジプトの政治史を専門にしています。テーマは、近現代エジプトにおける伝統的な有力家族、名望家の政治的、社会的役割の考察です。エジプトの議会では、日本でいう世襲議員のように、一族で議席を占有し続けている名望家があり、現地では「議会家族」と呼ばれています。しかし、「議会家族」という言葉はあるものの、それが一体誰なのか、どのような人々なのかこれまで研究されてきませんでした。私は、この議会家族とはどのような人々で、近代以降の変化の激しい時代のなかで、どのような役割を果たしてきたのか研究しています。

最初に取り組んだのが、「議会家族」の特定です。考察の結果、「議会家族」のルーツが実に多様であることが分かりました。マムルークに起源をもつ家族もあれば、19世紀に新たに台頭した家族もあります。また、ウラマーとよばれるイスラーム宗教指導者を代々輩出してきた家族もあります。このように、家族の背景は様々ですが、19世紀になりエジプトが世界経済に組み込まれると、ほぼ全ての「議会家族」が莫大な富を蓄え、大地主や中規模地主となり、その影響力を背景に議会で議席を占有するようになりました。さらに研究を進めると、「議会家族」が婚姻などを通して独自のネットワークを駆使し、数々の政治弾圧を生き延びる、したたかな存在であることも明らかとなってきました。

最近では、これまでの研究をさらに発展させるかたちで、数世紀前にエジプトに移動してきたアラブ部族にルーツをもつ「議会家族」に焦点を当てています。今読み込んでいるのは、近代エジプトの独立運動に寄与した、エジプト中部のとある「議会家族」の蔵に眠っていた私文書です。この家族は、アラブ部族に起源をもつ他の有力家系と同様に、国境という境界線を越えるアラブ・アイデンティティーを強くもつ家族です。このようなアイデンティティーをもつこの家族が、どのようにして国境で領域が規定された近代国家の構築に携わったのか、入手した史料から精査しています。現段階で、大地主でもある彼らが、西欧など列強諸国と共有する経済的な利害と、強まるナショナリズムとの間で葛藤する姿が浮かび上がってきました。これからどのような史実が明らかになるのか期待を膨らませています。

◆ 主な論文・著書

- 「エジプトのリビア介入の諸要因：グローバルな危機の拡大とその影響」『「境界」に現れる危機』（松永泰行編）岩波書店、2021年
- 「現代エジプト 憲法における宗教条項」『イスラームは特殊か』（柴田大輔、中町信孝編）勁草書房、2018年
- 『「アラブの春」後のエジプトにおける混乱と平和構築：チュニジアとの比較から』『人間の安全保障と平和構築』（東大作編）日本評論社、2017年
- 「数千年の歴史が溶け込む エジプト」『世界の名前』岩波新書1598、2016年

◆ 主な担当科目

史料教材研究Ⅰ、イスラーム史特講A、イスラーム史特講B、イスラーム史演習A、イスラーム史演習B、イスラーム史特殊研究A、イスラーム史特殊研究B

◆ メッセージ

歴史は役に立たない、暗記するだけと思いませんか。歴史は、先人たちが残した貴重な足跡です。現代は歴史の延長上であり、歴史を知れば変化が激しく先が見通せない現代社会の行く先が見えてきます。また、歴史を学べば、これからの人生が豊かになります。世界を旅しても、目の前の風景に重なるように、古の人々の暮らしが立体的に有機的に見えてくるでしょう。さあ、皆さんも、壮大な学問である歴史学の扉を開いてみませんか。



たかはし ひろあき  
高橋 宏明 / TAKAHASHI Hiroaki 教授

〉 専門分野

東南アジア近現代史、カンボジア地域研究

〉 研究キーワード

カンボジア、フランス統治時代、官僚制、ポル・ポト政権、内戦と社会復興

〉 最終学歴・学位・取得大学

博士（史学）（中央大学）

〉 問い合わせ先

kskoumei●tamacc.chuo-u.ac.jp

〉 リンク

[研究者情報データベース](#)

◆ 研究内容の紹介

私の研究テーマは大きく二つに分かれています。

第一は、フランス統治期のカンボジア王国における政治社会体制の解明です。具体的には、19世紀以降のカンボジア保護王国における政治社会体制の実態を、中央政府の形成過程、官僚組織の変遷、人事制度の特質、地方社会の変化などの観点から研究しています。主に、カンボジアのプノンペン国立公文書館に所蔵されているフランス理事長官府の報告書、人事ファイル、官報などの文書類の読解・分析を通じて研究を進めてきました。

1863年から1953年までの90年間、カンボジア王国はフランスの保護国として統治されました。90年間にわたるフランス支配の歴史的な経験は、いったい何を意味するのでしょうか。近代カンボジアの政治社会の仕組み、法体系、教育制度などは、フランス統治期に形成されました。そして、独立以降のカンボジアの政治社会体制も、フランス統治期に作られた政治的社会的な枠組みを基本的に踏襲して現在に至っていると言えます。したがって、現代カンボジアの諸問題を考察する際は、フランス支配期に確立された政治社会体制の実態を明らかにする必要があると考えられます。こうした理由から、フランス統治期の研究を進めてきました。

第二は、1953年以降、特に1975年のポル・ポト時代からヘン・サムリン政権にかけての社会変化の実態を明らかにすることです。現代カンボジアの社会復興の経緯を、政治経済体制の変遷、内戦下の社会教育問題、文化復興などの観点から、フィールドワークも行いつつ研究してきました。

1970年～1991年にかけてカンボジアは二度の内戦を経験しました。その間、クメール・ルージュによる住民大虐殺（ジェノサイド）、ベトナム軍の侵攻・駐留、難民の発生など、激動の時代が続き、多くの人びとの命が失われ、政治社会制度やインフラストラクチャーが破壊されました。国連平和維持活動（PKO）による国政選挙の実施を経て、1993年に新生「カンボジア王国」が誕生し、約20年ぶりに平和を取り戻しましたが、「失われた20年」の検証は現在も進行中だと言えます。20年の間に「破壊」された諸制度がどのように「復興」されてきたのか、混迷の時代を人々はいかに生きてきたのか、を明らかにしたいと思い、現代カンボジアの社会復興の個別の問題について研究を進めています。

◆ 主な論文・著書

- 「カンボジアのクメール・ルージュ裁判」阿曾村邦昭編著『カンボジアの近代化』文真堂、2023年3月
- 「シハヌーク国王とカンボジアの近代化」阿曾村邦昭編著『カンボジアの近代化』文真堂、2023年3月
- 「内戦と文化政策」新免康編著『ユーラシアにおける移動・交流と社会・文化変容』中央大学出版会、2021年3月
- 「インドシナ半島の近現代」アルボムツレ・スマナサーラ編著『ブッダの聖地 2』株式会社サンガ、2020年6月

◆ 主な担当科目

史料教材研究Ⅰ、東南アジア史特講A、東南アジア史特講B、東南アジア史演習A、東南アジア史演習B、東南アジア史特殊研究A、東南アジア史特殊研究B

◆ メッセージ

1990年、内戦下のカンボジアで大学教員としてのキャリアを開始しました。当時、首都プノンペン市内は戒厳令が敷かれ、再開されたばかりの大学内には張り詰めた空気が漂い、緊張の毎日でした。ですが、そこは「学ぶ喜び」に溢れていました。この時の気持ちを忘れずに、研究と教育に向き合い、学生と共に学び続けたいと思っています。



いしばし ゆうと  
石橋 悠人 / ISHIBASHI Yuto 教授

〉 専門分野

西洋史学、科学史

〉 研究キーワード

グリニッジ天文台、標準時、経度、地図、イギリス帝国、ヴィクトリア朝、時間、空間

〉 最終学歴・学位・取得大学

一橋大学大学院社会学研究科歴史社会研究専攻・博士（社会学）

〉 問い合わせ先

ishibashi@tamacc.chuo-u.ac.jp

〉 リンク

[研究者情報データベース](#)

[個人ウェブサイト](#)

◆ 研究内容の紹介

・19世紀イギリス社会における時間に関する制度・認識・技術の変化を、経済・軍事・帝国・交通・情報通信・文明意識などの複数の文脈で考察しています。とくにグリニッジ標準時の浸透に焦点をあて、正確度の高い時報インフラが国内各地に確立していく過程を検討しています。

・最近では、イギリス帝国の白人定住植民地やインドにおける時間通知技術の改良と入植者によるヨーロッパ的な時間観念の共有と伝播、さらにグリニッジ世界標準時の確立にいたる経緯を研究しています。また、時間に関する制度、標準時の導入、時計などの技術革新の実態、国民統合・帝国主義と時間意識などの主題について、共同的な比較史・関係史の可能性を模索中です。

・科学研究の制度的基盤について、イギリス海軍の科学研究部門の設置とその活動を分析しています。海軍はグリニッジ天文台や世界各地の海図作成を担う水路測量局をはじめ、天文学、潮汐・地磁気・気象観測、造船技術、航海術研究などの領域横断的な研究体制を構築し、ヴィクトリア時代に巨大な「科学センター」として機能していました。

・2010年に出版した単著では、正確度の高い経度測定技法とイギリス帝国の拡張の関係を検討しました。この主題に関連して地図史学にも関心を持ってきましたが、最近ではイギリス海軍が世界規模で実施した海図の作成・出版・流通を対象とする研究を行っています。とくに東アジア海域に到来したイギリスの測量船をめぐる日英の対立と協働や海図作成技術・知識の移転を検討中です。

・研究指導・大学院の授業について

近世から現代までのイギリス史全般と科学技術史のテーマについて、研究指導を担当することができます。大学院では、最近出版されたイギリス史、西洋史関連の和文・英文の研究文献の輪読や各院生の研究発表を中心とした授業を行っています。

◆ 主な論文・著書

- 「海軍の科学研究体制：時間と空間の科学」大野誠編『近代イギリス科学の社会史』昭和堂、2021年
- 「時計時間の移植と管理—イギリス帝国の植民地天文台と時報技術」竹内真人編著『ブリティッシュ・ワールド—帝国紐帯の諸相』日本経済評論社、2019年
- 『経度の発見と大英帝国』三重大学出版会、2010年
- “Constructing the ‘Automatic’ Greenwich Time System: George Biddell Airy and the Telegraphic Distribution of Time, c. 1852–1880.” *British Journal for the History of Science* 53(1) 25 – 46, 2020
- “In Pursuit of Accurate Timekeeping: Liverpool and Victorian Electrical Horology.” *Annals of Science* 71(4) 474 – 496, 2014

◆ 主な担当科目

史料教材研究 I、西洋近代史演習 I A、西洋近代史演習 I B、西洋近代史演習 II A、西洋近代史演習 II B、西洋史基礎演習 I A、西洋史基礎演習 I B、西洋史基礎演習 II A、西洋史基礎演習 II B、西洋近代史特殊研究A、西洋近代史特殊研究B

◆ メッセージ

院進学や授業の履修に関心がある方はメールにてご連絡ください。個別の相談も受け付けています。



からはし ふみ  
唐橋 文 / KARAHASHI Fumi 教授

〉 専門分野

古代オリエント学

〉 研究キーワード

シュメール語、アッカド語、神話、行政経済文書、文法

〉 最終学歴・学位・取得大学

Ph.D. (シカゴ大学)

〉 問い合わせ先

fumik●tamacc.chuo-u.ac.jp

〉 リンク

[研究者情報データベース](#)

[Chuo Online](#)

◆ 研究内容の紹介

みなさんが、高校の世界史の教科書を開いたときに最初に目にするのが、古代オリエントを扱う章かと思います。古代メソポタミアの文明が栄えたのは遠い昔ですが、私たちがその文明に負うところは少なくありません。六十進法や太陰太陽暦、そして何よりも文字を用いて記録するという行為の起源がそこにあります。私は、古代オリエントの歴史や文化を、紀元前3千年紀後半から2千年紀前半頃に記された楔形文字文書を用いて研究しています。特に、シュメール語文法、文学テキスト、シュメールの女性史の三つのフィールドに焦点をあてています。

シュメール語文法はまだよくわからない部分が多く、「シュメール語文法学者の数ほどシュメール語文法はある」と言われるほど、様々な解釈が提案されてきました。しかし、それ故に研究テーマとして非常に魅力的だと言えるでしょう。私は、博士論文でシュメール語文法の動詞、その中でも複合動詞と呼ばれる特殊なタイプの動詞を扱いました。まず、それらの動詞を含む文章を文学作品の中から抽出して膨大なカタログを作成しました。そして、それらの文章を分析してそれぞれの動詞の意味を割り出し、さらに、言語横断的な言語学的手法を借りて、文章構文のパターンを明らかにしました。博論提出後、シュメール語文法の関連では、自動詞・他動詞・使役動詞の構文、直接話法と間接話法、関係節、日本語の「～のだ」に相当するシュメール語構文などの分析を行ってきました。

古代オリエントの神話や伝説の解釈・分析・比較もとても興味深いテーマです。英雄ビルガメス(シュメール語)/ギルガメシュ(アッカド語)の物語にしても、女神イナンナ(シュメール語)/イシュタル(アッカド語)の物語にしても、シュメール語文学とアッカド語文学は、文化的・歴史的経緯から、複雑に絡まりあっていて、どちらか一方で足りる事はなく、必然的に両者を扱うこととなります。そして、これらオリエントの文学に、イナンナ/イシュタル女神のギリシア版とも言えるアプロディテを加えると、視界が一気に広がります。つまり、極めて面白いオリエントとオクシデントの東西文化交流という研究領域が待ち受けているわけです。

行政経済文書は、王宮や神殿など、公の財の出納管理を目的とした日々の記録です(もちろん、月毎、年毎、あるいは数年分をまとめた記録もあります)。紀元前3千年紀末のウル第三王朝時代だけでおよそ12万点のシュメール語行政経済文書が現存すると見積もられていますが、私の研究対象は、それよりも200年ほど早い、ラガシュ第一王朝時代の文書約1800点です。それらの文書は、代々の王妃が所有管理する「妃の家」と呼ばれる組織の出納記録で、当時の、特に王妃をはじめとする女性たちの仕事や地位や役割に関連するラガシュ社会の仕組みを読み解く鍵になっています。

古代の文書を読みながら私が何をしているのかというと、結局のところ、一人人間は何なのか、どのようにして今に至っているのか、というようなことを考えているのだと思います。

◆ 主な論文・著書

- "Royal Nurses and Midwives in Presargonic Lagaš Texts," in L. Feliu, F. Karahashi, and G. Rubio, eds., *The First Ninety Years: A Sumerian Celebration in Honor of Miguel Civil*. SANER 12. Boston and Berlin: De Gruyter, 2017, pp. 157–171.
- "Female Servants of Royal Household (ar3-tu munus) in the Presargonic Lagash Corpus," in A. Garcia-Ventura, ed., *What's in a Name?: Terminology Related to the Work Force and Job Categories in the Ancient Near East*. *Alter Orient und Altes Testament* 440. Münster: Ugarit Verlag, 2018, pp. 133–146.
- "Myths and Iconography of Goddess Inana/Ishtar: Intertextual Allusion, in "Sentido de un empeño": Homenatge a Gregorio del Olmo Lete," Lluís Feliu, Adelina Millet, Jordi Vidal, eds., *Barcino. Monographica orientalia* 16. Barcelona: Edicions Universitat de Barcelona, 2021, pp. 249–261.
- *Women and Religion in the Ancient Near East and Asia*. SANER 30. Boston and Berlin: De Gruyter, 2023 (Nicole Brischとの共編).
- 「シュメール初期王朝時代ラガシュ(ギルス)出土のエ・ミ文書における供物奉獻の祭儀」妹尾達彦編著『アフロ・ユーラシア大陸の都市と社会』中央大学人文科学研究科研究叢書 74, 中央大学出版部, 2020年, 511–542頁.

◆ 主な担当科目

史料教材研究 I、西洋古代史演習 I A、西洋古代史演習 I B、西洋古代史演習 II A、西洋古代史演習 II B、西洋古代史特殊研究 A、西洋古代史特殊研究 B



すぎざき たいいちろう  
杉崎 泰一郎 / SUGIZAKI Taiichiro 教授

〉 専門分野

西洋中世史

〉 研究キーワード

教会史

〉 最終学歴・学位・取得大学

博士（史学）（上智大学）

〉 問い合わせ先

sugizaki●tamacc.chuo-u.ac.jp

〉 リンク

[研究者情報データベース](#)

◆ 研究内容の紹介

11, 12 世紀のフランスの教会の史料を中心に読みながら、教会と社会や文化の関係を研究しています。国政のレベルでは、ヨーロッパの王はなぜ教会で聖職者から戴冠されるのか。経済のレベルでは、貧しく生きるはずの教会がなぜ豊かになって広大な領地を持ったのか。文化のレベルではなぜ偶像を禁止したキリスト教で造形芸術が盛んになって、そこで聖歌が楽器を伴って発達し西洋音楽の礎になったのか。民衆信心のレベルでは、疫病や災害の流行時にどのように教会は人々の心身をいやしたのか。いろいろな問いをたたえています。それらの問いに答えることで現代のヨーロッパの社会や文化を理解するうえで、基本的な理解を与えてくれると思います。

◆ 主な論文・著書

● 『沈黙すればするほど人は豊かになるーラ・グランド・シャルトルーズ修道院の奇跡』幻冬舎、2016 年。

◆ 主な担当科目

史料教材研究 I、西洋中世史演習 I A、西洋中世史演習 I B、西洋中世史演習 II A、西洋中世史演習 II B、西洋中世史特殊研究 A、西洋中世史特殊研究 B





すずき ただし  
鈴木 直志 / SUZUKI Tadashi 教授

〉 専門分野

ドイツ近世史、広義の軍事史

〉 研究キーワード

ドイツ、軍事史、戦争、啓蒙、革命と改革

〉 最終学歴・学位・取得大学

博士（史学）（中央大学）

〉 問い合わせ先

[こちらのフォームよりお問い合わせください。](#)

〉 リンク

[研究者情報データベース](#)

◆ 研究内容の紹介

18 世紀のプロイセンを中心に、「広義の軍事史」の観点からドイツ近世史を研究しています。広義の軍事史とは、軍隊や戦争といった事象を国家や社会との関連から問う研究で、例えば、戦闘員の家族の社会的状況であるとか、ある時代の戦争や平和のイメージなどを考察します。それを通じて研究対象の時代の特徴を明らかにしていきます。

◆ 主な論文・著書

- 『ヨーロッパの傭兵』、山川出版社、2003 年。
- 『広義の軍事史と近世ドイツ—集権的アリストクラシー・近代転換期』、彩流社、2014 年。
- 「近世プロイセンの軍事条章」『法と文化の制度史』1 号、2022 年。
- 「近世プロイセン軍における諸侯連隊」松本悠子・三浦麻美編『歴史の中の個と共同体』中央大学出版部、2022 年。
- 「連隊簿からみた近世プロイセン軍隊社会」『中央大学文学部紀要』(史学)(上)62 号、2017 年、(下)64 号、2019 年。

◆ 主な担当科目

史料教材研究 I、西洋近世史演習 I A、西洋近世史演習 I B、西洋近世史演習 II A、西洋近世史演習 II B、西洋近世史特殊研究 A、西洋近世史特殊研究 B

◆ メッセージ

大学院の授業では、論文作成のために必要な知識を深め、技術を磨くことに重心を置きます。具体的には、文献を正確に読むための語学力、読解力を養うとともに、資料の収集と分析、報告、論評といった学術の基礎訓練に励みます。



ほりうち たかゆき

堀内 隆行 / HORIUCHI Takayuki 教授

〉 専門分野

西洋現代史

〉 研究キーワード

南アフリカ史

〉 最終学歴・学位・取得大学

博士（文学）・京都大学

〉 問い合わせ先

hrchtkyk●hotmail.com

〉 リンク

[研究者情報データベース](#)

◆ 研究内容の紹介

南アフリカは 19 世紀初頭以来、長くイギリス領だった。この時期のイギリス帝国は、ヨーロッパ系が多数派を占めるカナダ、オーストラリア、ニュージーランドなど白人定住植民地／自治領と、非ヨーロッパ系が多数派のインドなど従属植民地に分けられることが多い。その中で、アフリカ人が 7、8 割ながら白人も 1、2 割の人口を有する南アフリカは、両者の中間として特殊な地位を占めてきた。

『異郷のイギリス—南アフリカのブリティッシュ・アイデンティティー』では、こうした南アフリカにおけるイギリスの意味を探った。具体的には、第 1 部で 19～20 世紀初頭、南アフリカという異郷に赴いたイギリス人がどのような世界を建設しようとしたのかを検討した。次いで、第 2 部では 1920 年代以降にも視野を拡大し、イギリス系南アフリカ人がどのような自他認識に至ったのか、軌跡をたどった。また第 3 部では、カラード（今日の南アフリカではケープタウン周辺の先住民、解放奴隷、「混血」の人々）を素材に「親英」の内実も探った。

しかしながら『異郷のイギリス』では、人口の 7、8 割を占めるアフリカ人の問題を十分に扱えなかった。その隙間を埋めるのが『ネルソン・マンデラ—分断を超える現実主義者（リアリスト）—』である。同書では、「イギリスやその文化がわれわれに及ぼした影響」を称賛して見せるマンデラの姿を描くことで、前著に通じる問題を扱った。だが他方で、マンデラと共産主義や非暴力主義などとの関係を論じることによって、新たなテーマにも踏み出した。

以上 2 冊の単著と並行して、2017 年にはキース・ブレッケンリッジ著『生体認証国家—グローバルな監視政治と南アフリカの近現代—』（岩波書店）を翻訳した。同書は、19 世紀半ばの「指紋法の父」フランシス・ゴルトンのナミビア旅行から 20 世紀末の反テロリズム・ATM まで、南アフリカがグローバルな監視政治に与えた影響を幅広く検討している。さらに翻訳を契機として、移民管理や警察における指紋の利用も研究課題となっている。

◆ 主な論文・著書

- 『ネルソン・マンデラ—分断を超える現実主義者（リアリスト）—』、岩波書店、2021 年
- 『異郷のイギリス—南アフリカのブリティッシュ・アイデンティティー』、丸善出版、2018 年

◆ 主な担当科目

史料教材研究 I、西洋現代史演習 A、西洋現代史演習 B、西洋現代史特殊研究 A、西洋現代史特殊研究 B

◆ メッセージ

南アフリカに限らず、広く西洋現代史全般に関心のある学生を歓迎します。



あおき しげゆき  
青木 滋之 / AOKI Shigeyuki 教授

〉 専門分野

英米系哲学、科学史・科学哲学、非形式論理

〉 研究キーワード

イギリス経験論、自然主義認識論、科学思想史、地球惑星科学の哲学、クリティカルシンキング

〉 最終学歴・学位・取得大学

博士（人間・環境学）（京都大学）

〉 問い合わせ先

s-aoki@tamacc.chuo-u.ac.jp

〉 リンク

[研究者情報データベース](#)

◆ 研究内容の紹介

私の研究の専門は、「経験論 empiricism」の伝統のあるイギリスの哲学です。経験論哲学というのは、感覚(五感)によって世界のことを知ることを重視する立場のことで、現代の科学技術の礎となる考え方です。自然科学は当然のこと、社会科学や人文学でも、観察や実験といったものが学問を行う上で、当たり前のように行われていますが、そうした「常識」はどのように生まれたのか、そうした常識を生み出す哲学と諸科学はどのような関係を歩んできたのか、を主たる研究テーマとしてきました。私が専門としているジョン・ロック(1632-1704)の主著である『人間知性論』の冒頭に、イングランドで実験科学を推進していたボイル、ニュートンといった人物が登場しますが、ロックは、そうした化学、物理学を創設した自然科学者を念頭に置いて、哲学的な思考を刷新する仕事を行っています。

現代でも、「学際研究」の重要性が指摘され、様々な学問を進める上で、他分野との融合や協力といったものの有効性が問われています。私の研究は、そうした現在の学問状況に対する歴史的な経緯、背景といったものを詳らかにするものです。一例を挙げますと、私が取り組んでいる問題の一つに、我々の宇宙に対する認識の広がり(例えば、地球以外の地球型惑星の発見)が、これまで人文学の中で論じられてきた「人間の位置」、「人間原理」、「人生の意味」といった哲学的問題に、どのような影響を与えるのかといった研究テーマがあります。存在は人間の認識によって規定されるのか(あるいはその逆なのか)、人が自分の人生をどのように見るのか、といった“哲学的”なテーマも、歴史的にみれば、その時代での宇宙観や、生命観といったものに大きく規定されます。我々、地球に生きている人類が、宇宙の中でユニークな存在なのか、それとも、ありふれた存在であるのかといった背景知識は、人類の役割や意義、人の生涯や生活の「意味」といった哲学的な問題を考える上でも、大切になってくることでしょう。「地球惑星科学の哲学」ってどんな学問? というオンライン記事があるので、関心のある方は検索して読んでみてください。高校生でも、理解できる内容になっていると思います。

現在では、“哲学と科学との接続”をテーマに、17世紀イングランドでの経験科学の興りや、19世紀の科学哲学と進化学との関係、現代の地球惑星科学の哲学的含意など、哲学の分野以外の人たちと協同研究を行ってきました(もし関心があれば、科研費データベースで検索してみてください)。諸科学の発展や現状をふまえつつ、古今の西洋哲学の知見を活かしながら、新しい哲学的思考の展開に取り組んでいます。そうした研究に関心がある、若い人からのコンタクトを心待ちにしています。

◆ 主な論文・著書

- 「『マトリックス』の世界でのリアリティを考える」(寺本剛編『リアリティの哲学』所収), 中央大学出版部, 2023
- 「複数世界論の史的展開と現在」(『ユリイカ』1月号所収), 青土社, 2023
- *Locke on Knowledge, Politics and Religion* (共著, 下川潔, Peter Anstey 編), Bloomsbury, 2021
- “Earth Science Before the Plate Tectonics Revolution in Japan: The Earth Sciences Department at Nagoya University 1942-1967”, *Historia Scientiarum*, 28-3, 2019年3月
- 『原子論の可能性』(共著, 田上孝一, 本郷朝香編)法政大学出版局, 2018年11月

◆ 主な担当科目

西洋近世哲学研究 I A、西洋近世哲学研究 I B、西洋近世哲学研究 II A、西洋近世哲学研究 II B、西洋近世哲学特殊研究 A、西洋近世哲学特殊研究 B

◆ メッセージ

哲学を、文学研究科の一専攻という縛りの中だけでなく、他学問や、社会との接続の中で活用していくことを考えています。また、海外での発表を奨励し、海外の研究者との交流を通じて、国際規模で活躍できる研究者を養成していきたいと思っています。こうしたことに面白さを感じられる人は、是非コンタクトを取ってください。



おおかわ まこと  
大川 真 / OKAWA Makoto 教授

〉 専門分野

日本思想史、日本文化史、日本精神史

〉 研究キーワード

天皇、皇統論、皇位継承、女性・女系天皇論、国体論、新井白石、水戸学、国学、

〉 最終学歴・学位・取得大学

博士（文学）（東北大学）

〉 問い合わせ先

okawa●tamacc.chuo-u.ac.jp

〉 リンク

[研究者情報データベース](#)、[個人ウェブサイト](#)

◆ 研究内容の紹介

日本の大学の哲学・倫理学講座においては、ヨーロッパ思想の探求に圧倒的な比重が置かれ、日本思想は周辺領域に位置づけられてきました。その原因として、戦前戦中で見られた国粋主義的な日本精神に対する嫌悪や、日本思想を体系的・論理的・普遍性を欠如したものと規定する根深い誤解があったと思われます。また日本思想への学術研究が市民権をいまだに得ていないことが大きく災いし、近年ではエスノセントリズム・レイシズムの色彩の強い日本論・日本人論が跋扈しています。かかる状況を打開すべく、私は隣接諸分野の研究成果や方法なども積極的に取り入れつつ、日本思想史を専攻分野として、以下の研究に従事してきました。

1, 日本近世・近代政治思想史研究

近世日本の社会・政治体制に対して、どのような思想が、あるいは、どのように思想が、正当化し、正統性を付与していったのか、その詳細を解明することをメインに研究を進めてきました。その成果は単著『近世王権論と「正名」の転回史』（御茶の水書房、2012年）として刊行されました。本書は、天皇と将軍という二人の「君主」が共存する前近代の日本の王権構造に対し、近世の思想家がどのように理解したか、その実相を通史的に描出したものです。なお単著刊行後も研究の主軸である新井白石研究や水戸学研究を継続して進めています。

また幕末明治における政治思想史研究、とりわけ共和制・民主制思想の導入と進展を解明してきました。関連して、政治学者・吉野作造を中心に大正デモクラシーや当時の中国論の分析を精力的に進めてきました。

2, 近現代における女性・女系天皇論の解明

国民の大半の意識は、旧・現の皇室典範の規定が前代までの歴史的・文化的な蓄積を直線的に反映して決定されたと考えがちであり、皇位継承が男系の皇族男子に限られ、女系を認めないとする考え方が前近代から連続していると主張する論説は、相当数見受けられます。皇位継承をめぐる議論が、このような非学問的な自己意見の披瀝に陥っている状況を打破するためにも、私は、科学研究費を獲得し（課題番号：20K00109, 23K00097）、女性天皇・女系天皇論が旧皇室典範（1889年制定）の成立前後で、どのように連続・変化していくのか、西洋の王位継承法や律令の影響をふまえてその詳細を解明しております。

3, その他

日本近世期における死者・靈魂観の通史的把握や、靖国思想に見られる死者の顕彰と選別について論じました。

また日台間の大規模な科学者会議である第31回中日工程技術研討会では、「問われる日本のエネルギー政策と民主主義」と題して、放射性指定廃棄物最終処分場問題を日本思想史の知見も取り入れて論じました。

さらに朝鮮儒学を代表する李退溪の思想を、正義論の文脈から読み直し、韓国・釜山での退溪学国際学術大会にて発表しました。

以上の研究業績の詳細は researchmap(<https://researchmap.jp/read0157336>)にて記載されております。

◆ 主な論文・著書

- 『近世王権論と「正名」の転回史』御茶の水書房、2012年
- 『日本思想史事典』編著（日本思想史事典編集委員会）丸善出版、2020年
- 「18・19世紀における女性天皇・女系天皇論」（『SGRA レポート』90号、（公財）渥美国際交流財団関口グローバル研究会、2020年）
- 「一八四八年改正オランダ王国憲法と日本の皇統論」（『日本思想史学』54、2022年）
- 「吉野作造の中国論—対華二十一ヶ条からワシントン会議まで—」（『吉野作造研究』14号、吉野作造記念館、2018年）

◆ 主な担当科目

日本倫理思想研究ⅠA、日本倫理思想研究ⅠB、日本倫理思想研究ⅡA、日本倫理思想研究ⅡB、日本倫理思想特殊研究A、日本倫理思想特殊研究B

◆ メッセージ

私の中心的なテーマは、日本の近世・近代の政治思想史研究ですが、日本の思想・文化のことであれば、広く指導を行うことが可能です。また政治思想・政治哲学・法哲学の分野に限れば、西洋思想に関しても一定の程度指導が出来ます。いずれにしましても、大学院入学をお考えの方は、一度メールにて私にお気軽にご相談ください。他大学や留学生も大いに歓迎します。

でむら かずひこ  
出村 和彦 / DEMURA Kazuhiko 教授



〉 専門分野

古代ギリシア・ローマ哲学、倫理学、教父哲学、初期キリスト教思想史

〉 研究キーワード

アウグスティヌス、ヒラリウス、心、原罪、三位一体

〉 最終学歴

東京都立大学大学院博士課程単位取得退学

〉 問い合わせ先

demura.kzhk@gmail.com

〉 リンク

[研究者情報データベース](#)

◆ 研究内容の紹介

私は、哲学倫理学・思想史研究分野において、特に、古代古典ギリシア哲学を背景に展開したヘレニズム・ローマ哲学と初期キリスト教が交錯する古代末期の思想史を専門とし、とりわけ、アウグスティヌス(356-430)の「心」を中心とした人間理解の特質を研究し、また彼の生涯を通じたアクチュアルな時代への関わりを、原典の読解に基づいて解明することをテーマとしています。

研究業績としては、ギリシア語ラテン語の原典読解研究の成果としての翻訳注解説を出版してきました。その最新業績は『アウグスティヌス著作集』所収の「詩編注解 86-87」の翻訳であり、その解説において彼の聖書注解には、会衆を前に語りかける文体のアクチュアルなテキストである面とギリシア語やヘブライ語原典まで精査して意味を探っていく試論的な面との両面があることを示しました。なお、その他『アウグスティヌス著作集』や『中世思想原典集成』には本邦初訳となる拙訳が収録されています。アウグスティヌスの生きた古代末期の時代の思想史を研究するに至った視野は、碩学ピーター・ブラウンの古典的名著『アウグスティヌス伝』上下(2004年)全訳出版する任を担ったことから切り開かれました。とりわけ、最新研究動向をフォローした2000年の改訂版に付されたエピローグも含めて本学学界に紹介したことから、本翻訳は西洋古代末期歴史学界でよく引用される業績となっています。

以上の基礎的研究をもとに、私自身は一貫して、「心」を中心としたアウグスティヌスの人間理解の特質を研究しています。まず、全著作におよそ8000か所現れる「心 cor」(心臓)という語の用例から伺われるその概念について、初期の『詩編注解』1-32での用例から『告白』での用例の変化、そしてその後の『説教』を辿りつつ研究を進めています。その成果は、国際研究集会や国内の研究會等で発表し、これらに再検討を加えた単著『アウグスティヌスの「心」の哲学: 序説』(岡山大学文学部研究叢書)(2011年)や『アウグスティヌス「心」の哲学者』(岩波新書)(2017年)を著しています。また、世界哲学史という新しい視野のもとに人類の知的遺産を検討するシリーズ『世界哲学史 古代2』(ちくま新書)(2020年)では、「内的超越」や「自由意志」というアウグスティヌスの哲学的倫理学的根本概念を「根源悪」との関連で概説しました。そのような「心」の持つ生きる人間の普遍的境涯ともいふべき「生老病死」の現実において、現実にかかわってくる「貧困」「病気」「老齢」といった人間の弱さについて、アウグスティヌスがどのように取り組んでいたかを解明したものに「アウグスティヌスにおける「貧困」「病」そして「老齢」」査読付論文(『パトリスティカー教父研究 第20号』(2017年)所収)があります。

◆ 主な論文・著書

- 『アウグスティヌス「心」の哲学者』(岩波新書)岩波書店、2017年初版、2021年3刷
- 「ラテン教父とアウグスティヌス」『世界哲学史 古代2』(ちくま新書)、納富信留他編、筑摩書房、2020年
- 「アウグスティヌス 詩編注解」86-87『アウグスティヌス著作集』19/Ⅱ、教文館、2020年
- 「バシレイオス ヘクサメロン(創造の6日間)」『中世思想原典集成 精選 ギリシア教父・ビザンティン思想』(平凡社ライブラリー)、上智大学中世思想研究所編、平凡社、2018年

◆ 主な担当科目

西洋古代中世哲学研究 I A、西洋古代中世哲学研究 I B、西洋古代中世哲学研究 II A、西洋古代中世哲学研究 II B、西洋古代中世哲学特殊研究A、西洋古代中世哲学特殊研究B

◆ メッセージ

原典から西洋の源流思想とその展開を読み取る喜びをぜひ皆さんにも味わってもらいたいです。困難の時代でも「古典」は私たちの人生を支える糧です。さらに、日本の能狂言の世界も西洋の古典と並ぶものですので機会があればこれも楽しんでください。



なかむら のぼる

中村 昇 / NAKAMURA Noboru 教授

〉 専門分野

現代西洋哲学

〉 研究キーワード

時間、言語

〉 最終学歴・学位・取得大学

中央大学大学院文学研究科博士課程後期満期退学

〉 問い合わせ先

nobol7@yahoo.co.jp

〉 リンク

[研究者情報データベース](#)

◆ 研究内容の紹介

時間と言語について考えています。われわれが生きている時間とは、どのような時間なのか。本当に時間は流れているのか。物理学の時間と本当の時間とは、どう関係しているのか。あるいは、私たちの言語活動とはどのようなものか。言葉によって考えているのではなく、言葉に考えさせられているだけではないのか。われわれは、本当に自分で思考しているのか、といったことをいつも考えています。

◆ 主な論文・著書

- 『ワイトゲンシュタイン、最初の一步』(亜紀書房)
- 『続・ワイトゲンシュタイン『哲学探究』入門』(教育評論社)
- 『西田幾多郎の哲学＝絶対無の場所とは何か』(講談社選書メチエ)
- 『落語－哲学』(亜紀書房)

◆ 主な担当科目

西洋現代哲学研究ⅠA、西洋現代哲学研究ⅠB、西洋現代哲学研究ⅡA、西洋現代哲学研究ⅡB、西洋現代哲学特殊研究A、西洋現代哲学特殊研究B

◆ メッセージ

哲学は、われわれの最も大切な問題をじっくり考える学問です。「役に立つ」「役に立たない」といった概念とは、まったくかわりをもたない純粋な思考の営為です。どっぷりと「哲学沼」に浸ってみませんか。世界の見方が、丸ごと変わります。



みずかみ まさはる

水上 雅晴 / MIZUKAMI Masaharu 教授

#### 〉 専門分野

中国哲学、科挙学、日本漢学、琉球漢学

#### 〉 研究キーワード

考証学、科挙、漢籍、年号、琉球漢籍

#### 〉 最終学歴・学位・取得大学

北海道大学大学院文学研究科博士後期課程東洋哲学専攻単位取得退学

#### 〉 問い合わせ先

[こちらのフォームよりお問い合わせください。](#)

#### 〉 リンク

[研究者情報データベース](#)

### ◆ 研究内容の紹介

中国では、漢から清に至るまでの期間、経書すなわち儒家の經典に聖人の道が記されているという観念が知識人の中で共有され、経書の字句をどのように理解するかが学術活動における重要な部分を占め続けた。経書の本義の獲得を目的とする学術的営為を経学と称し、経学は東アジア地域の学問や思想に影響を与えつけた。これまで三十年あまり続けてきた研究活動は、この経学の中、清代に盛んだった考証学を対象として始まり、当初は清代の学者による実証的な文献分析に看取される主観性とそれが生じた原因の考察を進めた。

その後は、関心が考証学の発展を支えた社会的要素と考えられる幕府に移行した。幕府は、地方官が赴任地で政務を執る役所であり、三年程度の任期のある地方官は赴任先に幕友と呼ばれる個人秘書を同行し、この幕友は多くの場合、科挙の受験生がなった。地方官の中には学問好きな者もあり、彼らは幕友に自身の学術的著作の編纂を手伝ってもらったり、代行してもらったりした。科挙は三年に一度の実施が基本なので、受験生活が長期化するのとは避けられず、読書人にとって幕友になることは科挙受験生活を続けるための現実的な職業選択であった。それに加え、考証学盛行の風気の下、地方官が企画した編纂事業に関わることを通して、幕友は幅広い知識と考証能力を高めることができた。科挙試験の内容は、考証学に関わる部分は少ないが、出題・採点の運用面で考証能力が評価される状況が出現し、清代中期には考証能力に長けた受験生が合格しやすい状況が生まれた。その状況が考証学の発展を支えた。

以上の状況に対して、多様な文献を丁寧に読み取ることを通して得られる知見をもとに独自性に富む研究を国内外において発表してきた。現在、考証学を宋から清にかけて発展した学術的営為ととらえ直し、その間の変遷と発展状況の解明を目指す萌芽的な研究に従事している。

日本漢学に関しては、日中の考証学の比較から研究をスタートした後、中世儒学の本流に位置していた明経博士家の清原氏の学問の特質を明らかにすることに問題関心が移った。後者に関連する研究は、中国学研究者が博士家の学問に着目するようになる状況が生じるようになったことについて、一定の貢献があると自負している。その後、研究の重点が日本の年号資料における漢学・漢籍の影響に移り、年号資料を解題・影印した資料集を中国で出版した。さらに年号に関する国際シンポジウムを主催し、その成果を論文集にまとめて国内で出版した。社会貢献活動として、年号資料に関する展示会を国立歴史民俗博物館にて実施した。現在は、江戸の俗文学から看取される漢籍受容の状況に関心を持ち、時折、川柳作品を見てはニヤリとしている。

琉球漢学に関しては、残されている数少ない琉球漢籍の調査を各地で行ったうえで、漢籍の書き入れに着目するという新たな研究手法を導入し、琉球士族による漢籍学習の具体的な状況の一端を解明することに成功した。

### ◆ 主な論文・著書

- 「年号勘文と漢籍引文」『日本漢籍受容史—日本文化の基層—』(高田宗平編)八木書店、2022年
- 「宋代の考証学に関する試論—清朝考証学との関係について—」『日本中国学会報』、74、2022年
- 「《詩經》與日本年號」『中日詩經学之比較研究』(張文朝編)台湾中央研究院中国文哲研究所、2021年
- 「清代漢学者の経書解釈法」『漢学とは何か—漢唐および清中後期の学術世界』(川原秀城編)勉誠出版、2020年
- 『年号と東アジア—改元の思想と文化—』(水上雅晴編、高田宗平編集協力)八木書店、2019年

### ◆ 主な担当科目

中国哲学研究ⅠA、中国哲学研究ⅠB、中国哲学研究ⅡA、中国哲学研究ⅡB、中国哲学特殊研究A、中国哲学特殊研究B

### ◆ メッセージ

興味を持つ対象が定まらず、色々な食材を食い散らかしつつづけている雑食動物です。このメッセージを書いている時点では、江戸時代の落書と18～19世紀の西洋思想家の著述における中国思想に関する言及について調べていますが、すぐに未消化のまま別のテーマに関心が移っていることでしょうか。一つの学問領域の中でぶれることなく研究の営為を重ねていくのが本道だと分かっているのですが、こればかりはどうにもなりません。



あまだ じょうすけ  
天田 城介 / AMADA Josuke 教授

〉 専門分野

臨床社会学、歴史社会学、福祉社会学、医療社会学

〉 研究キーワード

老い、障害、病い、生存、臨床、制度、歴史、国家

〉 最終学歴・学位・取得大学

博士（社会学）（立教大学）

〉 問い合わせ先

josuke.amada●nifty.com

〉 リンク

[研究者情報データベース](#)

[天田城介のホームページ](#)に関連情報を掲載しておりますので、よろしければご参照ください。

◆ 研究内容の紹介

現代社会において人びとはいかに生存・生活しているのかの現場に分け入り、それはいかに可能／困難になっているのかを考えています。目の前で立ち現れている現実を捉える臨床の視点（ミクロの視点）と同時に、そうした現実から一気に身を引き剥がして歴史や比較の視点（マクロの視点）から思考することを続けています。詳細は、天田城介のホームページ（<http://www.josukeamada.com>）をご覧ください。

◆ 主な論文・著書

以下、過去6年の主な論文・著書の一部。

- 「成り上がりユダヤ人中産階級の自己意識を土台にした社会理論／エスノグラフィー——自らの悲劇に対する冷徹でアイロニカルな社会学的態度という自由」『現代思想』第45巻6号：85-99. 2017.
- 「〈社会的なもの〉の社会学的忘却」『現代思想』第46巻6号：70-76. 2018.
- 「「地域包括ケア」において後退する「社会的な問い」——地域包括ケアにおいて誰がいかに負担・コストを担うのか」『保健医療社会学論集』第29巻1号：9-16. 2018.
- 「生き抜く者たちの世界をめぐる社会学——臨床社会学の企て」『社会学論叢』No.195：1-22. 2019.
- 「ケアをめぐる選択によって不利益を被らない権利」『都市問題』vol.122：4-11. 2000.
- 「介護保険のあり方——「介護労働」の視点から考える」『ふれあいケア』第26巻7号：9-13. 2020.
- 「〈トリアージ〉の社会学——「命の選別」をしなくてもよい社会を構想する」『福音と世界』第76巻6号：12-17. 2020.
- 「超高齢・人口減少社会——いま問われているのは新たな社会設計・社会構想である」落合恵美子編『どうする日本の家族政策』ミネルヴァ書房：39-54. 2021.
- 「介護保険時代における家族介護者のケアコストと責任」『生活経済政策』No.314：12-16. 2023.

◆ 主な担当科目

社会構想論特講、社会学プロジェクト演習（グローバル）I A、社会学プロジェクト演習（グローバル）I B、臨床社会学特講、歴史社会学特講、社会学プロジェクト専門演習（グローバル）I A、社会学プロジェクト専門演習（グローバル）I B、臨床社会学特殊研究、歴史社会学特殊研究

◆ メッセージ

大学院では、さまざまな現実を社会学的視点から徹底的に思考し続けることでその可能性と限界が見えてきます。そのためにこそ技法や理論や方法を学び、自らの立脚点と方法論を緻密かつ大胆に組み立て、冷静かつ強かに研究を展開していくことのお手伝いのできればと思っています。





しゅとう としかず  
首藤 明和 / SHUTO Toshikazu 教授

〉 専門分野

社会学、比較アジア社会論、中国社会論、ラディカル構成主義

〉 研究キーワード

意味論、時空論、フィールドワーク、家族、地域、宗教、民族、意識、社会システム理論

〉 最終学歴・学位・取得大学

博士（学術）（神戸大学）

〉 問い合わせ先

shuto●tamacc.chuo-u.ac.jp

〉 リンク

[研究者情報データベース](#)

◆ 研究内容の紹介

研究内容の詳細は、こちらからご覧ください。

「フィールドワークを旅人の視点に重ねてみる」

<https://www.nagasaki-u.ac.jp/ja/about/info/publicity/file/c054-5.pdf>

◆ 主な論文・著書

- 『中国のムスリムからみる中国——N. ルーマンの社会システム理論から』（単著、明石書店、2020年）
- 『中華世界を読む』（分担執筆、東方書店、2020年）
- 『平和の翼と波を広げる——現在・過去・未来』（分担執筆、長崎文献社、2020年）
- 『日本と中国の家族制度研究』（共編著、風響社、2019年）
- 「回族の結婚と「個人化」「親密な関係」「コミュニケーション・メディア」「予期構造」——N. ルーマン構成主義的認識論からの結婚研究に対する新たな問い」『中国 21』第 54 号（2021年）。

◆ 主な担当科目

社会構想論特講、社会学プロジェクト演習（ヴィジョナリー）ⅢA、社会学プロジェクト演習（ヴィジョナリー）ⅢB、東アジア社会論特講、社会学プロジェクト専門演習（ヴィジョナリー）ⅢA、社会学プロジェクト専門演習（ヴィジョナリー）ⅢB、東アジア社会論特殊研究

◆ メッセージ

世界は意味を過剰に有していて、私たちに選択することを求めています。一方、私たちは、意味の欠乏や喪失を恐れており、意味の選択を通じて、意味世界を構成します。あるいは、何かを選択しなければ、次の出来事も生じません。こうして私たちは、再帰的に自己言及する世界の中で生きており、観察や記述をおこなう可能性に開かれています。社会学やフィールドワークでは、私たちが、それぞれの主観（時空）を携えて世界構成の動きの場にいることを感じつつ、オープンエンドに考えていきます。



にいはら みちのぶ  
**新原 道信** / NIIHARA Michinobu 教授

〉 専門分野

都市と地域の社会学、国際フィールドワーク、コミュニティの比較研究

〉 研究キーワード

都市・地域、コミュニティ、ひとの移動、エスニシティ、異質性、臨場・臨床の智、社会的痛苦、旅、境界領域、社会文化的な島々、惑星社会、フィールドワーク、イタリア、地中海

〉 最終学歴・学位・取得大学

一橋大学大学院・社会学修士（一橋大学）

〉 問い合わせ先

niihara●tamacc.chuo-u.ac.jp

〉 リンク

[研究者情報データベース](#)、[中央大学文学部](#)、[社会学専攻ウェブサイト](#)

◆ 研究内容の紹介

私は、都市と地域の社会学を専門として、世界各地でフィールドワークをすることで、キーワードにあるようなテーマを探求してきました。もともとの動機は、「どんなひとであれ、どんな生き物であれ、どんな自然であれ、ただ存在するという理由のみによって静かに尊重されるような社会」(メルッチ、メルレル)を創るための学問をしたいというものでした。子供の頃からずっと、先生や親の期待から逸脱してしまい、なかなか自分の「居場所」や「存在理由」を見つけられませんでした。そのせいかもしれませんが、出郷者や故郷喪失者、痛みを抱えたひと、「変な」ひと、「病んだ」ひと、「よそもの(ストレンジャー)」、「異質・異物」とされるひとや生き物も暮らせる「街」があつたらいいなと思っていました。ここから、「出会いの場としての都市や地域」「異質性を含み混んだコミュニティ」を希求することになったのだと思います。これまで、日本やイタリア、地中海、ヨーロッパや南米、大西洋、アジア・太平洋の「辺境」(と他のひとたちから思われる場所)に行き、歴史的・文化的に複雑な背景(roots and routes)をもったひとたちに出会ってきました。様々な理解の在り方、異なる智を持った人たちがこの地球上に生きている／生きていたことを実感し、その臨場・臨床の智に即して〈ひとのつながりの新たなかたち〉を構想することが研究の目的となっています。

現在は、①〈異質性への過剰な拒否反応による「壁」の増殖と分断に対峙する共存・共在の智〉を探求するフィールドワーク、②「新型コロナウイルス」も含めた惑星規模の問題に回答する“生存の場としての地域社会”の探求、③“フィールドに出られないときのフィールドワーク”についてのプロジェクトをすすめています。これらの研究プロジェクトを通じて、“グローバル社会で生起する惑星地球規模の諸問題”の背後に在る“根本問題”を切り出し、想定内の「問題解決」ではない“新たな問いを立てる”ことをめざしています。

〈調査研究／教育／大学と地域の協業〉のつながりを大切にしていることから、3.11以降、立川・砂川をフィールドとして、“社会の子どもたち”が巣立つ“共創・共成”コミュニティというプロジェクトをすすめています。私たちと同じく、特定の地域と息長くかわるスタイルで調査研究をすすめるイタリア・ブラジル・インド・カナダなどの研究者と、国際的ネットワークを形成し、お互いの知見を共有しています。

院生のみなさんには、調査研究をともにする「よき研究仲間(ベル・エキップ)」として、各種の研究プロジェクトに参加してもらっています。

①自分でフィールドワークの場(自分にとっての“共創・共成”の場)を探す、②他のメンバーとの“対話的なエラボレイション”により、独自のフィールドワークを行う、③「原問題の発見／問題解決の新たな方向」に関してまとめる、④初期シカゴ学派のように、複数の目で見て複数の声を聴き、複数のやり方で書いていく。

生身の社会のなかで、多様な研究仲間、フィールドの方々との協業をすすめていくという営みを、ともに(共に／伴って／友として)創ることを始めたいと思ってくれるひとを、ぜひ大学院にお迎えしたいと思っています！

◆ 主な論文・著書

- 『うごきの場に居合わせる——公営団地におけるリフレクシヴな調査研究』(新原道信編著、中央大学出版部、2016年3月)
- 『再帰的＝反省社会学の地平』(共著、矢澤修次郎編、東信堂、2017年11月)
- 『「臨場・臨床の智」の工房——国境島嶼と都市公営団地のコミュニティ研究』(新原道信編著、中央大学出版部、2019年3月)
- 『地球社会の複合的諸問題への応答の試み』(新原道信・宮野勝・鳴子博子編著、中央大学出版部、2020年1月)
- 『人間と社会のうごきをとらえるフィールドワーク入門』(新原道信編著、ミネルヴァ書房、2022年5月)

◆ 主な担当科目

社会構想論特講、社会学プロジェクト演習(クリニカル)VA、社会学プロジェクト演習(クリニカル)VB、地域社会学特講、都市社会学特講、社会学プロジェクト専門演習(クリニカル)VA、社会学プロジェクト専門演習(クリニカル)VB、地域社会学特殊研究、都市社会学特殊研究

◆ メッセージ

いま私たちは、「3.11」からさらに、「新型コロナウイルス」感染拡大、ウクライナなどの困難に直面しています。地球環境への取り組みはもはや先送り出来ません。みなさんが大学院で学ばれる学問は、限界状況において力を発揮する臨場・臨床の智であるはずで、たったひとりで異郷／異教／異境の地に降り立ち、ともに(共に／伴って／友として)を創ることを始める、どこかにある「答え」を探すのではなく智へのパスを総動員して「答えなき問い」に答えていく——そのためにこそ大学院で学んでください。



のみや だいしろう  
野宮 大志郎 / NOMIYA Daishiro 教授

〉 専門分野

社会運動論、グローバル社会学、市民社会論

〉 研究キーワード

社会運動、グローバル化、市民社会、

〉 最終学歴・学位・取得大学

米国ノースカロライナ大学チャペルヒル校 社会学博士 (Ph.D.)

〉 問い合わせ先

dainom●tamacc.chuo-u.ac.jp

〉 リンク

[研究者情報データベース](#)

◆ 研究内容の紹介

人々の活動の中に見いだせる、ズレ、軋み、軋轢、諍い、抗争、意見の異なり、主張の違い、認識の異なりなどに着目して研究しています。こうした出来事は、あらゆる社会すなわち 2 人だけの関係にはじまり、家族、地域、コミュニティ、さらには国家や国家間関係・グローバルな世界においても見いだせます。なぜ、このような領域に関心を向けるのか。それは、種々の争いや認識の違いこそが、社会の変動の大きな力になるからなのです。

1950-60 年代に米国で起こった公民権運動という社会運動をご存知でしょうか。この運動は、マーティン・ルーサー・キングという牧師をリーダーとして、黒人と白人との間に存在する差別とそれを支える様々な法律の廃止を通して、人種を超えた平等の実現を目指した運動です。この運動は、米国から国境を超えて、社会変革の大きなうねりをもたらしました。

一つ例を上げてみましょう。今日、テレビ映像に映るアメリカの大学のキャンパス、また国際色豊かな日本のキャンパスを想像してみてください。このような世界は、1960 年以前には、見るができなかった世界なのです。公民権運動の結果、1962 年、アメリカ南部のミシシッピ大学ではじめて黒人生徒の入学が許可されたのです。このように、社会運動は、社会を変革する力になるのです。

もうひとつ、社会運動がもたらすものを挙げましょう。社会運動は、国家の考え方や行動が妥当ではない、正当性がないと考えられる場合、まず誰よりも先に声をあげるものとなります。2014 に始まった香港の民主化運動、また 2021 年に起こったミャンマーの民主化運動も、その事例と考えられます。もちろん、そうした運動がどの程度の社会変革をもたらすかはわかりません。しかし、運動は自らの主張を携えて起こります。

第二次大戦後の日本は、戦後に起こった大きな戦争に直接関与することのない時代を過ごしてきました。しかし、戦後日本社会のすべての局面で問題がなかったわけではありません。日本人の外国人の不平等、貧困、教育そして生活のあらゆる局面において、「ここがおかしい」、「こうなるべきだ」、「修正されなければならない」と考えることはたくさんあります。そうした事柄を見出したときに、ただ黙っているだけでなく、議論できる人たちを一人でも多くこの世界に送り出したいと考えています。

◆ 主な論文・著書

- Daishiro Nomiya. "Stranded Modernity: Post-war Hiroshima as Discursive Battlefiled". In Simone Maddanau (eds.) *Modernity and Its Discontent*. Ashgate. Holland. 2022.
- 「第 13 章 社会運動」. Pp.230-245 友枝敏雄(他)編著. 『今を生きるための社会学』. 丸善出版. 2021.
- 「第 7 章. グローバル社会と人材育成」. 『人材育成ハンドブック』. 金子書房. 日本. 2019.
- "Chapter 2 Transforming the Ominous into Happiness: How Antinuclear Drive Was Tamed in the Post-War Japan?" in B.K.Nagla (ed.) *Issues and Themes in Contemporary Society*. Rawat Publications. India. 2019.
- 野宮大志郎・町村敬志編著「第 12 章 社会運動」. 日本社会学会理論応用事典刊行委員会編『社会学理論応用辞典』. 丸善出版. 2017.

◆ 主な担当科目

社会学プロジェクト演習(クリニカル) VIA、社会学プロジェクト演習(クリニカル) VIB、社会運動論特講、グローバリゼーション論特講、社会情報学基礎理論特講 A、社会構想論特殊研究、社会学プロジェクト専門演習(クリニカル) VIA、社会学プロジェクト専門演習(クリニカル) VIB、社会運動論特殊研究 グローバリゼーション論特殊研究

◆ メッセージ

強い個を創る。これが大学教育の根幹にある理念だと考えます。「強い」とは力ではなく、声の大きさでもありません。むしろ、自分が思うこと、考えることに嘘をつかない力、自らの考えを主張できる力を、学生の皆さん各自の中にそだてていきたいと考えています。


 やの よしろう  
 矢野 善郎 / YANO Yoshiro 教授

## &gt; 専門分野

理論社会学・社会学史

## &gt; 研究キーワード

マックス・ヴェーバー, 近代社会, 近代合理主義, デイバート教育

## &gt; 最終学歴・学位・取得大学

博士(社会学)(東京大学)

## &gt; 問い合わせ先

yano●tamacc.chuo-u.ac.jp

## &gt; リンク

[研究者情報データベース](#)
[中央大学文学部 社会学専攻ウェブサイト](#)
[全国英語デイバート連盟 \(HEnDA\)](#)

## ◆研究内容の紹介

社会学の中でも、理論社会学・社会学史の分野で研究しております。特定の地域・フィールドや具体的な対象・エリアというより、社会学の理論・学説そのものを歴史的に研究するという方法をとっております。

出発点であり、最も強く惹かれているのは、ドイツの社会学者、マックス・ヴェーバー(Max Weber 1864-1920)の社会学です。ただヴェーバー研究者という割には、ヴェーバーという人物についての伝記的な研究や、ヴェーバー自身の政治的姿勢などにはあまり興味がありません。私自身が研究するに値すると考えているのは、ヴェーバーを筆頭に、過去のそして比較的近年の社会学の理論が、それぞれどのような違いを持ち、現代の社会学にとっての意義やインスピレーションをもたらすかという側面です。

そもそも私がヴェーバーから学び、そして伝えたいことの一つに、「違い(差異)」を語ることの重要性と、そのための社会学の方法(理論社会学・方法論的合理主義)です。社会学という科学は、一言で定義することも、確定版と言えるような定義もありません。そもそも「社会」という言葉で表現されるものはなんなのか、それすらも社会学者の間で意見の一致はありません。それはそれで実は社会学の魅力の一つだということを、社会学を学ぶ上で気づく人も多いのですが、私の研究領域は、様々な社会学の地図を作ることで、これからの社会学の水先案内を行うようなものであろうと考えております。

ヴェーバーに学んだ方法に触発されながら、様々な社会学の違いを語り、その違いを楽しむことを伝えたいと思っております。中央大学では、学部生向けに「社会学史」という授業を長年担当しており、大学院でも社会学理論(古典・現代)という講義で院生の皆さんと社会学理論について考えてもらっております。ヴェーバーに限らず、数多くの天才的な思想家・哲学者・社会学者による特徴的な考え方(パラダイム)・社会についての構想の違いを語りあってきました。

私個人は、理論・学説研究や講義のかかわら、より実践的・学校教育的な課題である、デイバート教育活動の普及にも関わってきました。私の中では、こうした実践的な活動と理論的な考察とは密接に連携しており、いわば学校などの現場での議論・討論を実験室として、自らの問題意識に刺激をもらっております。

過去の社会学の論争の中で問題にされていた争点のうち、現代でも問い返すべき争点を掘り起こし、そうした争点を通して、互いの「違い」を議論を通して理解する。そうした意味のある論争が行われる世の中を創り出すことに少しでも寄与したい。これが私の学者としての目標です。

## ◆主な論文・著書

- 佐々木正道・吉野諒三・矢野善郎 共編著『現代社会の信頼感—国際比較研究(II)』中央大学出版部, 2018
- 友枝 敏雄, 浜 日出夫共編著『社会学の力—最重要概念・命題集』有斐閣, 2017/6/15
- 橋本 努・矢野 善郎共編著『日本マックス・ウェーバー論争—「プロ倫」読解の現在』ナカニシヤ出版, 2008 年
- 『マックス・ヴェーバーの方法論的合理主義』創文社, 2003 年

## ◆主な担当科目

社会学理論特講(古典)、社会学理論特講(現代)、社会学プロジェクト演習(グローバル)ⅡA、社会学プロジェクト演習(グローバル)B、社会構想論特殊研究、社会学プロジェクト専門演習(グローバル)ⅡA、社会学プロジェクト専門演習(グローバル)ⅡB、社会学理論特殊研究(古典)、社会学理論特殊研究(現代)

## ◆メッセージ

学生の頃より、「原典にまさる解説書なし」と聞かされてきました。この言葉の正しさが年々身にしみています。どんな概説書や入門書であっても、社会学などの古典そのものを読む経験にはかなわない。わからないなりに格闘するほうが、格闘せずにわかった気持ちになるより価値がある。そのことを講義などで伝えられたらと思っております。



やまだ まさひろ  
山田 昌弘 / YAMADA Masahiro 教授

〉 専門分野

家族社会学、ジェンダー論、感情社会学

〉 研究キーワード

少子化、未婚化、結婚、独身者、国際結婚、格差社会、親密性、ペットとの関係

〉 最終学歴・学位・取得大学

東京大学大学院社会学系大学院社会学博士課程退学・社会学修士（東京大学）

〉 問い合わせ先

m-yamada@tamacc.chuo-u.ac.jp

〉 リンク

[研究者情報データベース](#)

◆ 研究内容の紹介

愛情やお金を切り口として、親子・夫婦・恋人などの人間関係を社会的に読み解く試みを行っている。「パラサイト・シングル」の生みの親で、精緻な社会調査をもとに「学卒後も親と同居し、基礎的生活条件を親に依存している未婚者＝パラサイト・シングル」の実態や意識について分析した著書「パラサイト・シングルの時代」（ちくま新書、1999年）は話題を呼んだ。政治・経済の領域と同じように、家族においても「今までと同じやり方ではうまくいかない」という現実を見つめ、戦略的思考で家族生活のリスクマネジメントを行うべき時代だと説いている。1990年代後半から日本社会が変質し、若者の多くから希望が失われていく状況を「希望格差社会」と名づけ、格差社会論の先鞭をつけた。2006年のユーキャン新語流行語大賞トップ10に選ばれる。また、「婚活（結婚活動）」の名付け親でもあり、『婚活時代』（共著、ディスカヴァー21、2008年）はベストセラーになる。読売新聞「人生案内」回答者を2008年より続けている。

現在は、結婚活動支援の調査、そして、夫婦の親密性、中高年独身者の将来生活、家族ペット、に関して調査を行っている。

学会活動では、家族社会学会・会長などを務めている。

現在、内閣府男女共同参画会議民間議員として、政府に助言を行っている。更に、東京都社会福祉審議会委員、NPO 法人全国地域結婚センター理事、熱中小学校教員など、様々な提言、ボランティア活動を行っている。

近年の活動等に関しては、<https://sociology.r.chuo-u.ac.jp/>を参照して下さい。

◆ 主な論文・著書

- 『モテる構造』（ちくま新書 2016年）
- 『底辺への競争』（朝日新書 2017年） 中国語訳あり
- 『結婚不要社会』（朝日新書 2019年） 中国語訳あり
- 『新型格差社会』（朝日新書 2021年） 中国語、韓国語訳あり
- 『日本はなぜ少子化対策に失敗したのか』（光文社新書 2020年） 中国語、韓国語訳あり など多数。

◆ 主な担当科目

社会学プロジェクト演習（ヴィジョナリー）IV、社会学プロジェクト演習（ヴィジョナリー）IVB、家族社会学特講ジェンダー・セクシュアリティ特講、社会構想論特殊研究、社会学プロジェクト専門演習（ヴィジョナリー）IVA、社会学プロジェクト専門演習（ヴィジョナリー）IVB、家族社会学特殊研究、ジェンダー・セクシュアリティ特殊研究

◆ メッセージ

現在、日本は、未婚化、少子化が深刻化し、人口減少社会に入っています。更に、新型コロナ禍が人々の間にある様々な格差を顕在化させています。これによって、どのような問題が出現し、深刻化したか、どのような課題があるのか、一緒に考えて行ければうれしいです。



い い お じゅん  
飯尾 淳 / IIO Jun 教授

〉 専門分野

ヒューマンインタフェース、ソフトウェア工学

〉 研究キーワード

ユーザインタフェース、オープンソースソフトウェア、IT人材育成、データ解析、UX、HCD

〉 最終学歴・学位・取得大学

博士（工学）（大阪大学）

〉 問い合わせ先

iiojun●tamacc.chuo-u.ac.jp

〉 リンク

[研究者情報データベース](#)

[個人ウェブサイト](#)

[飯尾研究室](#)

◆ 研究内容の紹介

人間とシステムのインタラクション、人間とITの関わり方について、研究しています。

◆ 主な論文・著書

- 「オンライン化する大学 コロナ禍での教育実践と考察」樹村房, 2021年9月3日発行
- 「最短距離でしっかり身に付く！Webアプリケーション開発の教科書 ～Ruby on Railsで作る本格Webアプリ～」技術評論社, 2021年4月15日発行
- io, J. (2023) How Many Tweets Describe the Topics on TV Programs: An Investigation on the Relation between Twitter and Mass Media, *IEICE Transactions on Information and Systems*, Vol. E106.D Issue 4, pp. 443-449.
- Iio, J., Ohsaki, A., Waida, R., and Kambayashi, A. (2021) Development and Evaluation of Educational Materials on Human-Centered Design, *IARIA Journal*, Vol. 14, No. 1&2
- Iio, J. and Wakabayashi, S. (2020) Dialogbook: A Proposal for Simple e-Portfolio System for International Communication Learning, *International Journal of Web Information Systems*, Vol. 16, Issue. 5, pp. 611-622.

◆ 主な担当科目

情報システム学特殊研究A、情報システム学特殊研究B

◆ メッセージ

社会の様々な課題をICTで解決することに挑戦したい人を応援します。



こやま けんじ  
 小山 憲司 / KOYAMA Kenji 教授

〉 専門分野

図書館情報学

〉 研究キーワード

大学図書館、学術情報流通、オープンサイエンス、大学教育

〉 最終学歴・学位・取得大学

中央大学大学院文学研究科博士後期課程単位取得退学・修士（社会情報学）（中央大学）

〉 問い合わせ先

Koyama●tamacc.chuo-u.ac.jp

〉 リンク

[研究者情報データベース](#)

[中央大学文学部社会情報学専攻](#)

◆ 研究内容の紹介

私の専門分野は図書館情報学です。図書館と一口に言っても、地方公共団体が運営する公立図書館、小学校、中学校、高等学校等に設置される学校図書館、高等教育機関に附属する大学図書館、企業や研究所などの専門図書館、国立国会図書館などさまざまな種類があります。その中で、私の研究対象は大学図書館です。大学図書館の利用者である研究者や学生がどのように学術情報を検索、入手、利用しているのかといった学術コミュニケーションについての検討・分析を通じて、今後の大学図書館サービスのありかたを研究しています。

研究者が研究に必要とする研究図書や学術雑誌は急速に電子化が進んでいます。その結果、研究者は研究室や自宅に居ながらにして、研究を進められるようになりました。また、研究活動によって生み出されるデータそのものも電子化され、共有されるようになってきました。研究成果を電子化し、共有化する活動はオープンアクセスと呼ばれ、研究活動そのものに大きな影響を与えています。そのような現状を調査し、実態を明らかにすることが私の研究です。その成果は、大学図書館の今後を検討するうえでも重要であると考えています。

“パンデミック時代から考える学術情報流通と図書館情報学”

Chuo Online, <https://yab.yomiuri.co.jp/adv/chuo/research/20200514.php>

My discipline is Library and Information Science. There are a variety of libraries in society as follows: public libraries, school libraries, academic libraries, special libraries, and the National Diet Library. Among them, my research interest is academic libraries. I am studying the future of academic libraries and their services by examining and analyzing scholarly communication, such as how researchers and students search, obtain, and use academic information.

Books and journals that researchers need for their research are rapidly being digitized. As a result, researchers can conduct their research in their office and laboratory, even at home now. Data generated by research activities are also being digitized and shared. The activity of sharing research results on the Internet for free is called Open Access, and it has a significant impact on research activities themselves. My research is to investigate and clarify the current situation of both scholarly communication and research activities. I believe that the results of my research will help us examine the future of academic libraries.

“Scholarly Communication and Library and Information Science in the Pandemic Era”. Chuo Online, [https://yab.yomiuri.co.jp/adv/chuo/dy/research/20210325\\_en.php](https://yab.yomiuri.co.jp/adv/chuo/dy/research/20210325_en.php)

◆ 主な論文・著書

- クリスティン L. ボーグマン著, 佐藤義則, 小山憲司訳. ビッグデータ・リトルデータ・ノーデータ「研究データと知識インフラ」勁草書房, 2017.
- 加藤信哉・小山憲司編訳. ラーニング・コモンズ「大学図書館の新しいかたち」勁草書房, 2012.

◆ 主な担当科目

社会情報学基礎理論特講A、図書館情報学特講A、図書館情報学特講B、図書館情報学演習A、図書館情報学演習B、図書館情報学特殊研究A、図書館情報学特殊研究B

◆ メッセージ

図書館を、そして私たちを取り巻く社会は急速に変化しています。その変化を注視しつつも、基本を忘れずに一緒に学問できたらと思います。


 つじ いずみ  
 辻 泉 / TSUJI Izumi 教授

## &gt; 専門分野

メディア論、文化社会学

## &gt; 研究キーワード

メディア、コミュニケーション、ポピュラー文化、若者文化、ファン、オタク、グローバル化

## &gt; 最終学歴・学位・取得大学

博士（社会学）（東京都立大学）

## &gt; 問い合わせ先

tsuji●tamacc.chuo-u.ac.jp

## &gt; リンク

[研究者情報データベース](#)
[個人紹介ページ（中央大学文学部社会情報学専攻ホームページより）](#)
[中央大学シラバスデータベース](#)

撮影：工藤博司

## ◆研究内容の紹介

## 1. 一貫した問いと研究対象

後期近代の成熟した社会を、私たちはいかに「楽しく」生きていくことができるのでしょうか。そのような問いを一貫して持ち続け、ポピュラー文化や若者文化のフィールド、メディアの利用に関する様々な実態調査を行ってきました。

ライフワークとして、学部生時代よりずっと注目してきたのは「ファン」という存在です。あるいは「オタク」と呼び表してもよいでしょう。彼／彼女らは、たくみに各種のメディアを使いこなしながら、愛好する対象についての文化を、実に楽しそうに享受しています。そのありようには、私たちの多くが、現在の、そしてこれからの社会をいかに「楽しく」生きていくことができるか、という問いへの、ヒントが詰まっているように思います。

学部の卒論や大学院の修士論文ではアイドルのファンに、博士論文では鉄道ファンに着目し、今でもそれらの対象についての研究を継続しつつ、さらにさまざまなファン文化へと研究対象を広げているところです。近年では、日本だけでなく外国のファン文化との比較研究も行っています。

他方では、スマートフォンやケータイといったメディアの利用実態に関する全国調査、若者文化に関する全国調査や地域間比較調査などの、実証的な調査プロジェクトにも関わることで、社会の全体的な動向に対しても目を光らせてきました。こうした調査からは、一時点だけでなく継続的に行うことで、社会の変化を読み取ることができます。

## 2. メディア論と文化社会学の魅力

さて、私が専門とする、メディア論や文化社会学の面白さは、ごく身近な現象が、いかに社会全体の変化と結びついているのを知ることにあります。いわば「自分」を出発点にして「社会」を理解すること、そこからまた「自分」をより深く理解すること。こうした「視点の往復運動」が、文化の楽しさをさらに奥深く理解させてくれるのです。

こうした研究ができるようになるには、バランス感覚を養うことが重要です。特に大学院生については、文献講読はもとより、フィールドに出向いたり質問紙調査を行ったりと、複数の視点を、バランスよく持てるようになっていただきたいと思います。そして、私とともにそのような研究に専念してくれる方を、いつでもお待ちしております。

## ◆主な論文・著書

- 『メディア社会学』（共編著、辻泉・南田勝也・土橋臣吾編）有斐閣、2018年9月
- 『鉄道少年たちの時代—想像力の社会史』（単著）勁草書房、2018年7月
- 『ファッションで社会学する』（共編著、藤田結子・成実弘至・辻泉編）有斐閣、2017年7月
- 『ケータイの2000年代—成熟するモバイル社会』（共編著、松田美佐、土橋臣吾、辻泉編）東京大学出版会、2014年1月
- 『Fandom Unbound: Otaku Culture in a Connected World』（共編著、Mizuko Ito, Daisuke Okabe and Izumi Tsuji eds）Yale University Press, 2012.

## ◆主な担当科目

文化社会学特講A、文化社会学特講B、文化社会学演習A、文化社会学演習B、社会情報学基礎理論特講A、文化社会学特殊研究A、文化社会学特殊研究B

## ◆メッセージ

メディア論や文化社会学の研究に、私とともに打ち込んでくれる方を、いつでもお待ちしております。またそれ以外にも、私の研究にご関心をお持ちの方がおられましたら、どうぞお気軽にお声がけください。

なお大学院への進学を検討されている方は、出願前に、Eメールなどでその旨、事前にお知らせいただければ大変幸いです。また、リンクの記載のページより、これまでの私の業績や、担当授業の詳細についてもご確認ください。





まつだ みさ  
松田 美佐 / MATSUDA Misa 教授

〉 専門分野

メディア／コミュニケーション論

〉 研究キーワード

うわさ、流言、デマ、都市伝説、フェイクニュース、モバイルメディア、携帯電話、スマートフォン、SNS、人間関係、パーソナル・ネットワーク、移動性、趣味

〉 最終学歴・学位・取得大学

東京大学大学院人文社会系研究科博士課程満期退学

〉 問い合わせ先

misamatsuda33@gmail.com

〉 リンク

[研究者情報データベース](#)

[個人ウェブサイト](#)

◆ 研究内容の紹介

研究関心は大きく三つに分けることができます。

まず、うわさや流言、デマ、都市伝説など、人から人へと口伝えで広がるコミュニケーションに関心があります。これら真偽があいまいな情報が社会問題の原因となることは以前から指摘されていますが、近年ではフェイクニュースや陰謀論が社会の分断を促進するなど、ネットを通じた拡散の影響も注目されています。こういったコミュニケーションを「真偽」「正確さ」といった情報内容だけに着目するのではなく、そのメディア性にも焦点をあて、研究を続けてきました。拙著『うわさとは何か』(岩波新書、2014年)をご一読ください。韓国語版、中国語繁体字体版もあります。

二つ目として、モバイルメディアの利用とその社会的影響についての研究を続けています。ポケベルや携帯電話の普及初期から、人々の利用実態をアンケート調査やインタビュー調査、参与観察などを行い、人間関係や社会に対する影響を考察してきました。2021年度は科研費を得て、2001年、2011年に引き続き、全国でのランダムサンプリングによる質問紙調査を行います(2011年調査については、松田・土橋・辻編『ケータイの2000年代』東大出版会、2014年を参照)。他にも、国際比較調査や特定の集団(若年層、母子ペアなど)に焦点をあてた調査などをおこなっており、最近ではSNS利用の調査にも取り組んでいます。このような調査を踏まえ、メディアと社会の不可分性を明らかにすることで、「メディアが社会を変える」といったメディア決定論ではなく、社会構築主義的な立場から、今後さらに発展するメディア・テクノロジーのある社会について考察します。

三つ目は、移動性(mobility)に対する関心です。今日の社会はグローバルに人やモノ、資本や情報が移動する社会であり、COVID-19の全世界的な流行はその証左です。では、どのような人が、どのようなきっかけで、どのように移動しているのでしょうか。モバイルメディアに対する関心から派生する形で、日本の若者の海外への移動や趣味を通じた移動に関する研究をここ数年行っています。個人の移動が人間関係や社会に及ぼす影響はどのようなもののでしょうか。流動化が進む社会を捉える上で重要なテーマです。

◆ 主な論文・著書

- 「若者のコミュニケーション・メディア利用 2020: Twitter 愛好者と Instagram 愛好者」『紀要 社会学・社会情報学』第32号, pp.143-157. 中央大学文学部 2022年3月
- 「若者のオンラインライブ視聴」『中央大学社会科学研究所年報』第25号, pp.161-180. 中央大学 2021年9月
- “The Importance of Place in the Second-Offline Life: Geographical Differences in Social Media Usage and Online Gaming Behavior.” Tomita, H. (ed.) The Second Offline: Doubling of Time and Place. Springer, pp.161-178, 2021年
- 「『遠征』をめぐる人間関係: Twitter 上で親しくなる過程と社会的場面の切り分けを中心に」『中央大学社会科学研究所年報』第23号, pp.215-232. 中央大学 2019年9月
- 「『遠征』のケーススタディ: 移動を促す趣味・人間関係・スマートフォン」『紀要 社会学・社会情報学』第29号, pp.21-39. 中央大学文学部 2019年3月

◆ 主な担当科目

メディア・コミュニケーション論特講A、メディア・コミュニケーション論特講B、メディア・コミュニケーション論演習A、メディア・コミュニケーション論演習B、社会情報学基礎理論特講A、メディア・コミュニケーション論特殊研究A、メディア・コミュニケーション論特殊研究B

◆ メッセージ

楽しく、さまざまなことに好奇心を持って！

自分の研究テーマを追究する大学院での学びや研究は、ときに孤独な活動となります。しかし、広く現代社会を対象とする社会情報学では、幅広く関心を持ち、さまざまなテーマを自分で調べ、考えてみることも重要です。教員やほかの大学院生とのおしゃべりや議論を通じて、楽しく、幅広く、そして深く、自分の研究テーマを追いかけていきましょう。



やすの さとこ  
安野 智子 / YASUNO Satoko 教授

〉 専門分野

社会心理学、政治心理学、世論調査

〉 研究キーワード

世論、コミュニケーション

〉 最終学歴・学位・取得大学

博士（社会心理学）（東京大学）

〉 問い合わせ先

yasuno●tamacc.chuo-u.ac.jp

〉 リンク

[研究者情報データベース](#)

◆ 研究内容の紹介

「世論」あるいは「民意」とは何でしょうか。私たちが社会や政治について持つ意見は、周囲の人やマスメディア、SNS などだけではなく、「思い込み」や認知的バイアスによる影響も受けています。「社会のため、みんなのため」ということが、個人にとっての圧力にもなります。さまざまな価値観を持つ人が、ともに暮らしていける社会を目指す上で、私たちはどのように「世論」を形成していくべきなのでしょう。社会心理学や社会調査の授業を通して、一緒に考えていきましょう。

◆ 主な論文・著書

- 『民意と社会』中央大学出版部, 安野智子(編)(2016)
- 『重層的な世論形成過程:メディア・ネットワーク・公共性』,東京大学出版会.(2006)
- E. ノエル=ノイマン(著)池田謙一・安野智子(翻訳)『沈黙の螺旋理論:世論形成の社会心理学』(改訂復刻版)北大路書房など.(2013)

◆ 主な担当科目

社会心理学特講A、社会心理学特講B、社会心理学演習A、社会心理学演習B、社会情報学基礎理論特講A、社会心理学特殊研究A、社会心理学特殊研究B

◆ メッセージ

自ら研究を進めるうえで、方法論をしっかり学ぶことが重要だと考えています。世論調査の設計とともに、データ分析にもぜひ取り組んでください。



いけだ けんいち  
池田 賢市 / IKEDA Ken'ichi 教授

〉 専門分野

教育制度・行政学、比較教育学、人権教育

〉 研究キーワード

移民、フランス、人権、インクルージョン

〉 最終学歴・学位・取得大学

博士（教育学）（筑波大学）

〉 問い合わせ先

kiked002y@g.chuo-u.ac.jp

〉 リンク

[研究者情報データベース](#)

◆ 研究内容の紹介

かつては国際化と言われ、現在では社会のグローバル化と言われるようになってずいぶんと経つ。それに対応すべくさまざまな教育活動(多文化教育、異文化理解教育など)も行われてきている。にもかかわらず、人々の多様性は尊重されるどころか、むしろヘイトスピーチをはじめとして世界のさまざまなところで差別や人権侵害が多発している。このことは、人類社会にとって極めて深刻な事態と言わねばならない。

そこで、まずは社会の多文化状況と教育との関係について理解を深めていく必要がある。このような関心に基づき、フランスの移民教育政策について研究を続けてきた。フランスに着目する理由は、古くから移民を多く受け入れてきた文化的に多様な国でありながらも、多文化主義を標榜せず、あくまでも共和国としての文化的統一性を強調することで、1789年の革命以来、人権保障の国として知られているからである。そこには、アメリカやオーストラリアなどをはじめとする英語圏の国々が多文化主義の原理で国や教育を機能させようとしていることとはかなり異なる多文化共存の原理がある。

また、多文化社会は多宗教社会でもある。この点で、フランスではイスラームをめぐる多くの事件が発生している。イスラームの「スカーフ」着用を公立学校では禁止するという法律もつくられた。宗教的中立(非宗教性、フランスでは「ライシテ」と言われる)を守るためには、いっさいの宗教的シンボルを公的空間に入れてはならないという主張である。しかし、教育実践は、子どもたちの生活背景を理解しなければ成り立たないのであるから、この措置は多文化共存の教育の実現にはつながっていかないのではないか。

この「共存」という発想は、今日ではインクルージョンと呼ばれる。日本では障害児教育と同義に使われることが多いが、本来は、さまざまな違いを前提として誰をも排除しない社会(inclusive society)の構築を目指す概念である。性別、人種、民族、宗教、障害はもちろんのこと、貧富の違いや学力の違いなどによっても学ぶ場所を分けていくことを差別として告発し、共に過ごすための工夫をみんなで考えようとする、これがインクルーシブ教育なのである。現在の研究テーマの一つは、このインクルージョンに関するものであり、この概念を支える人権理論の研究を、教育実践の分析も含めながら、また日仏比較をしつつ、進めている。より具体的には、差別問題への教育的対応のあり方、とくに日本においては部落差別問題に焦点を当てている。この関心の延長上で、道徳教育も研究対象としている。なお、そもそも学校教育自体がもつ原理的問題性(個人の権利保障の場であると同時に国策としての教育の場でもある点)についても議論しようとしている。

◆ 主な論文・著書

- 『学校で育むアナキズム』(単著)新泉社、2023年4月
- 『学びの本質を解きほぐす』(単著)新泉社、2021年4月
- 「インクルージョンという教育理念のあり方」『現代フランス教育改革』(共著、フランス教育学会編、第14章)明石書店、2018年1月
- 『「特別の教科 道徳」ってなんだ?』(共著)現代書館、2018年1月
- 「ゆらぐ『共和国』と市民形成一岐路に立つフランスの挑戦」『グローバル時代の市民形成』(共著、北村友人編著、岩波講座教育 変革への展望 7、第7章)岩波書店、2016年10月

◆ 主な担当科目

教育行政学特講、教育行政学演習、教育学総合演習B、教育行政学特殊研究A、教育行政学特殊研究B

◆ メッセージ

安心して学べる環境、子どもたちが「がんばらなくていい」学校を考えていくために、法令や条約等の理解を基盤として制度の全体像を把握し、かつ批判的に検討し、権利保障としての教育制度のあり方を(人々の教育意識の傾向にも注意しつつ)模索していきます。



げ し あきら  
下司 晶 / GESHI Akira 教授

〉 専門分野

教育哲学、教育思想史

〉 研究キーワード

フロイト、精神分析、戦後教育学

〉 最終学歴・学位・取得大学

博士（教育学）（中央大学）

〉 問い合わせ先

gakira001u@g.chuo-u.ac.jp

〉 リンク

[研究者情報データベース](#)

◆ 研究内容の紹介

私は教育哲学・教育思想史を専門としております。

(1) 私の研究の原点は、S・フロイト思想と精神分析理論です。大学受験の際は教員になろうと思って教育学を選んだのですが、高校生の頃から哲学や心理学の本を読むのが好きでした。フロイトや精神分析は、思春期から青年期に抱いた「自分とは何だろう」という問いに答えを出してくれるように思われました。また、私が高校生の頃は「ポストモダン思想」と呼ばれる新しい哲学のブームがありました。高校生の頃はさっぱりわかりませんでした。大学で少しずつ本を読んで多少は理解できたかな、と思います。

大学院では、フロイトとフロイト以後の精神分析理論の展開を「子ども」という観点から研究しました。博士論文は、いわば精神分析＋現代思想といったテーマでした。

現在はフロイト思想の研究によって、これまでの教育理論や人間形成論を問いなおすことができるのではないかと模索しています。

(2) 研究のもう一つの柱は、戦後日本の教育学がどのように展開してきたかです。かつて教育哲学や教育思想史には、教育が目指すべき理念を示すという役割が求められてきました。しかしその役割は、1990年頃を境に大きく変化しています。

かつて教育哲学や教育思想史は、教員養成において必須とされる中心的科目でしたが、現在はそうとはいえません。ではそのような転回がどのように生じたのでしょうか。この過程を問いながら、同時に、「よい」教員になるためには、学校現場のことを知るだけでは足りず、教育哲学や教育思想を学ぶ必要があるのではないかと考えています。

◆ 主な論文・著書

- “Beyond the Trauma Principle in Education: Does Freud’s Concept of “Nachträglichkeit” imply Possibility of “Retroactive Education”?”, E-journal of Philosophy of Education: International Yearbook of the Philosophy of Education Society of Japan, Volume 6, June, 2021.
- 「外傷原則の彼岸——フロイト「事後性」論の教育学的転回」『教育哲学研究』第123号, 2021年5月
- 「教育学のフロイト受容を問いなおす」『近代教育フォーラム』(共著), 2020年9月
- 「「学び続ける教員」を教育学で育てる——中央教育審議会答申「これからの学校教育を担う教員の資質能力の向上について」(2015)の批判的検討」『教育学雑誌』第54号, 2017年12月
- 「教師教育の改革動向をどう受けとめるか」『教育学研究』第85巻第1号, 2018年3月
- 『〈精神分析的子ども〉の誕生——フロイト主義と教育言説』東京大学出版会, 2006年12月
- 『教育思想のポストモダン——戦後教育学を超えて』勁草書房, 2016年12月
- 『教育学年報 第11号』(共編著)世織書房, 2019年9月
- 『教育思想事典 増補改訂版』(共著, 教育思想史学会編)勁草書房, 2017年10月
- 게시 아키라(下司 晶), <포스트모던 교육사상>, 최승현(trans.), 박영스토리, 2020年9月

◆ 主な担当科目

教育哲学特講、教育哲学演習、教育学総合演習A、教育哲学特殊研究A、教育哲学特殊研究B

◆ メッセージ

学校や教育について「何かおかしい」と感じたことはありませんか？ 私は高校まで、学校のあり方にずっと疑問を感じていました。教育哲学・教育思想研究では、そうした違和感を突き詰めて考えることができます。私たちは誰も教育を受けるなかで自己を形成していますから、教育を知ることは、自分を知ることであります。「巨人の肩の上」からは、現在の教育はどのように見えるでしょうか。ぜひ一緒に考えましょう。



たかぎ まさし  
高木 雅史 / TAKAGI Masashi 教授

〉 専門分野

日本教育史、教育社会史

〉 研究キーワード

優生学・優生思想、受胎調節・家族計画、母子保健

〉 最終学歴・学位・取得大学

名古屋大学大学院教育学研究科博士課程（後期）教育学専攻単位取得退学

〉 問い合わせ先

m-takagi.99k@g.chuo-u.ac.jp

〉 リンク

[研究者情報データベース](#)

◆ 研究内容の紹介

個人や家族が子どもを生もうとすることを、「授かる」あるいは「作る」と表現することがあります。今日どちらも使われている表現ですが、子どもの数をコントロールする考え方（受胎調節や家族計画）やそのための技術が普及するにつれて、子どもは神や自然から「授かる」ものというよりも、だんだんと「作る」ものという意識が強くなってきたように思います。この経過は、産業構造の変化や核家族の増大、学校教育の普及といった社会の変容と密接に関わりながら起こったことです。また今日では出生前診断など生殖技術の進展の影響も無視できません。人々が子どもを生み育てていくことに関する制度や意識は、どのように変化してきたのでしょうか。この歴史的様相を明らかにすることが私の研究テーマです。具体的には日本の戦後初期から高度経済成長期を対象に、優生学、家族計画、母子保健をキーワードとして、それらをめぐる動向が、その時代の教育のあり方（特に人々の子ども観や教育観など）にどのような影響を与えていたのかについて調べています。

◆ 主な論文・著書

- 「1960年代から1970年代の農村における出稼ぎ・家族計画・子どもの教育の関係－雑誌『家の光』における「カギっ子」問題を中心に－」『教育学論集』（中央大学教育学研究会）第64集、2022年4月
- 「政府主導の家族計画運動に対する医事評論家・石垣純二による批判－1960年代半ばにおける「生む」（＝受胎調節）と「育てる」（＝教育）を架橋する家族計画論の生成－」『教育学論集』（中央大学教育学研究会）第63集、2021年3月
- 「雑誌『家の光』にみる農村における家族計画普及の様相－1960年代半ばから1970年代半ばまで－」『教育学論集』（中央大学教育学研究会）第62集、2020年3月
- 「1950年代から1960年代前半の農村における家族計画の普及活動－雑誌『家の光』にみる農業協同組合・農協婦人部・家の光協会の関わりを中心に－」『教育学論集』（中央大学教育学研究会）第61集、2019年3月
- 「戦後日本の家族計画運動における受胎調節指導の変容－実地指導員としての助産婦の役割拡大と困難化－」『日本の教育史学』第56集、2013年10月

◆ 主な担当科目

教育史特講、教育史演習、教育学総合演習A、教育史特殊研究A、教育史特殊研究B

◆ メッセージ

研究を志すにあたって、自ら選び取った初発の問題関心は、その後の研究の性格を大きく規定し続けるものです。一方、その問題関心そのまま研究テーマとして成立することは稀で、仮説・実証・結論に至るための研究手法の基本を踏まえた「開かれた問い」にすることが肝要です。今後、発展的に展開していくことができるテーマとなっているかという点に留意しつつ、みなさんの研究を支援したいと考えています。

はまたに かな  
濱谷 佳奈 / HAMATANI Kana 教授

〉 専門分野

教育方法学、カリキュラム論、比較教育学

〉 研究キーワード

ドイツ、多様性、宗教、価値教育

〉 最終学歴・学位・取得大学

博士（教育学）（上智大学）

〉 問い合わせ先

[こちらのフォームよりお問い合わせください。](#)

〉 リンク

[研究者情報データベース](#)

◆ 研究内容の紹介

人々が国境を越えて移動する今日の世界中の国々では、さまざまな宗教や世界観、文化、言語などの相違の調和を図る試みがなされています。異なる宗教・宗派を信仰する人々と、宗教を持たないとされる世俗的な人々とが一緒に暮らす社会では、どのような共通の価値を形成・陶冶していくかが、平和な共存・共生に向けた鍵になると考えられます。とりわけ、学校教育のなかで宗教教育をどう位置づけ、どのように行うのか、また、宗教や世界観など各種の多様性をどう尊重していくのか、これらの問題をどのように解決していくかという方策のあり方が問われています。そこで、この問題について、これまで主にドイツの初等中等教育のカリキュラムと授業実践に注目して、研究を進めてきました。

あわせて、世界の学校現場において学力格差の問題がどのように解決されようとしているのか、という課題にアプローチすることを目的とする研究チームで活動してきました。具体的には、障がいの程度や移民背景、家庭環境等、困難な状況も多様ななかで実施されてきた児童生徒に対するドイツの学校での支援状況と授業を継続的な参与観察から考察し、政策の特徴にも焦点を当てて分析を行いました。

さらに、教員養成課程の学生や現職教員が、自身の教育実践における経験をリフレクションすることによって気づいた実践的な知を、理論枠組みと結びつけることによって学びを深めていく仕組みを教師教育に実際に導入する研究プロジェクトにも携わり、どのようにすれば教師の専門性を向上させることができるのかを模索してきました。

近年は、日本とドイツの双方の学校現場の先生方と共同で、多様性を包摂する授業モデルの構築を目指した研究に取り組んでいます。そこでは、宗教、民族、文化、あるいは移民の背景等の多様性のみならず、一人ひとりの子どもの個性が生きる学習がどのように展開されるかについても考えています。

◆ 主な論文・著書

- 『新道徳教育全集 第2巻 諸外国の道徳教育の動向と展望』（共著、日本道徳教育学会全集編集委員会編、第15章）学文社、2021年
- 『現代ドイツの倫理・道徳教育にみる多様性と連携—中等教育の宗教科と倫理・哲学科との関係史』風間書房、2020年
- 『シリーズ・学力格差4 国際編 世界のしんどい学校—東アジアとヨーロッパにみる学力格差是正の取り組み』（共著、志水宏吉監修、第6章、第13章）明石書店、2019年
- 『世界の教科書シリーズ46 ドイツの道徳教科書—5、6年実践哲学科の価値教育』（監訳）明石書店、2019年
- 「学力格差是正に向けたドイツの取り組み：ノルトライン・ヴェストファーレン州の事例に注目して」『比較教育学研究』第54号、2017年

◆ 主な担当科目

教育方法学特講、教育方法学演習、教育学総合演習B、教育方法学特殊研究A、教育方法学特殊研究B

◆ メッセージ

多様な価値観や考え方が尊重・承認される公正な社会や学校教育の実現に向けて、「あたりまえ」を問い直しながら、教育方法やカリキュラムのあり方について一緒に考えてみませんか。



まなべ りんこ  
眞鍋 倫子 / MANABE Rinko 教授

〉 専門分野

生涯教育論

〉 研究キーワード

ジェンダー、キャリア、職業教育、キャリア教育

〉 最終学歴・学位・取得大学

京都大学修士（教育学）

〉 問い合わせ先

rinko●tamacc.chuo-u.ac.jp

〉 リンク

[研究者情報データベース](#)

◆ 研究内容の紹介

これまで、学校教育と社会に出てからのライフコース(人生)の関係について、主にジェンダーの視点から研究をしてきました。学歴もジェンダーも、社会的な地位に強い影響を与えています。しかし、この二つの関係は、単純ではなく、ジェンダーは学歴達成に影響もしますし、学歴の効果はジェンダーによって異なります。また、学歴の影響は学校卒業後すぐだけではなく、長期的な影響を見ていく必要もあります。これらの点について、実証的にとらえようとしていました。

あわせて、小中学校から高校までの学校経験において、ジェンダーにかかわって生徒たちがどのような経験をしてきたのか、それがどのように進路選択に影響しているのかについての研究チームで活動をしてきました。

近年は、これまであまり教育学の領域で取り上げられてこなかった職業教育、具体的には専門学校についての研究を行っています。専門学校を卒業したことが、その後の職業人生にどのような影響を及ぼしているのかについての研究からはじまり、現在は専門学校の生徒や学生にもアンケートやインタビューを実施して、職業について学ぶことの中で、その仕事に必要な能力がどのようなものとして捉えられ、伝えられ、学ばれているのかについて、専門分野とジェンダーの結びつきなどを踏まえながら研究を進めています。

◆ 主な論文・著書

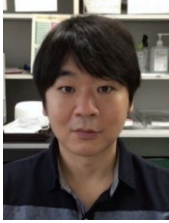
- 「専門学校教育とジェンダー—学校基本調査の分析から—」『教育学論集』62 集、2020 年
- 新谷康浩・眞鍋倫子「教員の職務の無限定性とジョブ型教育改革のねじれ—学級担任の職務の日英比較を中心にして—」『教育デザイン研究』第 4 号、2017 年
- 「女性のキャリアに対する専門学校卒業の効果：就業構造基本調査の分析より」『教育学論集』58 集、2016 年
- 「大学教育とキャリアをつなげること：芸術系の大学へのヒアリングから」『教育学論集』55 集、2013 年
- 「子どもたちの将来像とジェンダー」『教育学論集』50 集、2008 年

◆ 主な担当科目

教育社会学特講、教育社会学演習、教育学総合演習B、教育社会学特殊研究A、教育社会学特殊研究B

◆ メッセージ

大学院では、ただ教えてもらうだけではなく、先行する研究を自分なりに踏まえて、自分の課題を見つけていくことが必要になります。苦しいこともあります、自分で分かった、書けたと思える瞬間はとても素晴らしい瞬間でもあります。自分もそういう瞬間を求めますし、みなさんにもそういう瞬間が訪れることを祈っています。



ありが あつのり  
有賀 敦紀 / ARIGA Atsunori 教授

〉 専門分野

認知心理学

〉 研究キーワード

注意, オブジェクト認知, 社会的認知, 消費者行動

〉 最終学歴・学位・取得大学

博士(心理学)(東京大学)

〉 問い合わせ先

aariga413@g.chuo-u.ac.jp

〉 リンク

[研究者情報データベース](#)

[個人ウェブサイト](#)

◆ 研究内容の紹介

人間の認知行動における顕在的・潜在的プロセスについて、実社会への還元を視野に入れた実験心理学的研究を行っています。主なテーマは以下の3つです。

- (1) **注意, オブジェクト認知**: 時間的・空間的な広がりを持つ環境の中で、人間の目や耳などの感覚器には絶えず膨大な情報が入力されています。しかし、脳の処理能力には限りがあるため、人間は入力されるすべての情報を(意識的に)認識することができません。したがって、脳は行動に必要な情報を効率的に選択し、不必要な情報を排除しなければなりません。日常生活の多くの場面では、この選択・排除が自動的に行われてオブジェクト認知(意識)が成立します。本研究室では、視覚意識の基盤となる、脳における情報の取捨選択過程およびその結果生まれる心的表象について調べています。
- (2) **社会的認知**: 人間の心は環境に対する適応機能としてとらえることができます。そうであれば、個人の認知行動スタイルは、文化や社会規範に応じて柔軟に変容するはずですが。本研究室では、他者の表情・視線の認知、顔の魅力評価など、社会的認知場面における心の働きおよびその柔軟性に注目し、人間の社会性を支える心の基本的メカニズムを多角的に調べています。
- (3) **消費者行動**: 消費者の嗜好や意思決定は人間の認知プロセスそのものです。なんとなく決まっているように感じる人間の「好き」の背景には、様々な知覚的・認知的要因が潜んでいます。本研究室では、消費者の商品選択や魅力評価、購買意思決定などに注目し、現実場面で消費者の行動を規定する様々な要因について、心理学およびマーケティングの視点から検討を行っています。

その他、研究活動ではありませんが、消費者トラブルを心理学および行動経済学の視点から読み解き、その背景にあると考えられる心理プロセスについて講演を行っています。一般市民を対象とした消費者教育も行っています。

◆ 主な論文・著書

- "Romantic bias in judging the attractiveness of faces from the back," *Journal of Nonverbal Behavior*, Vol.45 (2021).
- "The sound-free SMARC effect: The spatial-musical association of response codes using only sound imagery," *Psychonomic Bulletin & Review*, Vol.27 (2020).
- "Spatial-musical association of response codes without sound," *Quarterly Journal of Experimental Psychology*, Vol.72 (2019).
- "Reading habits contribute to the effects of display direction on product choice," *PLOS ONE*, Vol.13 (2018).

◆ 主な担当科目

認知心理学特講Ⅰ、認知心理学特講Ⅱ、認知心理学演習Ⅰ、認知心理学演習Ⅱ、心理学基礎理論Ⅱ、認知心理学特殊研究Ⅰ、認知心理学特殊研究Ⅱ

◆ メッセージ

認知心理学は守備範囲の広い学問であり、多くの分野との接点を持ちます。それは裏を返せば、認知心理学はそれらの分野を結びつけるピースにもなり得るということです。その意味で「多くの可能性を秘めている」という基礎研究ならではの面白さを知ってほしいと思います。





たかせ けんきち  
高瀬 堅吉 / TAKASE Kenkichi 教授

〉 専門分野

発達生物心理学・理論発達心理学・臨床発達心理学

〉 研究キーワード

発達・性差・神経系・内分泌系・免疫系・精神神経疾患

〉 最終学歴・学位・取得大学

博士（行動科学）（筑波大学）

〉 問い合わせ先

[こちらのフォームよりお問い合わせください。](#)

〉 リンク

[研究者情報データベース](#)

◆ 研究内容の紹介

行動異常には特定の発達段階において男性または女性のどちらか一方に多く顕在化するものがあります。例えば、一部の精神神経疾患では罹患率に性差が報告されており、神経性無食欲症は思春期以降に 9 : 1 の割合で女性に多く発症します。一方、自閉症スペクトラム障害は 4 : 1 の割合で男児に多く認められ、その症状は発達の早期に現れます。また、精神神経疾患ではありませんが、様々な行動課題においても性差は認められ、これらは思春期以前に性差が認められるものもあれば、思春期以降に性差が顕在化するものもあります。当研究室では、このような発達の過程に認められる行動異常や正常な行動の性差について研究を行っています。

これらの性差が生じるメカニズムとして、多くの先行研究は、1) 遺伝的性が引き起こす脳の性分化、2) 発達に伴う性腺ステロイドホルモン環境の変化、3) 発達過程に影響を与える養育環境や生活環境を原因に挙げています。このように、発達の過程に認められる行動異常や正常な行動の性差を引き起こす原因は、生物学的な要因から社会的な要因まで多岐にわたります。そのため、これらの性差の原因解明にあたっては多角的かつ系統的視点からのアプローチが必要となり、介入方法も同様に多角的かつ系統的特性を備えたものでなければいけません。当研究室では、特定の発達段階において男性または女性のどちらか一方に多く顕在化する行動異常、または正常な行動の性差の研究に際して、精神科医である Engel が提唱した生物・心理・社会モデルを採用しています。つまり、行動異常、または正常な行動の性差が生じる原因を、生物学的な要因のみに求めるのではなく、心理的要因、社会的要因も含めて総合的に検討を行っています。この生物・心理・社会モデルに基づく研究を通じて、行動異常への介入方法の開発や、正常な行動の性差是正につながる基礎的知見を提供したいと考えています。

このような性差を中心とした研究テーマの他に、当研究室では心理学の学際研究の可能性を広げるべく、様々な分野と共同研究を推進しています。現在までに、哲学、政策科学、麻酔科学等、多様な分野との共同研究を実現しています。

◆ 主な論文・著書

- “Understanding Sensory-Motor Disorders in Autism Spectrum Disorders by Extending Hebbian Theory: Formation of a Rigid-Autonomous Phase Sequence,” *Perspectives on Psychological Science*, Vol.,No. (Nov.2023).
- “Assessments of prolonged effects of desflurane and sevoflurane on motor learning deficits in aged AppNL-G-F/NL-G-F mice,” *Molecular brain*, Vol.15,No.1 (May. 2022).
- “Altered behavior in mice overexpressing soluble ST2,” *Molecular brain*, Vol.13,No.1 (May. 2020).
- “Neonatal isolation augments social dominance by altering actin dynamics in the medial prefrontal cortex,” *Proceedings of the National Academy of Sciences of the United States of America*, Vol.113,No.45 (Oct. 2016).
- “Comprehensive behavioral study and proteomic analyses of CRMP2-deficient mice,” *Genes to cells: devoted to molecular & cellular mechanisms*, Vol.21,No.10 (Oct. 2016).

◆ 主な担当科目

生涯発達心理学特講Ⅰ、生涯発達心理学特講Ⅱ、生涯発達心理学演習Ⅰ、生涯発達心理学演習Ⅱ、心理学基礎理論Ⅱ、生涯発達心理学特殊研究Ⅰ、生涯発達心理学特殊研究Ⅱ

◆ メッセージ

心理学の研究を適切に進めるには理性(科学的思考)と感性のバランスが大切です。ぜひ大学院での学びを通じて、これらの能力を培ってもらえたらと思います。



とみた たくろう  
富田 拓郎 / TOMITA Takuro 教授

〉 専門分野

臨床心理学、トラウマ心理学

〉 研究キーワード

グリーフ、トラウマ、マインドフルネス、コンパッション

〉 最終学歴・学位・取得大学

博士（人間科学）（早稲田大学）

〉 問い合わせ先

tomitat●tamacc.chuo-u.ac.jp

〉 リンク

[研究者情報データベース](#)

◆ 研究内容の紹介

こころの「ケガ」はからだのケガ以上にダメージがあるとよくいわれます。なぜでしょうか？そういうケガを負った人はどうすれば自分の人生をしなやかに生きることができるのでしょうか？

私は人間のこころの「ケガ」についてとても興味があり、これまでにさまざまな研究や臨床を行ってきました。最近、こころのケガから回復して、自分をケアしつつ、しなやかに生きていくためにはどうすればいいのかについて、マインドフルネスやコンパッションを中心とするアプローチを学んでいます。さらに、さまざまなメンタルヘルスの問題に興味をもっています。

公認心理師、臨床心理士を目指す大学院生の方々と一緒に、研究を楽しく、科学的視点と臨床的視点から多彩に取り上げていきたいと思っています。これまでの大学院生のテーマは多岐にわたり、さまざまな研究活動をしてきました。個人的に興味のあるテーマは下記の通りです。

- 1) トラウマ、グリーフに関わるさまざまな臨床課題、健康課題の解明
- 2) マインドフルネス、セルフ・コンパッションの健康におよぼす影響に関わる実証的研究、ならびに臨床とセルフ・ケアへの応用の展開
- 3) 特に思春期から青年期の学校臨床に関わるさまざまな臨床課題の解明
- 4) アディクションに関わるさまざまな課題の検討と解明

修士・博士の論文指導を希望される方、学振PD等の受入に関するお問い合わせ、研修講師（例：セルフ・コンパッション）のご依頼、メディア取材は随時受け付けております。はじめに富田の [researchmap \(https://researchmap.jp/tomitatakuro\)](https://researchmap.jp/tomitatakuro) の基本情報を必ずお読み頂いた上で、お問い合わせください。

専門：学校臨床心理学、臨床心理学、トラウマ心理学、グリーフ研究、マインドフルネス、セルフ・コンパッション

資格：臨床心理士、公認心理師、Mindful Self-Compassion®(MSC) 講師(Trained Teacher)、TFT 診断レベルセラピスト、他  
テレビ出演：「いじめをノックアウト」(NHK E テレ) など

大学院修了生の進路実績：松蔭大学講師、国立精神・神経医療研究センター認知行動療法センター研究補助員、東京都健康長寿医療研究センター研究所非常勤研究員 等

マインドフルネスとコンパッションの教育研修・講師歴：[researchmap \(https://researchmap.jp/tomitatakuro\)](https://researchmap.jp/tomitatakuro) を参照のこと

◆ 主な論文・著書

- 『マインドフル・セルフ・コンパッション プラクティスガイド』(監訳)、星和書店、2022 年。
  - 『マインドフル・セルフ・コンパッション ワークブック』(監訳)、星和書店、2019 年。
  - 「マインドフル・セルフ・コンパッション(MSC)とは何か：展望と課題」『心理学評論』、64(3)、2021 年。
  - 「流産・死産を経験した人のグリーフとグリーフケア ―システムティックレビューとメタ解析の概括的展望―」『精神科治療学』、2020 年。
- (他は研究者情報データベース、[researchmap \(https://researchmap.jp/tomitatakuro\)](https://researchmap.jp/tomitatakuro) を参照のこと)

◆ 主な担当科目

学校カウンセリング演習(教育分野に関する理論と支援の展開)、学校臨床心理学特殊研究Ⅰ、学校臨床心理学特殊研究Ⅱ、教育方法学特殊研究A、教育方法学特殊研究B、心理学基礎理論Ⅰ、臨床心理査定演習Ⅱ、臨床心理実習A(心理実践実習)、臨床心理実習B

◆ メッセージ

意欲があり、向学心に満ちた方、ご興味のある方は是非ご連絡ください！



なかむら な な こ  
中村 菜々子 / NAKAMURA-TAIRA Nanako 教授

〉 専門分野

臨床心理学、健康心理学、コミュニティ心理学、行動医学

〉 研究キーワード

行動変容、ストレス・マネジメント、心の健康教育、援助要請、予防行動

〉 最終学歴・学位・取得大学

博士（人間科学）（早稲田大学）、博士（医学）（埼玉医科大学）

〉 問い合わせ先

nanako●tamacc.chuo-u.ac.jp

〉 リンク

[研究者情報データベース](#)

◆ 研究内容の紹介

1. 「ストレスはなぜ続くのか、どのようにつきあっていくのか」「自分で自分の心身健康をどうやって保とうとしているのか」に関する心理学・行動科学に基本的な関心を持っています。

心の健康を維持する心理的メカニズムについては、ストレス・マネジメント、心の健康教育、メンタルヘルスに関する援助要請行動（メンタルヘルス不調に気づき、専門家に相談する行動）などのテーマで研究と実践活動を行なっています。

身体を健康を維持する心理的メカニズムについては、慢性疾患のセルフケアにおける行動変容というテーマで研究と臨床活動を行なっています。行動科学理論・行動変容技術を用いた行動変容は、クライアントの個別支援から社会改善まで広く応用できるアプローチだと考えています。以下の記事もご参照ください。<https://yab.yomiuri.co.jp/adv/chuo/research/20200827.php>

臨床活動では公認心理師・臨床心理士として、主に認知行動療法を用いたカウンセリングに携わっています。

2. また「心理的支援で行なわれていることの可視化」にも取り組んでいます。「専門家としての心理職の技術を言語化し系統立てること」「心理療法や医療面接で、言語的・非言語的に生じている現象の測定」「共感・納得という主観的な感覚を客観指標で説明する試み」について、領域横断的なチームで取り組んでいます。

◆ 主な論文・著書

- 「Resistance exercise for hemodialysis patients on depression and cognitive function: A 12-month follow-up」, 『Health Psychology and Behavioral Medicine』 第9巻, 2021年8月
- 「Stress underestimation and mental health literacy of depression in Japanese workers: A cross-sectional study」, 『Psychiatry Research』 第262巻, 2018年4月
- 『その心理臨床、大丈夫？心理臨床実践のポイント』（共編著：遠藤裕乃・佐田久真貴・中村菜々子）日本評論社, 2018年9月

◆ 主な担当科目

心理学基礎理論Ⅰ、臨床心理学特論Ⅱ、臨床心理面接特論Ⅱ、臨床心理基礎実習Ⅰ、臨床心理実習A（心理実践実習）、臨床心理実習B、心の健康教育に関する理論と実践、臨床・健康心理学特殊研究Ⅰ、臨床・健康心理学特殊研究Ⅱ

◆ メッセージ

現実社会から研究テーマを発見し科学的な方法論で論文を作成する経験を通じて、科学的な問題解決スキルを身につけましょ



みどりかわ あきら

## 緑川 晶 / MIDORIKAWA Akira 教授

### 〉 専門分野

臨床神経心理学

### 〉 研究キーワード

高次脳機能障害、認知症、発達障害、脳機能亢進

### 〉 最終学歴・学位・取得大学

博士（教育学）（中央大学）

### 〉 問い合わせ先

green●tamacc.chuo-u.ac.jp

### 〉 リンク

[研究者情報データベース](#)
[中央大学 緑川研究室（神経心理学研究室）](#)

### ◆ 研究内容の紹介

私が専門としている臨床神経心理学は、脳と心の関係を明らかにし、それを患者さんや家族に活かし、さらには多くの人にとってもらうことで、お互いが生活しやすい環境を作ることを目指しています。病気やケガで脳が障害されると、体が動かなくなったり、うまく話せなくなったりしますが、周囲が気づかない形で（本人も気づいていないこともあります）、記憶や思考、あるいは感情や意欲の問題が生じることがあります。しかし、動きや会話がスムーズでないことは周囲に理解されやすいですが、記憶や思考の問題は周囲には伝わりにくく、怒りっぽくなったり、やる気を出さなかったりしても、本人の努力や人格の問題と思われる事があります。近年では「高次脳機能障害」として知られるようになってきましたが、それでも十分には理解されていません。

心理学は大きく分けて、基礎心理学と臨床心理学の分野に分けられることがあります。基礎心理学は実験や調査を通じて人の心の法則性を明らかにしようとする立場であり、一方の臨床心理学は心に困難がある方の支援を行う立場になります。基礎心理学を背景とする人々は、大学や企業、あるいは研究所などに所属するため、会うことは少ないかもしれませんが。一方で、臨床心理学を背景とする人々は、病院やクリニックの心理士、あるいは中学や高校のスクールカウンセラーも含まれるため、人々に接する機会も多く、一般の人々が持つ心理学のイメージに近いかもしれません。しかし、基礎的な心理学で得られた知見は、多くの人々に役立てられていますし、私たちが使う製品にも活かされていたりします。中央大学の文学部や大学院にも両方の立場の教員が揃っており、それぞれの立場から研究・教育をしていますが、私が専門とする臨床神経心理学は両者の接点にあたる領域になります。たとえば次のような例から、その役割を見ることが出来ます。

私たちには左右対称の二つの大脳半球がありますが、その間は脳梁と呼ばれる太い神経の束で繋がれています。この脳梁が病気やケガで傷つくと、本人には気づきにくい形で認識の問題が生じることがあります。そのような問題を明らかにするためには、実験心理学的な手法が役に立つことがあります。

一方で、脳に障害がある方々の中には、今までとは異なった人生を歩むこととなり、その事が本人や家族、あるいは関わりがある人々を苦しめることにもなります。そのような本人や家族を支えたり、周囲の方々との調整を図ることが臨床神経心理学のもう一つの大事な役目となります。

臨床神経心理学は、基礎と臨床の両方を学んだ上で、臨床の現場や研究においても活躍することができる領域です。なお、神経心理学の代表的な学会である日本神経心理学学会や日本高次脳機能障害学会では「臨床神経心理士」という資格の準備を進めており、臨床神経心理学は今後も活躍が期待される領域です。

### ◆ 主な論文・著書

- Ochi, R., Saito, S., Hiromitsu, K., Shigemune, Y., Shinoura, N., Yamada, R., & Midorikawa, A. (2022). Sensory hypo- and hypersensitivity in patients with brain tumors. *Brain Injury*, 36(8), 1053-1058. <https://doi.org/10.1080/02699052.2022.2110943>
- 越智隆太, 浜本加奈子, & 緑川晶. (2022). 在宅介護者の心理的負担感と心理的支援ニーズ— 高次脳機能障害と認知症との比較—. *高次脳機能研究 (旧 失語症研究)*, 42(3), 374-381. <https://doi.org/10.2496/hbfr.42.374>
- Hiromitsu, K., Shinoura, N., Yamada, R., & Midorikawa, A. (2020). Dissociation of the subjective and objective bodies: Out-of-body experiences following the development of a posterior cingulate lesion. *Journal of neuropsychology*, 14(1), 183-192. <https://doi.org/10.1111/jnp.12199>
- 語られないことへの理解 — 認知症の残存機能. *学術の動向*, 24(5), 44-51. (2019). <https://doi.org/10.5363/tits.24.5.44>
- Midorikawa, A., Leyton, C. E., Foxe, D., Landin-Romero, R., Hodges, J. R., & Piguet, O. (2016). All is not lost: Positive behaviors in Alzheimer's disease and behavioral-variant frontotemporal dementia with disease severity. *Journal of Alzheimer's disease*, 54(2), 549-558. <https://doi.org/10.3233/JAD-160440>

### ◆ 主な担当科目

臨床神経心理学特講Ⅰ、臨床神経心理学特講Ⅱ、臨床神経心理学演習Ⅰ、臨床神経心理学演習Ⅱ、臨床心理実習A(心理実践実習)、臨床心理実習B、神経心理学特殊研究Ⅰ、神経心理学特殊研究Ⅱ



やまぐち まさみ  
山口 真美 / Masami K. YAMAGUCHI 教授

〉 専門分野

実験心理学

〉 研究キーワード

知覚、認知、顔認知、発達

〉 最終学歴・学位・取得大学

博士（人文科学）（お茶の水女子大学）

〉 問い合わせ先

J\_yamalab-grp@g.chuo-u.ac.jp

〉 リンク

[研究者情報データベース、研究室ホームページ](#)

[日本科学未来館プロジェクトホームページ](#)

◆ 研究内容の紹介

赤ちゃんは大人とは全く異なる世界に生きています。その世界を、実験的に解明することが研究テーマです。たとえば当たり前のように世界が安定して見える「恒常性」を持たないこと、赤ちゃんは老人と同じように視野の周辺部分を見る抑制が低いこと。その一方でこれまで言葉を獲得することによって分けられていた色世界である赤青緑といった「色カテゴリー」が、言語獲得以前に獲得されることも脳活動から示すことができました。これらの研究は海外のトップジャーナルに掲載され、海外のニュースサイトでも多く報道されてきた成果です。

視覚を司る脳が発達していく1歳以下の赤ちゃんは、大人とは全く異なる世界を見ているのです。そこから私達大人の世界の見方を知ることができます。また、これまで科学的知見に基づくことなく、主にお母さんの好みで作られてきた赤ちゃん向けの玩具、1歳以下と2～3歳では劇的な見方の違いがあるにもかかわらず同じ年齢区分で売られていた赤ちゃん向け絵本、そんな商品のあり方を提言する活動につながっています。また、発達障害の子ども達の見方、日本で多く産まれる早産児の発達について、小児医療の先生方と一緒に研究をすすめています。

日本科学未来館で子ども実験もしています。

研究室のホームページ: <https://ymasa.r.chuo-u.ac.jp/index.php>

日本科学未来館プロジェクトのホームページ: <https://www.miraikan.jst.go.jp/research/facilities/WonderfulWorldChildren/>

◆ 主な論文・著書

- Tsurumi, S., Kanazawa, S., & Yamaguchi, M. K. (2024). Infants' visual perception without feature-binding. *Proceedings of the Royal Society B*, 290(2012), 20232134.
- Nakashima, Y., Kanazawa, S., & Yamaguchi, M. K. (2024). Metacontrast masking is ineffective in the first 6 months of life. *Cognition*, 242, 105666.
- Yang, J., Ganea, N., Kanazawa, S., Yamaguchi, M. K., Bhattacharya, J., & Bremner, A. J. (2023). Cortical signatures of visual body representation develop in human infancy. *Scientific Reports*, 13, 14696.
- Nakashima, Y., Kanazawa, S., & Yamaguchi, M. K. (2021). Perception of invisible masked objects in early infancy. *Proceedings of the National Academy of Sciences of the United States of America*, 118, e2103040118.
- Tsurumi, S., Kanazawa, S., Yamaguchi, M. K., & Kawahara, J. (2021). Attentional blink in preverbal infants. *Cognition*, 214, 104749.
- Nakashima, Y., Yamaguchi, M. K., & Kanazawa, S. (2019). Development of center-surround suppression in infant motion processing. *Current Biology*, 29, 3059-3064.
- Geangu, E., Ichikawa, H., Lao, J., Kanazawa, S., Yamaguchi, M. K., & Caldara R., Turati, C. (2016). Culture shapes 7-month-olds' perceptual strategies in discriminating facial expressions of emotion *Current Biology*, 26 (14). R663-R664.
- Yang, J., Kanazawa, S., Yamaguchi, M.K., & Kuriki, I. (2016). Cortical response to categorical color perception in infants investigated by near-infrared spectroscopy. *Proceedings of the National Academy of Sciences of the United States of America*. 113(9), 2370-2375.
- Yang, J., Kanazawa, S., Yamaguchi, M.K., & Motoyoshi, I. (2015). Pre-constancy vision in infants, *Current Biology*. 25(24), 3209-3212.
- 顔身体学ハンドブック(2021)河野哲也・山口真美・金沢創・渡邊克巳・田中章浩・床呂郁哉・高橋康介編、東京大学出版会
- 「こころと身体の心理学」岩波ジュニア新書、(2020)
- 「自分の顔が好きですか?—「顔」の心理学」岩波ジュニア新書、(2016)
- 「発達障害の素顔 脳の発達と視覚形成からのアプローチ」講談社ブルーバックス、(2016)

◆ 主な担当科目

心理学基礎理論Ⅱ、文化・認知心理学特講Ⅰ、文化・認知心理学特講Ⅱ、文化・認知心理学演習Ⅰ、文化・認知心理学演習Ⅱ、文化・認知心理学特殊研究Ⅰ、文化・認知心理学特殊研究Ⅱ

やましな みつる

## 山科 満 / YAMASHINA Mitsuru 教授



〉 専門分野

精神医学、臨床心理学

〉 研究キーワード

津波被災者の心理、ひきこもり、発達障害特性 大学生

〉 最終学歴・学位・取得大学

新潟大学医学部卒業、医学博士（順天堂大学）

〉 問い合わせ先

m-yama●tamacc.chuo-u.ac.jp

〉 リンク

[研究者情報データベース](#)

### ◆研究内容の紹介

東日本大震災の津波被災者の心理を、2011年3月から継続して調査しています。私はボランティアの精神科医として現地に赴き、地元の自治体関係者と連携して被災者の支援に携わりながら、一部の被災者の面談を今日まで継続しています。支援としては時間をかけてじっくりとお話を聴き、継続して通いつづけることが何より大事なのですが、研究としては語りの分析をする学問的な視点が必要です。これまで、震災を機に精神科病院に入院になった人の診断に関する調査、現地で活動した保健師の「心的外傷後成長」に関する調査、気質・性格論に立脚した被災者の心理過程についての研究論文をまとめました。このような、支援と研究が一体になった活動は今後も長く継続するつもりでいます。

ひきこもりの支援と研究活動も、同じ地域で継続しています。津波被災者への支援を行っていて分かったのですが、震災以前から現地の精神保健関係者が一番困難に感じていたのが、ひきこもりの人に対する支援でした。それは震災後も変わりありませんでした。そのため、被災者の支援の傍ら、現地の関係者と一緒にひきこもりの人がいる家庭を訪問する活動を続けながら、得られた知見を少しずつ学会などで発表している段階です。

もう一つの研究の柱が、発達障害のある大学生への支援です。これも、被災地でのひきこもり支援活動が原点となっています。ひきこもっている人の中には、大学を中退して地元に戻り、そのまま長期のひきこもり生活に移行したという人がいました。生きにくさ（それは発達障害特性ばかりとは限りませんが）を抱えている大学生を、どのように支援すれば、社会の中で人との繋がり（すなわち居場所）を獲得できるようになるのか、当事者と手探りで関わりながら、見いだそうとしています。当然ながら、この研究は私1人で出来ることではありません。大学全体の中で少しずつ支援システムを整え、志を共にする人を増やし、ゆつくりと前に進んでいるところです。

私の研究は、精神科医・臨床心理士として、目の前にある事象を出発点として、実際に当事者に関与し支援を行いながら、有効な支援策とその背後にある理論を見いだしていくという、支援と調査が一体となった方法を一貫して採用しています。それが、臨床研究の基本であると同時に、社会貢献に繋がる研究でも考えています。

### ◆主な論文・著書

- 山科満編著：「キャンパスにおける発達障害学生支援の新たな展開」中央大学出版会，2022.
- 山科満：「東日本大震災被災者の心的状況と回復過程：気質の異なる2例の対比を通して」『臨床精神病理』40（2），pp. 137-147，2019.
- 酒井美緒・山科満：「東日本大震災における保健師の心理的過程」『保健師ジャーナル』73（2），pp. 156 - 161，2017.
- 山科満・長岡重之・大塚耕太郎：「過疎地域におけるひきこもり者に対するアウトリーチ活動一転帰に影響する精神医学的要因について」日本精神神経学会第113回学術総会，2020.

### ◆主な担当科目

心理学基礎理論Ⅰ、臨床心理学特論Ⅰ、臨床心理面接特論Ⅰ（心理支援に関する理論と実践）、臨床心理基礎実習Ⅱ、臨床心理実習A（心理実践実習）、臨床心理実習B、臨床心理地域援助特講、精神医学特殊研究Ⅰ、精神医学特殊研究Ⅱ

## 尹 智鉉 / YOON Jihyun



〉 専門分野

応用言語学・日本語教育学

〉 研究キーワード

アカデミック・ジャパニーズ、遠隔教育、イーラーニング、異文化コミュニケーション

〉 最終学歴・学位・取得大学

博士（早稲田大学）

〉 問い合わせ先

jyoon444●g.chuo-u.ac.jp

〉 リンク

中央大学アカデミック・サポートセンター ライティング・ラボ

[https://www.chuo-u.ac.jp/campuslife/learning\\_space/writinglab/](https://www.chuo-u.ac.jp/campuslife/learning_space/writinglab/)

### ◆研究内容の紹介

これまで、主に遠隔ビデオ会議システムを用いた言語習得促進の学習デザインについて検証を重ねてきました。代表的な研究テーマは「Educational and Inter-cultural Communication and Technology」です。日本語教育・第二言語習得に軸足を置きながら、さらに学際的研究として対人コミュニケーションおよびインターアクションにおける日本語の発話行為(speech act)について、参加者の学びと成長、社会と文化等といった多様な観点から分析、考察してきました。

まず、「言語的側面」に関する研究では、日本語の母語話者と非母語話者の参加者がビデオ会議システムを使ってコミュニケーションする際に、どのような相互作用の特徴が見られるのかについて、遠隔と対面の接触場面会話を録音し、異文化間の談話(inter-cultural discourse)における発話行為(speech act)を比較、検証しました。コミュニケーション問題(communication breakdown)に対処する方略(strategy)や調整軌道(negotiation)、あいづち(back-channeling)、発話交替(turn-taking)などの観点を取り上げ、分析しています。

そして、「社会言語的側面」および「社会文化的側面」に関する研究では、「異なる母語と文化の背景を持つ参加者同士が、各自の価値観や経験に基づいてことばのやり取りを行い、仮想空間(virtual space)上に共有の場を創っていくことばの共同体(speech community)」の可能性に注目しています。特に興味を持っているテーマは、情報通信技術(ICT)を利用することで、世界規模のネットワークを相互の学びと成長の場として活用することの可能性と有効性に関するものです。ネットワークを介して物理的制約を越え、多様な人々が出会い、コミュニケーションをしながら、言葉と文化を学びあうことができます。その参加経験および活動から、どのような自己／他者／社会への認識の変容が起こり得るか、参加者の学びと成長について考察しています。

### ◆主な論文・著書

- 「第二言語習得におけるグリット研究の現状と課題:L2 学習者の個人差要因として何がわかるか」『第二言語としての日本語の習得研究』26、2023年。
- 「EdTech の利活用から考える学習者オートノミーとエンゲージメント:TPACK の枠組みに基づいて」『第34回第二言語習得研究会(JASLA)全国大会予稿集』2023年。
- 「第7章 オンライン日本語教育を担う人材育成」、大学日本語教員養成課程研究協議会(編)『社会を築くことばの教育:日本語教員養成のこれまでの30年、これからの30年』ココ出版、2023年。

### ◆主な担当科目

特殊講義(アカデミック・ライティングの方法と実践)、特殊講義(アカデミック・ライティングの方法と実践)、特殊講義(アカデミック・ライティングの方法と実践)、特殊講義(アカデミック・ライティングの方法と実践)

### ◆メッセージ

大学院で担当しているのは、アカデミック・ライティングの科目です(前期・夏季集中・後期)。また、中央大学アカデミック・サポートセンターのアカデミック・ライティング部門長として、学生一人一人が自律した書き手として成長していけるよう、さまざまな教育・支援の活動を行っています。これらの活動が、みなさんにとって実り多き大学生活の一助になればと願っています。

# 兼任・兼任教員

※兼任・兼任・客員教員等は、指導教授に希望できません。

国文学専攻				
氏名	身分	現職(所属)	専門分野	担当科目
池田 幸恵(いけだ ゆきえ)	特任教授(文学部)	中央大学文学部特任教授	国語学、国語史	国語史研究、B国文法
高橋 明彦(たかはし あきひこ)	兼任講師	金沢美術工芸大学美術工芸学部教授	日本近世文学 マンガ研究	マンガ論
野中 潤(のなか じゆん)	兼任講師	都留文科大学文学部教授	日本近代文学、国語教育学	国語科教育研究A、国語科教育研究B
堀川 貴司(ほりかわ たかし)	兼任講師	慶應義塾大学附属研究所斯道文庫教授	日本漢文学・和漢書誌学	書誌学
松村 真佐子(まつむら まさこ)	兼任講師	公益財団法人平木浮世絵財団学芸員	美術史(浮世絵)	浮世絵学
山中 剛史(やまなか たけし)	兼任講師	日本大学芸術学部非常勤講師	近代文学	映像文化史

英文学専攻				
氏名	身分	現職(所属)	専門分野	担当科目
福田 純也(ふくだ じゆんや)	准教授(理工学部)	中央大学理工学部准教授	言語習得・心理言語学	英語教育研究 I A
矢野 雅貴(やの まさたか)	兼任講師	東京都立大学准教授	心理言語学・言語認知神経科学	英語学研究(心理言語学)A、英語学研究(心理言語学)B

独文学専攻				
氏名	身分	現職(所属)	専門分野	担当科目
Maria Gabriela Schmidt (シュミット マリア ガブリエラ)	兼任講師	日本大学文理学部 ドイツ文学科 教授	言語学、比較言語学、ドイツ語教授法	学術ドイツ語・研究法演習A、学術ドイツ語・研究法演習B

仏文学専攻				
氏名	身分	現職(所属)	専門分野	担当科目
望月 典子(もちづき のりこ)	兼任講師	慶應義塾大学文学部教授	西洋美術史、フランス近世美術	フランス近代美術史演習 A、フランス近代美術史演習 B、フランス近代美術史特殊研究 A、フランス近代美術史特殊研究 B

中国言語文化専攻				
氏名	身分	現職(所属)	専門分野	担当科目
遠藤 雅裕(えんどう まさひろ)	教授(法学部)	中央大学法学部教授	中国語学 客家語 南方漢語	中国語語彙論演習A、中国語語彙論演習B
李 佳梁(リ カリョウ)	兼任講師	東京大学大学院総合文化研究科准教授	現代中国語文法論	中国語表現演習A、中国語表現演習B、中国語学特殊研究 II A、中国語学特殊研究 II B

日本史学専攻				
氏名	身分	現職(所属)	専門分野	担当科目
大西 信行(おおいし のぶゆき)	特任教授(文学部)	中央大学文学部特任教授	日明関係史、歴史教育	歴史教育研究 II
榎本 淳一(えのもと じゆんいち)	兼任講師	大正大学待遇教授	日本古代史	日本古代史演習 III A、日本古代史演習 III B、日本史学特殊研究 I A、日本史学特殊研究 I B
榎原 雅治(えはら まさはる)	兼任講師	東京大学名誉教授	日本中世史	日本中世史演習 II A、日本中世史演習 II B、日本史学特殊研究 II A、日本史学特殊研究 II B
落合 功(おちあい こう)	兼任講師	青山学院大学経済学部 教授	日本社会経済史、日本近世近代史	日本近世史演習 I A、日本近世史演習 I B、日本近世史特殊研究A、日本近世史特殊研究B
加藤 聖文(かとう きよふみ)	兼任講師	駒沢大学文学部教授	日本近現代史	日本政治史演習 III A、日本政治史演習 III B、日本政治史特殊研究 II A、日本政治史特殊研究 II B
櫻井 準也(さくらい じゆんや)	兼任講師	尚美学園大学総合政策学部教授	日本考古学	考古学研究A、考古学研究B
佐々木 憲一(ささき けんいち)	兼任講師	明治大学文学部教授	古墳時代の考古学	日本古代史演習 II B、日本古代史特殊研究B
藤實 久美子(ふじざね くみこ)	兼任講師	人間文化研究機構国文学研究資料館教授	日本近世史 書籍史料研究	日本政治史演習 II A、日本政治史演習 II B
福嶋 紀子(ふくしま のりこ)	兼任講師	松本大学 基礎教育センター 専門員	日本中近世社会経済史、農業史、アーカイブズ学	地域アーカイブズ論
村上 裕章(むらかみ ひろあき)	兼任講師	成城大学法学部教授	行政法、情報法	アーカイブズ法制論
渡辺 浩一(わたなべ こういち)	兼任講師	人間文化研究機構国文学研究資料館	日本近世史	日本近世史演習 II A、日本近世史演習 II B、日本史学特殊研究 II A、日本史学特殊研究 II B

西洋史学専攻				
氏名	身分	現職(所属)	専門分野	担当科目
松岡 昌和(まつおか まさかず)	兼任講師	大月短期大学准教授	東南アジア史、メディア史	歴史教育研究 I
山田 雅道(やまだ まさみち)	兼任講師	-	アッシリア学	西洋古代史演習 III A、西洋古代史演習 III B



# 兼任・兼任教員

※兼任・兼任・客員教員等は、指導教授に希望できません。

哲学専攻				
氏名	身分	現職(所属)	専門分野	担当科目
寺本 剛(てらもと つよし)	教授(理工学部)	中央大学理工学部教授	哲学・倫理学	西洋近代哲学研究ⅠA、西洋近代哲学研究ⅠB、西洋近代哲学研究ⅡA、西洋近代哲学研究ⅡB、西洋近代哲学特殊研究A、西洋近代哲学特殊研究B
伊佐敷 隆弘(いさしき たかひろ)	兼任講師	日本大学経済学部特任教授	哲学	科学哲学A、科学哲学B、科学哲学特殊研究A、科学哲学特殊研究B
日野 慧運(ひの えうん)	兼任講師	武蔵野大学准教授	仏教学	日本倫理思想研究ⅠA、日本倫理思想研究ⅠB、日本倫理思想研究ⅡA、日本倫理思想研究ⅡB

社会学専攻				
氏名	身分	現職(所属)	専門分野	担当科目
高山 真(たかやま まこと)	兼任講師	立教大学社会学部助教	社会学	質的社会調査特講、社会学ライティング特講、文献講読特講A、文献講読特講B、文献講読特殊研究A、文献講読特殊研究B
前田 悟志(まえだ さとし)	兼任講師	東京都立大学人文科学研究科非常勤講師・客員研究員	社会学	量的社会調査特講

社会情報学専攻				
氏名	身分	現職(所属)	専門分野	担当科目
尾崎 知伸(おさき とものぶ)	兼任講師	日本大学文理学部教授	データマイニング・知能情報学	情報科学特講A、情報科学特講B、情報科学特殊研究A、情報科学特殊研究B
諸橋 泰樹(もろはし たいき)	兼任講師	フェリス学院大学教授	マスコミュニケーション学・社会学・女性学	コミュニケーション論特講A、コミュニケーション論特講B、コミュニケーション論特殊研究A、コミュニケーション論特殊研究B
李 東真(リ トンジン)	兼任講師	国立研究開発法人科学技術振興機構	図書館情報学、アーカイブ学、フィルムアーカイブ	記録管理学特講A、記録管理学特講B

教育学専攻				
氏名	身分	現職(所属)	専門分野	担当科目
青柳 宏幸(あおやぎ ひろゆき)	兼任講師	日本体育大学体育学部准教授	教育思想史・教育哲学	教育思想史特講Ⅰ、教育思想史特講Ⅱ
大森 直樹(おおもり なおき)	兼任講師	東京学芸大学現職教員支援センター機構教授	教育史 教育学	教育調査法特講Ⅱ
虎岩 朋加(らいわ ともか)	兼任講師	相山女学院大学人間関係学部教授	教育哲学、フェミニスト・ペダゴジー	教育学研究特講Ⅰ、教育学特殊研究Ⅰ
星野 真澄(ほしの ますみ)	兼任講師	明治学院大学文学部専任講師	教育制度、教育行財政、アメリカの教育	学校教育学特講Ⅰ、学校教育学特講Ⅱ
森 一平(もり いっぺい)	兼任講師	帝京大学教育学部准教授	エスノメソドロジー・会話分析、授業研究、教育社会学、教育方法学	教育調査法特講Ⅰ

心理学専攻				
氏名	身分	現職(所属)	専門分野	担当科目
石川 健太(いしかわ けんた)	兼任講師	専修大学人間科学部助教	臨床心理学、認知心理学	臨床心理査定演習Ⅰ
遠藤 幸彦(えんどう ゆきひこ)	兼任講師	創価大学教育学部教授	精神分析的精神療法、思春期青年期精神医学	臨床心理基礎実習Ⅰ、臨床心理基礎実習Ⅱ
大宮 宗一郎(おおみや そういちろう)	兼任講師	上越教育大学大学院 臨床・健康教育学系 講師	犯罪心理学	犯罪心理学特講(司法・犯罪分野に関する理論と支援の展開)
金沢 創(かなざわ そう)	兼任講師	日本女子大学 人間社会学部教授	実験心理学	心理学情報処理演習、心理学研究法特講
笹尾 敏明(ささお としあき)	兼任講師	国際基督教大学教養学部 教授	コミュニティ心理学、教育学、平和研究	COMMUNITY PSYCHOLOGY ACADEMIC WRITING AND PRESENTATION SKILLS IN PSYCHOLOGY
四ノ宮 美恵子(しのみや みえこ)	兼任講師	東京リハビリテーションセンター世田谷障害者支援施設梅ヶ丘アドバイザー兼サービス管理責任者	福祉心理学、臨床神経心理学	神経心理学特講(保健医療分野に関する理論と支援の展開)
波井 進(しぶい すずむ)	兼任講師	大学改革支援・学位授与機構研究開発部教授	認知心理学	心理統計法特講
荘島 宏二郎(しょうじま こうじろう)	兼任講師	大学入試センター研究開発部教授	心理統計学・多変量解析	心理学特殊講義Ⅱ
高野 公輔(たかの こうすけ)	兼任講師	明治学院大学心理学部心理学科 専任講師	臨床心理学	心理的アセスメントに関する理論と実践
高橋 康介(たかはし こうすけ)	兼任講師	立命館大学総合心理学部	知覚心理学、認知心理学	心理学特殊講義Ⅰ
千田 若菜(ちだ わかな)	兼任講師	医療法人社団ながやまメンタルクリニック	就労支援、臨床心理	臨床心理実習A(心理実践実習)、臨床心理実習B、産業・労働分野に関する理論と支援の展開
徳丸 享(とくまる あきら)	兼任講師	立正大学心理学部	臨床心理学	臨床心理実習B、家族関係・集団・地域社会における心理支援に関する理論と実践
中根 千景(なかね ちかげ)	兼任講師	南新宿カウンセリングオフィス	臨床心理学、分析心理学	臨床心理基礎実習Ⅱ
長谷川 恵美子(はせがわ えみこ)	兼任講師	聖学院大学心理福祉学部心理福祉学科教授	臨床心理学 医療心理学 健康教育学	臨床心理基礎実習Ⅰ、臨床心理基礎実習Ⅱ
水島 栄(みずしま さかえ)	兼任講師	北里大学大学院 医療系研究科 発達精神医学教授	発達心理学、児童虐待・Matreatment、トラウマ治療、子育て支援、臨床心理学	心理療法特講

# 兼任・兼任教員

※兼任・兼任・客員教員等は、指導教授に希望できません。

山田 理沙(やまだ りさ)	兼任講師	国立精神・神経医療研究センター 精神保健研究所 児童・予防精神医学研究部 リサーチフェロー	臨床心理学	臨床心理実習A(心理実践実習)、臨床心理実習B
山本 淳一(やまもと じゅんいち)	兼任講師	東京都立大学システムデザイン学部特任教授	臨床発達心理学、応用行動分析学	障害児心理学特講(福祉分野に関する理論と支援の展開)

## 共通科目

氏名	身分	現職(所属)	専門分野	担当科目
尹 智玆(ユン ジヒョン)	教授(文学部)	中央大学文学部教授	応用言語学、日本語教育学	特殊講義(留学生のためのアカデミック・ライティングⅠ 基礎編)、特殊講義(留学生のためのアカデミック・ライティングⅡ 実践編)
中野 玲子(なかの れいこ)	兼任講師	中央大学アカデミック・サポートセンター ライティング・ラボ スーパーバイザー	アカデミック・ライティング	特殊講義(アカデミック・ライティングの方法と実践)



中央大学 大学院事務室

〒192-0393 東京都八王子市東中野742-1

TEL 042-674-2613

▼中央大学 大学院

<https://www.chuo-u.ac.jp/academics/graduateschool/>



▼文系研究科 入試広報サイト

<https://sites.google.com/g.chuo-u.ac.jp/graduateschools-nyusikouhou/>



▼文系研究科 教員紹介サイト

<https://sites.google.com/g.chuo-u.ac.jp/gradbun-teachingstaff/>



▼文系研究科 公式Twitter (@CHUO\_Graduate\_S)

[https://twitter.com/CHUO\\_Graduate\\_S](https://twitter.com/CHUO_Graduate_S)



2024年4月発行